

KalpalatA と AvadAnamAlA の研究 (9) :
DevAtiśayastotra, SMRAM 第20章, TJAM 第14章
(II)

岡野, 潔
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/4067301>

出版情報 : South Asian classical studies. 15, pp.89-227, 2020-07-30. 九州大学文学部インド哲学史
研究室
バージョン :
権利関係 :

Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (9)
— Devātīśayastotra, SMRAM 第20章, TJAM 第14章 (II) —

九州大学 岡野 潔

本論文は三部から成る。第一部「ネパールの Avadānaśataka 系アヴァダーナマーラーの研究」では、『善説・偉大な宝珠アヴァダーナ・マーラー』 Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の第20章『園丁アヴァダーナ』 Mālikāvadāna の校訂研究を行う。そしてその章にはシャンカラ・スヴァーミン Śaṅkarasvāmin 作の『神に対する [仏の] 超越の讃』 Devātīśayastotra (別名 Devatāvimarśastuti) からの借用があることを報告する。

第二部「ネパールの梵文仏伝の研究」では、『如来出生アヴァダーナ・マーラー』 Tathāgatajanmāvadānamālā の第14章『 [菩薩が] 技芸と一切の学問を示しヤショーダラー女宝と夫婦になる品』の後半部分の梵文テキストの校訂と翻訳を行う。

第三部では、アペンディクス (付録) として、日本印度学仏教学会第70回学術大会パネル「アシュヴァゴーシャ研究の展開」(代表: 松田和信) において、筆者が「梵文 Ṣaḍgatikārikāḥ はアシュヴァゴーシャ作か」という題目で発表を行った時にハンドアウトとして会場で配付した原稿に少し修正を加えたものを示す。

第一部

ネパールの Avadānaśataka 系アヴァダーナマーラーの研究

- 略号 DS = Devātīśayastotra / Devatāvimarśastuti
SMRAM = Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (NGMCP B101/3)
MA = Mālikāvadāna (SMRAM の第20章)
MA(DS) = Mālikāvadāna の中の DS 相当箇所 (第148~167詩節)

ネパールで作られた梵文 avadānamālā 文献の一つ、『善説・偉大な宝珠アヴァダーナ・マーラー』 Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (略号: SMRAM) の第20章『園丁アヴァダーナ』 Mālikāvadāna の中に、シャンカラ・スヴァーミン Śaṅkarasvāmin 作の『神に対する [仏の] 超越の讃』 Devātīśayastotra (または『神格への吟味の讃』 Devatāvimarśastuti と名付けられる) の梵文テキストが、連続的にそのままの順序で借用されている

ことを筆者は気づいた。Mālikāvadāna の第148～167詩節に、その Devātīśayastotra の全部で21詩節から成るテキストのうちの、最後の第21詩節を除く第1～20詩節が利用されていることがわかった。

第20章 Mālikāvadāna のテキストは191詩節から成り、Avadānaśataka の第7話 Padmaḥ を韻文で再話した内容をもつ。この第20章は Avadānaśataka の第7話の話の筋に大体忠実な構成の仕方では話を組み立てているが、その章の中に、Avadānaśataka には無かった、話の新しい要素として、その Devātīśayastotra のテキストを利用している合計20の詩節から成る部分（第148～167詩節）がある。その借用部分はインド仏教文献学者にとって学問的に大変興味が惹かれる部分である。そこで本論文の第一部においてはまず I として、その20の詩節の部分に焦点をあてて、これまでに学界で校訂研究がなされた Devātīśayastotra の梵文テキストとの綿密な比較を行いたい。その比較の作業は Devātīśayastotra の梵文の再校定に役立つものである。それらの20の詩節に対する比較・吟味に基づいて、両テキストの再校定の作業を行った後に、それに関連して、筆者は Mālikāvadāna の章を含む SMRAM の筆記者・作者をめぐる問題、Jayamuni という人物の問題について、私見を述べたいと思う。あらゆる avadānamālā 文献には作者の名は記されておらず、SMRAM においてもそれは同様であるから、その作者の問題に踏み込むことは、ネパールの Avadānaśataka 系列の avadānamālā 文献群の成立の謎そのものに踏み込むことでもある。岡野 (2019) の論文に引き続き、Jayamuni という人物をめぐることで更に考察を行いたい。

その考察の後に、II として、Mālikāvadāna の全191詩節から成る章全体の校訂梵文テキストと和訳を示すことにしたい。

I 第20章 Mālikāvadāna と Devātīśayastotra の比較

I-1. Devātīśayastotra という作品

第20章 Mālikāvadāna の第148～167詩節に利用されていることがわかった Devātīśayastotra という作品についてまず説明したい。

Devātīśayastotra (別名 Devatāvimarśastuti) はインドの仏教徒 Śaṅkarasvāmin によって作られた、様々な技巧的な韻律を用いた¹⁾、韻文のみで出来た梵文の作品であって、漢訳は無いが、蔵訳がある。

1. 本作品の韻律は、第 1～6, 10, 21 詩節が Vasantatilaka ; 第 7, 9, 11, 14 詩節が Śārdūlavikrīḍita ; 第 8, 12, 15 詩節が Śikhariṇī ; 第 13 詩節が Upajāti ; 第 16 詩節が Pṛthvī ; 第 17, 20 詩節が Anuṣṭubh ; 第 18 詩節が Vaṃśastha ; 第 19 詩節が Āryā である。

この作品の名称について少し説明すると、Losang Norbu Shastri (1990) が初めて出版した梵文テキストが基づいた唯一のネパール写本には、コロフォンに Devatāvimarśastuti の名が記されていたため、その梵文を修正した Michael Hahn (2000) はその 1 写本の伝承どおりに作品名として Devatāvimarśastuti の名を用いた。しかし蔵訳が伝えるその作品の名称は Devātiśayastotra である。学問上は Devatāvimarśastuti と Devātiśayastotra のどちらの名称を使っても間違いではないことになるが、しかし第一に、Devatāvimarśastuti の名は現在知りうる限り、その 1 本のネパール写本にしか根拠が無く、ネパールで伝承される間に新たにそのように改名された可能性があること、第二に、そのネパール写本より遥かに古い、8 世紀頃に作られたその作品の蔵訳、ならびに Prajñāvarman の註釈の蔵訳において Devātiśayastotra の名が一貫して用いられていることから、インドでは少なくとも蔵訳が作られた時代に Devātiśayastotra の名で呼ばれていたことが確かと判断できること、それらの二つの理由から、より古い名である Devātiśayastotra の名称を用いた方がよいと私は思う⁽²⁾。

本稿では以下に、Śaṅkarasvāmin のこの作品の略号として DS を用いる。(この略号なら、Devātiśayastotra と Devatāvimarśastuti のどちらの作品名からも文句が出ないであろう。)

DS は『讃頌』(stotra, stuti) のジャンルに属する、ブッダを讃えるための作品であるが、この作品は仏という存在の偉大さを讃歎するための少し変わった手立てとして、ヒンドゥー教の神々の性質と比較して、彼らに対するブッダの性質の優越性を説くというやり方をとる。『讃頌』というインド仏教文献のジャンルには、仏教内部の同じ尊格への信仰をもつ者たちのコミュニティの内部で使われることを意識しながら、己が信じる尊格の徳性を高く讃えて功德を積むことを目的とする性格の作品が多いが、Śaṅkarasvāmin のこの讃頌はユニークにも、仏教徒としての自己の強い信仰の表明で終わることなく、ヒンドゥー教徒に向かって理性に訴えて仏教への改宗を促す目的をもっている。このような作品の性格は二つの宗教の間で悩み苦しんだ作者自身の経験に基づいているのであろう。

DS の作者である Śaṅkarasvāmin について、少なくとも確実に言いうることは、彼はバラモン出身であって、*Udbhaṭasiddhasvāmin (蔵訳で mtho btsun grub rje) という名の兄がいたことである。弟の Śaṅkarasvāmin がこの DS という讃頌を作ったのに対して、弟より遅れてシヴァ信仰から仏教に改宗したその兄は Viśeṣastava と Sarvajñamaheśvarastotra という二つの讃頌を作った。この学問あるバラモン兄弟がはっきり自分が仏教の

2. ただしこの作品の名称の問題に決着をつけるには、最近チベットで発見されたかも知れない DS 写本(注 9 を参照)やインド撰述の他の仏教文献中の引用などを調べて確認する作業が必要であろう。

優婆塞であることを自覚して作った、合計三つの梵文の讃は蔵訳されて、チベット大蔵経・丹殊爾の礼讃部 *bstod tshogs* の中に収められている（東北 No. 1109, 1111, 1112）。弟が作った DS と、兄が作った *Viśeṣastava* との、その二つの讃に対してはそれぞれ *Prajñāvarman* が作った註釈があり、その二つの註釈も蔵訳されて丹殊爾に収められている（東北 No. 1110, 1113）。この兄弟の伝記についてはターラナータの仏教史の第13章に記事があるが、ターラナータはその記事を書くにあたって *Prajñāvarman* のその2本の註釈を参照したようだ³⁾。なおこの DS の作者としての *Śaṅkarasvāmin* と、*Dignāga* 論理学の入門書『因明入正理論』*Nyāyapraveśaka* を作った *Śaṅkarasvāmin* との関係についてはターラナータも *Prajñāvarman* の註釈も何も記していない。

DS の成立年代については、その作品中にブッダをヴィシュヌ神を同一視する思想（ブッダをヴィシュヌ神のアヴァターラと見なす思想）についての言及があるため、DS が成立したのは、その思想がインドで知られつつあった時代と考えられる。DS の第14詩節 *pāda a* は次のように語る：「これはプラーナの聖典伝承であるが、生類から尊崇されるこのブッダとは、ハリ（ヴィシュヌ）であるそうだ」（*paurāṇī śrūtir eṣa lokamahito buddhaḥ kilāyaṃ harir*）。文献的に証明できる、ブッダ・アヴァターラの思想が出現した時代の上限は6世紀前半であり、それは *Bhavya*（清弁）の *Tarkajālā* における言及によってである⁴⁾。そのため DS の成立時期をそれ以前に置くことは躊躇われる。しかし DS が *Bhavya* よりも早く、5世紀かそれ以前にアヴァターラの思想の出現を告げる最も早い仏教文献である可能性もあろう。

I-2. DS のこれまでの研究

DS について行われたこれまでの研究について説明したい。1990年に *Losang Norbu Shastri* がインドの小さな出版社から550部を自費で出版した45頁の薄い本によって、西洋のインド学者たちに初めて、DSの梵文テキストの存在が知られるに至った。DS について蔵訳を用いた研究はそれ以前からすでに始まっていたもの⁵⁾、その出版本 *Shastri* (1990) が出るまで、西洋の学界では DS の梵文は失われたと見なされていた。

その *Shastri* (1990) の本は、DS の梵文と蔵訳の両テキストを対置し、また DS のヒンディー語訳と英訳を付けて、更に *Prajñāvarman* の DS の註釈の蔵訳の文の抜き書きを附

3. *Schneider* (1993), p. 11.

4. *Schneider* (2019) はヴィシュヌのアヴァターラ思想の観点から DS を検討している。

5. *Schneider* (2014: 3-4) は1990年以前にすでに幾つもの研究が DS の蔵訳に対して行われていたことを記述する。例えば DS の蔵訳の最初の英訳は1981年になされている：Library of Tibetan Works and Archives (1981).

録として付けた内容であった。その本の DS の梵文テキストは Shastri の記述によれば Nepal-Saṃvat 466年（西暦1345年）の日付をもつ、亡き Amogha Vajrācārya の所有していた1本のネパール写本に依るものである。この Shastri 本の梵文の出版の経緯と校訂の内容についてはよくわからない点があるが、それについては後で説明する。ドイツの Michael Hahn は、その Shastri の本を入手してその学術的重要性に気づき、DS の梵文テキストの修正に取りかかった。梵文 DS のデータについてはその本に記載されたテキストの情報にほぼ頼るしか無かったものの⁶⁾、Hahn は DS の蔵訳と註釈を丁寧に読んで、蔵訳からその梵文を再確認し、蔵訳との相違点があれば梵文の別の読みを推測するという手堅い手法によって、彼がほぼ満足できるまでに Shastri の梵文を修正し、新たな英訳をつけた新しい梵文テキストを、Hahn (2000) の論文として発表した。

Hahn は2014年に亡くなったが、ちょうどその年、Hahn の弟子 Johannes Schneider によって DS の蔵訳ならびに Prajñāvarman による註釈の蔵訳の校訂テキストと独訳が出版された。その研究 Schneider (2014) は DS の註釈文献に研究の力点を置いているが、Hahn (2000) の校訂梵文をさらに多少修正する提案も行っている (S. 164-167)。

I-3. DS の梵文写本について

こうして L.N. Shastri と Hahn の両者が発表した梵文テキストは、もとをただせば、わずか1本の DS のネパール写本に基づいている。その点についてもう少し説明したい。Shastri (1990) の本には、彼がどのようにこの本の出版に至ったのか、その経緯を自ら述べている英文の説明がある。Hahn (2000) の論文の中に Shastri が書いたその説明の英文が引用されているので、その英文をそのまま挙げると、次の通りである：

“The present Sanskrit version is based on the original Mss possessed by the late Amoghavajra Vajrācārya of Kāthesimbu resident of Kathmandu, Nepal. The Mss. were first published in the Journal ‘Sanskrit Sandeśa’. Dr. Jñāna Mani of Sanskrit Department, Tribhuvan University, Nepal kindly handed me a copy of “Vṛttamālāstutiḥ” by Mahapandita Sthavira Jñānaśrīmitra in which some portions of this text were published. Then through Mr. Kalsang Dorjee, a close friend of mine he later sent a complete copy of this texts by a later scholar on the ‘Sanskrit Sandeśa.’ Both these works were printed in two Bhujimol and Rañca scripts possessed by the late Amoghavajra Vajrācārya and dated in the Nepalese Year 466 i.e. 1345

6. ただし DS 第13詩節のみは Fleet によって *Indian Antiquary* に発表された碑文中の引用によって梵文が得られる。その碑文資料の存在は Shastri が気づいた。第13詩節以外の梵文はネパール写本のみが頼りとなる。

A.D.”

この英文は明瞭とは言いがたく、読んでも、Shastri が自分自身でその梵文写本を見ながら書き写したのかどうか、その肝心の点があはつきりしない。DS の梵文テキストが最初に Sanskrit Sandeśa という雑誌に掲載されたことがその英文には記されているが、その執筆掲載者は誰なのかが記されていない。その梵文の掲載者がもし Shastri 自身でなければ、Shastri が自ら DS の写本を見ていない可能性があり、Hahn はその点を疑っている。この英文には、その雑誌での発表に関する文の後に、Jñānaśrīmīra 作の Vṛttamālāstuti のコピー (a copy) — その中には DS の梵文のいくつかの部分が記されているらしい — を Dr. Jñāna Mani から Shastri が手渡されたこと、また最近の一人の学者 (a later scholar) によって Sanskrit Sandeśa 誌上に発表された「this texts」 (texts という複数形は恐らく Vṛttamālāstuti と DS の両方を意味するのであろう) の完全なコピー (a complete copy) を Ms. Kalsang Dorjee から Shastri が送ってもらったことが記される。そしてそれら2本の作品 (works) は、Bhujimol 文字と Rañca 文字で活字にされた (?) もので、亡き Amogavajra Vajrācāra の所有したものであり、ネパール暦466年 (すなわち西暦1345年) の日付があることが記される。

Shastri のこの不明瞭な英文から推測して、Shastri が実は DS のネパール梵文写本を自分で直接見て利用することが出来ず、Sanskrit Sandeśa という雑誌に印刷された DS のテキストと、Yogi Naraharinath による Vṛttamālāstuti の印刷されたテキストの二つのデータに頼って、彼の DS 梵文テキストを作ったのではないかと Hahn は考える⁽⁷⁾。私 (岡野) も Hahn が抱いたその疑念に同感であり、Shastri が Nepal-Samvat 466年つまり西暦1345年の日付をもつ古い写本を直接利用したのであれば、相当に質のよくない写本伝承に属していた写本であったにしても、梵語に習熟していない人が書いたようなつまらぬ誤りが多い点で、不自然であると思わざるを得ない。Shastri が発表した DS の梵文テキストは誤りがまだ多く含まれたものだったので、それらの誤りを修正した Hahn の功績は極めて大きい。

なお Hahn (2000) の後に出た Schneider (2014) の研究書を読むと、Schneider は Hahn の論文が表明している、Shastri が写本を自ら見ていないのではないかと、その重大な疑念については特に言及していない⁽⁸⁾。

7. Hahn (2000: 314) は次のように述べている。"My understanding is that Losang NORBU SHASTRI could not use the original manuscript but had to rely on the printed texts in the Journal *Saṃskṛtasandēśa* and in the edition of the *Vṛttamālāstuti* by Yogi NARAHARINATH."

8. Schneider (2014: 4) は、Shastri が1本のネパール写本によってその作品を発見し、その発見した作品をまず Sanskrit Sandeśa 誌に紹介した後、1990年にその仕事を自費出版したと、そう記して

I-4. 第1伝承と第2伝承を比較するための資料

以上、これまでの研究史を簡単に紹介したが、それから知られるように、Losang Norbu Shastri が発表した DS のテキストは元々 Amoghavajra Vajracāra の所有した 1 ネパール写本に基づいており、Hahn が発表したテキストはその Shastri 本を修正したものである。つまり二人のテキストは結局はネパールの 1 伝本に基づいているので、仮にそのテキストを「第 1 伝承」と呼ぶなら、今回新たに見つけた、Mālikāvadāna (略号 MA) の中にある DS に相当する梵文テキストは「第 2 伝承」と呼ぶことが出来る⁹⁾。

これらネパールの第 1 伝承と第 2 伝承を比較することによって、Hahn 校訂の梵文テキストにおいて、Hahn が修正した箇所の読みが正しかったことが確認できるし、また Hahn が気づかなかった新たな良い読みも見つけることが出来る。

以下に示す表 1 は、第 1 伝承と第 2 伝承の二つの伝承の違いをはっきりさせるために筆者が作成したものである。DS と MA とが重なり合う部分、すなわち MA 第 148～167 詩節の箇所について、各詩節ごとに、最初に第 1 伝承の代表である Hahn の DS 梵文テキストとその和訳を示し、二番目に第 2 伝承たる MA の DS 相当詩節の梵文テキスト・和訳を示し、三番目に DS の蔵訳テキスト (Schneider が校訂したもの) を示す。その下にそれら三種のテキストの異読情報を示す。さらに各詩節の最後に、文献学的なコメントを付す。

以下の表 1 で、梵文テキストの太字になっている箇所は、DS と MA の二つの伝承が違っている箇所である。またアスタリスク (*) が語頭につけられた語は、それが校定者による推測の読み (conjecture) であることを示す。

いる。Schneider がこのように簡単にあっさり書いて、Hahn とは違って Shastri と写本との関係について疑わずに済ませているのは、Hahn が知らなかった何か新しい情報を掴んでいるのかもしれない。ともかくこの問題に関する Hahn と Schneider の間の記述の違いに注意する必要がある。

9. 最近梵文 DS の写本がチベットで発見されたいことに注意する必要がある。2020年2月17日に復旦大学研究員の劉震氏が東京大学東洋文化研究所のセミナーに招かれ、「いくつかの仏教讃頌に関して」というタイトルで最近チベットで発見された一つの包みに入ったサンスクリット語写本を紹介した。その発見された写本の中には讃頌の作品が六つほどが入っており、その中に DS の写本も含まれていることが、東文研の大木康氏がその時発行した「東文研セミナー」の案内状の発表概要から知られる。その新たに出現した DS 写本はいわば「第 3 伝承」ということになるので、それをを用いて今後 DS のテキスト研究が更に進むことが期待される。

表 1

Devātīśayastotra 1 (= Devatāvimarśastuti, ed. by M. Hahn)

pratyakṣato na bhagavān sugato na viṣṇur

ālokyate na ca haro na hiraṇyagarbhah /

teṣām tu **rūpacaritātīśaya***prabhāvaṃ

śrutvā vicārayati ko guṇavān na veti //

視覚によって（直接知覚によって）世尊・善逝（仏）は視られることがなく、ヴィシュヌも、ハラ（シヴァ神）も、黄金の胎（ブラフマー神）も、[視られ]ない。しかるに彼らの姿かたちと行いの卓越した輝かしさを耳にして、どの者が徳性があり、[どの者が] そうでないかに [人は] 考えをめぐらせる。

Mālikāvadāna 148 (ed. by K. Okano)

saṃbuddha eva bhagavān suguṇī na viṣṇuḥ

saṃśasyate na ca haro na hiraṇyagarbhah /

teṣām tu **bhadracaritātīśayaprabhāvāñ**

chrutvā *vicārayati ko guṇavān na veti //

仏・世尊のみが善い徳性を持ち、ヴィシュヌは讃えられず、ハラ（シヴァ神）も、黄金の胎（ブラフマー神）も [讃えられ] ない。しかるに彼らの麗しい行いの卓越した輝かしさを耳にして、どの者が徳性があり、[どの者が] そうでないかに [人は] 考えをめぐらせる。

Tib. DS 1 [Lha las phul du byung bar bstod pa = *Devātīśayastotra] (ed. by J. Schneider)⁽¹⁰⁾

| bcom ldan **bde gshegs mngon sum ma** gyur khyab 'jug min |

| tshangs pa ma yin lha chen po yang ma **mthong ste** |

| de dag gi **gzugs** mthu dang spyod pa bsam pa rnam |

| thos nas su la yon tan yod dam med pa dpyad |

Devātīśayastotra 1

1c *°prabhāvaṃ] ex conī Hahn: °prabhāvān Shastri.

10. 本論文でこれ以降 *Devatātīśayastotra の蔵訳テキストとして挙げるのは、Schneider (2014) の校訂したテキストであり、蔵訳の 5 種の版本 (C, D, G, N, Q) の異読の情報についてはその書を参照されたい。

Mālikāvadāna 148

148b na ca haro na hiraṇyagarbhaḥ] Ms. N: na hiraṇyagarbhaḥ Ed.

148c teṣāṃ tu bhadra°] Ms.: teṣāṃ subhadra° N Ed.

148d *vicārayati] ex conī (cf. DS): vicāraya Ms.(ante corr.)⁽¹¹⁾: vicārayata Ms.(post corr. marg.) N Ed.

コメント 上記の DS と MA の詩節の相違について私のコメントを述べたい。pāda c で MA の °prabhāvāñ の読みは Shastri 本が伝える読み °prabhāvān と本来（写本伝承上では）同じであったと見てよいが、Hahn は Shastri 本の °prabhāvān の読みを *°prabhāvam という推測の読みへと修正した。なお蔵訳はこの第1詩節を見ても、すこし意識する傾向があつて一字一句すべて合致する程の厳密な訳し方をしていないことがわかる。pāda c の rūpacaritāṭisayaprabhāvam の蔵訳が梵文と同じ語順ではないが、それは恐らく訳し方の問題であつて、詩節全体の伝承としては、蔵訳はほぼ DS と同じ伝承であり、MA の読みとは異なると判断できる。つまり、DS のこの冒頭の詩節は特に MA によって修正する点は無いように思う。— さてこの第1詩節のいくつかの相違の中で最大の相違点は、pāda ab で DS の「眼で直接的に視られない」（pratyakṣato na [...] ālokyate）の読みが MA では「仏こそが讃えられる」（saṃbuddha eva [...] saṃśasyate）になっている点にあり、その MA の読み saṃbuddha eva は明らかに DS の読みを意図的に改竄することで生まれものと考えられる。私はこのような意図的な改変が MA でなされた理由として、次に述べる二つの理由を考える。第一に、MA のアヴァダーナではこの DS の第1詩節に相当する詩節を異教徒の在家信者に向かって語るのは、一人の仏教に改宗した園丁（庭師）なのである。園丁がここで仏は「眼で直接的に視られない」（pratyakṣato na [...] ālokyate）というような言葉を使うはずがない。なぜなら、このアヴァダーナのストーリーにおいてはこの園丁は、仏たる釈尊に実際に会って、そのお姿を眼で視たために、仏教徒に改宗できたのであるから。第二に、MA におけるこの改変は、次の理由もあつたのではないか。密教が盛んなネパールにおいて宗教者たちは「仏たちの姿はマンダラなどの姿で現前し、行者は仏の世界を直接視覚で見ることが出来るものだ」という密教の教義を基づいた修行をしており、ネパールの MA の写本の作者・筆記者もインド密教の「仏を視る」という教義に通じた人物であつたために、DS の「視覚で（直接）視ることができない」という表現を写本から削って、別の表現に変える必要があつたのではないか。「仏を直接じかに視覚として視る」ということに関わる表現は DS の第10詩節でも pāda b で出てくるが、MA はその箇所でも同じ様に故意に別の表現に変えてしまっている点が注意される。このように、DS のテキストのまま借用したのでは、

11. 記号の説明として、Ms.(ante corr.) は「Ms. 写本において写経生が書き直す前に書いた読み」、Ms.(post corr.) は「Ms. 写本において写経生が書き直した後の読み」、Ms.(post corr. marg.) は「Ms. 写本の余白に修正として記された読み」を意味する。

園丁の言葉として全く不自然になると MA の作者は感じた。そこで MA は「仏・世尊のみが善い徳性を持ち、ヴィシュヌは讃えられず、ハラ（シヴァ神）も、黄金の胎（ブラフマー神）も [讃えられ] ない」という表現に変えたのであろう。

Devātīśayastotra 2 (ed. by M. Hahn)

viṣṇuḥ samudyatagadāyudharaudrapāṇiḥ

śambhur vilagnanṛśiro'grakapālamālī /

ekāntaśāntacaritātīśayas tu buddhaḥ

kaṃ pūjayāma upaśāntam aśāntarūpam //

ヴィシュヌは振り上げたガダー（棍棒）の武器のある恐ろしい手をもつ。シャンブ（シヴァ神）は人間の頭頂部（生首?）・髑髏の数珠をつけている。しかるにブッダは完全に寂靜なる行為という卓越をもつ。我々は誰を供養しようか——寂靜なる者か、それとも寂靜ならざる姿をもつ者か。

Mālikāvadāna 149 (ed. by K. Okano)

viṣṇuḥ samudyatagado vighṛṇaiḥ pramāyī

rudro vibhūtyajakapāladharaḥ pramattaḥ /

ekāntaśāntacaritā<ti>śayas tu buddhaḥ

kaṃ pūjayemahi suśāntam aśāntarūpam //

振り上げたガダー（棍棒）をもつヴィシュヌは、非情の者たちを伴って、騙す者である。ルドラ（シヴァ神）は灰と不生者の髑髏をもち⁽¹²⁾、狂酔した者である。しかるにブッダは完全に寂靜なる行為という卓越をもつ。我々は誰を供養しようか——とても寂靜なる者か、それとも寂靜ならざる姿をもつ者か。

Tib. DS 2 (ed. by J. Schneider)

| khyab 'jug dpung drag mtshon cha dbyug to thogs par brtson |

| lha chen mi yi thod pa'i phreng ba rnams kyi bzhag |

| sangs rgyas cha lugs gcig tu zhi ba'i phul phyin na |

| nye bar zhi dang ma zhi gang la mchod par bya |

12. 「不生者の髑髏」はシヴァに首を切られたブラフマー神の髑髏を意味する。この文の表現がシヴァ神がブラフマー神の第5の頭を切り落とし、ブラフマー神の頭蓋骨を持って世界中を行乞にして回るというヒンドゥー神話に基づいていることを、横地優子博士から私信で私はご教授いただいた（博士の御親切に感謝します）。プラーナ中のこの話については、和訳として次の書の第5章2「ブラーフマナ殺し」（Kūrmapurāṇa 2.31, 横地優子訳）が参考になる：上村勝彦・宮元啓一編『インドの夢・インドの愛—サンスクリット・アンソロジー』春秋社、1994年。横地博士によればこの書で和訳された Kūrmapurāṇa の話の源は Skandhapurāṇa 1, 5-7 に求められる。

Devātīśayastotra 2

—

Mālikāvadāna 149

149a samudyatagada] Ms.: samudyatataho N Ed.

149b °kapāladharaḥ] Ms.: °kayoladharaḥ N Ed.

149c °caritā<*ti>śayas] ex conī (cf. DS): °caritāśayas Ms. N Ed.

コメント 本詩節の DS と MA の両伝承の相違は大きいですが、その相違する箇所どちらに蔵訳が合うかを調べると、蔵訳は全く DS の側に立つといえる。ただし DS の pāda b にある śiro'gra の語を蔵訳は訳していないが、訳さなくても差し支えない語と判断されたため、その語の翻訳が省かれたのであろう。また pāda c の carita を蔵訳はなぜか cha lugs (姿) と訳しているが、これは意識だろうか。— このように蔵訳が DS を支持することは、積極的な改変が MA の側で行われたことを示唆する。pāda ab における両テキストの大きな違いは明らかに改竄によって生じた性格のものである。ただしこのようになぜ改変しなければならなかったのか、その理由はよくわからないが、ヴィシュヌ神とシヴァ神の持ち物などの表現に関して、例えば DS の gadāyudha 「棍棒の武器」の表現では ayudha の語は無くてもよい（詩として無駄な）語であるし、また nṛśiro'gra-kapālamālī 「人間の頭頂部・髑髏の数珠をもつ」の表現でも、単に同じ意味の語を二つ連ねているように見えるので¹³⁾、それらの点で DS の表現に不満を感じたため、MA の改竄者はその箇所の表現を自分の好みに——もしくはネワール人にとっての中世以降のシヴァ神の姿の典型と思われるようなイメージに——合うように変更したのではないだろうか。また pāda d に見られる両者の読みの違いは、故意の改変によるものというより、写本伝承上で自然に生じた性格のもののように思える。— なお DS の pāda a の gaḍā (棍棒) の語を DS 註釈の蔵訳は 'khor lo つまり *cakra (輪、戦輪) と訳しているという、気になる相違点を Schneider は指摘する (S. 14)。四臂の Viṣṇu 神は手に持つ武器として、Sudarśana という名の戦輪と、Kaumodakī / Kaumodī という名の棍棒をもつことが知られている。

13. ただし nṛśiro'gra と kapāla の二つの語はここで単に髑髏の同義語として並んでいるわけではなく、nṛśiro'gra は生首を意味しているかもしれない。つまりシヴァ神の持ち物としての生首の数珠と髑髏の数珠を別々に表現している可能性がある（横地博士からのご教示）。

Devātiśayastotra 3 (ed. by M. Hahn)

duryodhanādikulanāśakaro **babhūva**

viṣṇur haras tripuranāśakaraḥ **kilāsīt** /

krauñcaṃ guho 'pi dṛdhaśaktihatam cakāra

buddhas tu kevalam ayaṃ jagato hitaiṣī //

ヴィシュヌはドウルヨーダナなどの一族を滅亡させた者であった。ハラ（シヴァ神）はトリプラの破壊者であったと伝わる。グハ（スカンダ神）はクラウンチャを固い槍で刺し殺した。このブッダのみが純粋に、生類に益することを願った。

Mālikāvadāna 150 (ed. by K. Okano)

duryodhanādinṛpanāśakaraḥ **sa cakrī**

<*viṣṇur> haras tripura*nāśakaraḥ **pinākī** /

krauñcaṃ guho 'pi dṛdhaśaktihatam cakāra

buddhas tu kevalam *ayaṃ jagatām hitaiṣī //

戦輪をもつかの<ヴィシュヌ>はドウルヨーダナなどの王たちを滅亡させた者であった。ピナーカ（棍棒の名）をもつハラ（シヴァ神）はトリプラの破壊者であった。グハ（スカンダ神）はクラウンチャを固い槍で刺し殺した。このブッダのみが純粋に、生類に益することを願った。

Tib. DS 3 (ed. by J. Schneider)

| khyab 'jug gis ni 'thab dka' la sogs **rigs rnam**s brlag par **gyur** |

| lha chen pos ni grong khyer sum brtsegs bcom par gyur **ces grag** |

| skem byed kyis kyang mdung thung 'jebbs bsnun khrung khrung bsad par gyur |

| sangs rgyas nyag gcig 'gro la sman pa thams cad mdzad pa lags |

Devātiśayastotra 3

—

Mālikāvadāna 150

150b <*viṣṇur> haras] ex conī (cf. DS): haras Ms. N Ed. || *°nāśakaraḥ] ex conī (cf. DS): °nāśakaḥ Ms. N Ed.

150c °śaktihatam] Ms.: °śaktihate N Ed.

150d tu kevalam *ayaṃ] ex conī (cf. DS): tu kevalam ayastu Ms.: te kavalamayastu N A': tokavalamayastu Ed.(i.e. Takahata's corr. for A') || hitaiṣī] corr.: hiteṣī Ms. N Ed.

コメント MA の pāda b で、あるべき viṣṇur の語が欠けている。韻律上の必要から、私は DS を見て viṣṇur の語を文に補ったが、意味だけを見れば sa cakrī（戦輪をもつかの者 [すなわちヴィシュヌ]）の語があるので、viṣṇur の語を必ずしも補う必要はない。つまり pāda b に viṣṇur の語があれば、pāda a の sa cakrī の語は余計であるといえる。MA

の sa cakrī の伝承は DS の babhūva の伝承より悪いものである。MA の作り手によって DS の babhūva から MA の sa cakrī の表現へと変更（改竄）がなされた時、彼は sa cakrī の語があるから viṣṇur の語が不要になったかのように、viṣṇur をうっかり削ってしまったのだろう。そのため MA は pāda b に韻律的な欠陥が生じたのであろう（そのため私は MA に <*viṣṇur> の語を補ったが、写本ではその語は無い）。つまりこの詩節の前半では明らかに MA の伝承は DS の伝承が改悪されて出来たものと考えられる。本詩節の両伝承の相違点に注意して蔵訳を見ると、蔵訳の rigs nams は kula を訳し、gyur は babhūva を訳し、ces grag は kila を訳しているから、蔵訳はどれも DS の方の読みを支持する。DS のこの第 3 詩節は特に MA によって修正する点は無いようだ。

Devātiśayastotra 4 (ed. by M. Hahn)

pīḍyo mamāyam ayam eva ca rakṣaṇīyo
 vadhyo 'yam ity api surottamanītir eṣā /
 niḥśreyasābhyudayasaukhyahitaika*buddher
 buddhasya naiva ripavo na ca **vañcanīyāḥ** //

「私にとって、こいつは苦しめられるべきであり、こいつは護られるべきであり、こいつは殺されるべきだ」——これが神々の最高者の行動のしかたである。至福（解脱）と増進（繁栄）の幸せに益することを、ただ一つの思いとしてもつブツダにとって、敵である者たちもおらず、騙すべき者たちもいない。

Mālikāvadāna 151 (ed. by K. Okano)

pīḍyo mamāyam ayam eva tu rakṣaṇīyo
 vadhyo 'yam ity api surottamanītir eṣā /
 niḥśreyasābhyudayasaukhyahitaika*buddher
 buddhasya naiva ripavo na hi ***vañchanīyāḥ** //

「私にとって、こいつは苦しめられるべきであり、こいつは護られるべきであり、こいつは殺されるべきだ」——これが神々の最高者の行動のしかたである。至福（解脱）と増進（繁栄）の幸せに益することを、ただ一つの思いとしてもつブツダにとって、敵である者たちもおらず、好もしい者たち（愛すべき味方）もいない。

Tib. DS 4 (ed. by J. Schneider)

| nga yis 'di la gnod bya 'di nyid bsrung bya 'di |
 | gsad bya zhes pa lha yi mchog gi gzhung lugs yin |
 | sangs rgyas la ni dgra dang **mdza' bshes** mi mnga' bar |
 | nges par legs dang mngon par mtho bas phan 'dogs mdzad |

Devātīśayastotra 4 4a rakṣaṇīyo] Hahn: rakṣaṇīyaḥ Shastri. 4c *°buddheḥ] Hahn: °buddhaiḥ Shastri.
Mālikāvadāna 151 151a pīḍyo] Ms.: pīḍyā Ed. 151c °sābhyudaya°] Ms.: °sātyudaya° Ed. *°buddher] ex conī: °buddhir Ms. Ed. 151d vāñchanīyāḥ] corr.: vañchanīyāḥ Ms.(ante corr.): vandhanīyāḥ Ms. (post corr. marg.): vandhanīyā N: vaṃ Ed.
Tib. 4 - Remarks by Schneider (S. 164): 4c mdza' bshes = *vāñchanīyāḥ? (instead of vañchanīyāḥ Shastri/Hahn).

コメント この詩節では pāda d の vañcanīyāḥ / vāñchanīyāḥ の相違点だけがある。蔵訳はその語を mdza' bshes 「友人」と訳して、梵文の pāda d を「ブツダには敵も友人もない」の意味に取る。Schneider が既に指摘していたように (S. 14, 164)、蔵訳 mdza' bshes は vāñchanīyāḥ の訳であろう。Schneider のその推測は今回 MA によって正しさが証明されたことになる。つまりこの相違箇所では DS よりも MA の読みのほうが、蔵訳と合致する読みであることがわかる。この DS 第 4 詩節は MA のとおりに読むべきである。

Devātīśayastotra 5 (ed. by M. Hahn) rāgādidoṣa* janakāni *vacāṃsi viṣṇor unmattaceṣṭitakarāṇi ca yāni śambhoḥ / niḥṣeṣadoṣa*śamakāni tathāgatasya *vandyatvam arhati na ko 'tra vicārayadhvam / ヴィシュヌの言葉は情欲などの悪徳を生じさせる。またシャンブ（シヴァ神）のそれ（言葉）は狂った振舞いをさせる。如来のそれはあらゆる悪徳を鎮める。ここであなた方は熟考すべきである、[それらのうちの] 誰が、拝礼されるに <u>値しない者なのかを</u> 。
Mālikāvadāna 152 (ed. by K. Okano) rāgādidoṣa janitāni vacāṃsi viṣṇor unmattaceṣṭitakarāṇi ca yāni śambhoḥ / niḥṣeṣadoṣaśamakāni tathāgatasya vandyatvam arhati ca ko 'tra vicārayadhvam // ヴィシュヌの言葉は情欲などの悪徳から生まれ出たものである。またシャンブ（シヴァ神）のそれ（言葉）は狂った振舞いをさせる。如来のそれはあらゆる悪徳を鎮める。ここであなた方は熟考すべきである、[それらのうちの] 誰が、拝礼されるに <u>値する者なのかを</u> 。

Tib. DS 5 (ed. by J. Schneider)

| khyab 'jug tshig ni 'dod chags la sogs skyon rnam**s bskyed** |

| lha chen po yi byed spyod gang yin smyon pa bzhin |

| de bzhin gshegs pa nyes pa ma lus sel mdzad na |

| su zhis ston pa chen por 'os pa dpyad par gyis |

Devāīśayastotra 5

5a *°janakāni *vacāṃsi] ex conī Hahn: °janitāni ca yāni Shastri.

5c *°śamakāni] ex conī Hahn: °samayāni Shastri.

5d *vandyatvam] ex conī Hahn: bandhatvam Shastri.

Mālikāvādāna 152

152a vacāṃsi] corr.: vacānsi Ms. N Ed.

152c niḥśeṣa°] Ms. Ed.: niśeṣa° N || °śamakāni] Ms.: °śamakārīta N: °śamakārīta Ed.

152d arhati ca] Ms. Ed.: arhati va N.

コメント pāda a で Hahn は Shastri 本がもつ janitāni の読みを *janakāni という推測の読み修正するが、MA の読みは Shastri 本の読みと一致する。janitāni の読みを採る場合、「ヴィシュヌの言葉は情欲などの悪徳から生じたものである」と訳せるので、それでも意味が通るが、Hahn は脚注 25 でその可能性も認めつつも、蔵訳 bskyed から *janakāni の方が望ましいとする。たしかに文脈的には「[人々に] 悪徳を生じさせる」の意味のほうが適しているかもしれない。「悪徳を生じさせる」というヴィシュヌ神に対するやや過激な表現を嫌った後の時代のネパール人によって、「[自己の] 悪徳から生じた」janitāni という、より大人しい表現へと文が変えられたという可能性があろう。— また Hahn は Shastri 本の読みを、蔵訳に基づく推測により、pāda a で ca yāni → *vacāṃsi と、また pāda c で samayāni → *°śamakāni と、また pāda d では bandhatvam → *vandyatvam と修正するが、これらの Hahn の修正の正しさが今回 MA によって確認された。pāda d における ca と na の相違は、文に否定辞の na が無くて ca と読んでも意味が通る。蔵訳にもその文に否定辞は無い。このように MA は Shastri 本に基づいた写本よりも良い伝承を保っている箇所をもつことが確認される。私はこの DS 第 5 詩節は、*janakāni の語以外は MA の伝承の通りに読んでよいと思う。

Devātiśayastotra 6 (ed. by M. Hahn)

yaś codyataḥ para*vadhāya ghr̥ṇām vihāya
trāṇāya yaś ca **kṛpayā vidhiṣu** pravṛttaḥ /
rāgī ca yo bhavati yaś ca vimuktarāgaḥ
pūjyas *tayoh ka iha taṃ vadatānucintya //

一方の者は憐愍を捨てて、他者を殺すために努力するが、他方の者は救済のために、憐れみにより種々の行為において活動する。また一方の者は情欲を有するが、他方の者は情欲から解き放たれている。その両者のどちらが供養に値するか、ここでよく考えて、彼 [の名] を言ってみなさい。

Mālikāvadāna 153 (ed. by K. Okano)

yaś codyataḥ paravadhāya ghr̥ṇām vihāya
trāṇāya yaś ca **jagataḥ kṛpayā** pravṛttaḥ /
rāgī ca yo bhavati yaś ca vimuktarāgaḥ
pūjyas tayoh ka iha taṃ vadatānucintya //

一方の者は憐愍を捨てて、他者を殺すために努力するが、他方の者は救済のために、生類への憐れみにより、活動する。(残りの文は上記の DS の訳と同じ)

Tib. DS 6 (ed. by J. Schneider)

| gang zhig brtse med gzhan la gnod par brtson pa dang |
| gang la 'gro ba dag ni skyabs su song gyur pa |
| 'dod chags bcas dang gang zhig 'dod chags rnam bral ba |
| de las gang zhig 'di na mchod bya soms te smros |

Devātiśayastotra 6

6a *°vadhāya] ex conī Hahn: °vadhāva Shastri.

6d pūjyas *tayoh] ex conī Hahn: pūjyasttayo Shastri.

Mālikāvadāna 153

153a paravadhāya] Ms.: parivadhāya N Ed.

153b pravṛttaḥ] Ms. Ed.: pravṛtaḥ N.

153d pūjyas] Ms.: pūjyaṃs N Ed.

Tib. 6 - Remarks by Schneider (S. 164):

6b 'gro ba dag ni skyabs su song gyur pa (see Ṭikā). = *yaṃ ca *jagataḥ *śaraṇaṃ *pravṛttāḥ?
(instead of yaś ca kṛpayā vidhiṣu pravṛttaḥ, Shastri/Hahn).

コメント この詩節では pāda a で Hahn は Shastri 本 DS の °vadhāva の読みを *°vadhāya と修正したが、MA はその Hahn の推測を支持する。次に pāda b において MA は

jagataḥ kṛpayā とするのに DS は kṛpayā vidhiṣu とする相違があるが、蔵訳の 'gro ba dag は MA の jagataḥ の読みを支持するので、MA の読みの方がより良い、採用すべき読みと見なしうる。Schneider もこの pāda b の箇所における梵文 DS と蔵訳の違いを問題視して、DS とは異なる梵文の推測を試みて、蔵訳から trāṇāya *yam ca *jagataḥ *śaraṇam *pravṛttāḥ という文を予想しているが (S.14)、MA の読みが出て来た以上は、むしろその MA の読みに従うのがよい。この DS 第 6 詩節は MA の通りに読んでよい。

Devāṭīśayastotra 7 (ed. by M. Hahn)

śakraṃ vajradharaṃ balaṃ haladharaṃ kṛṣṇam sacakrāyudhaṃ

skandaṃ śaktidharaṃ śmaśānanilayaṃ rudraṃ trīsūlāyudhaṃ /

etān duḥkhabhayā**rtitān** gataghṛṇān bālān vicitrāyudhān

nityaṃ prāṇivadhō*dyatapraharaṇān kas tān namasyed budhaḥ //

金剛を手にするシャクラ (インドラ神)、すきを手にするバラ (バララーマ)、戦輪の武器をもつクリシュナ、槍を手にするスカンダ、墓場を住所にして三叉戟の武器をもつルドラ、——これらの、苦しみと恐怖によって苦しめられた、憐愍無く、子供っぽい、様々な武器をもつ、常に生き物を殺すために武器を振り上げる彼らを、いかなる賢者が礼拝しようか。

Mālikāvadāna 154 (ed. by K. Okano)

śakraṃ vajradharaṃ balaṃ haladharaṃ kṛṣṇam **ca** cakrāyudhaṃ

skandaṃ śaktidharaṃ śmaśānanilayaṃ rudraṃ trīsūlāyudhaṃ /

etān duḥkhabhayā**nkitān** gataghṛṇān bālān vicitrāyudhān

nityaṃ prāṇivadhodyutapraharaṇān kas tān namasyed budhaḥ //

金剛を手にするシャクラ (インドラ神)、すきを手にするバラ (バララーマ)、また、戦輪の武器をもつクリシュナ、槍を手にするスカンダ、墓場を住所にして三叉戟の武器をもつルドラ、——これらの、苦しみと恐怖によって特徴づけられた、憐愍無く、子供っぽい、様々な武器をもつ、常に生き物を殺すために武器を振り上げる彼らを、いかなる賢者が礼拝しようか。

Tib. DS 7 (ed. by J. Schneider)

| brgya byin rdo rje thogs shing stobs can gshol thogs khyab 'jug 'khor lo'i mtshon thogs dang |

| skem byed mdung thung thogs shing lha chen rtse gsum mtshon thogs dur khrod gnas gyur pa

|| de dag byis pa snying brtse med pa sna tshogs mtshon thogs sdug bsngal 'jigs pas **nyen** |

| rtag tu srog chags 'joms par brtson pa de la mkhas pa su zhig 'dud par byed |

Devāṭīśayastotra 7

7d °vadhō*dyatapraharaṇān] Hahn: °vadhosyata prahanān Shastri.

Note 7c etān] Read *evam (?), instead of etān. Hahn, p. 321, note 33.

Mālikāvadāna 154

154b śmaśānanilayaṃ] Ms.: śmaśānavilayaṃ N Ed.

154d vadhodyuta°] Ms.: vadhodyute N Ed.

コメント DS pāda a の **sacakrāyudhaṃ** の読みに対して MA は **ca cakraṃyudhaṃ** という新しい読みを提供するが、私は **cakraṃyudhaṃ** を Bahuvrīhi にする MAの方がスマートな良い読みだと思う。sa の語は無駄であり、詩の価値を下げる。—次に pāda c で °ārtitān / °āṅkitān の相違が問題になるが、これは Shastri と Hahn の読み °ārtitān のほうが、蔵訳の nyen という訳語に支持されているので、MA の °āṅkitān の読みより古いと判断できる。ただし °āṅkitān と読んでも意味は通る。次に pāda d で Hahn は Shastri 本がもつ **prāṇivadhosyata prahanān** の読みを、彼の推測による読み **prāṇivadhō*dyatapraharaṇān** に修正しているが、MA の読みはその Hahn の推測の読みの正しさを証明するものである。この DS 第7詩節は、°āṅkitān の語以外は MA のように読むべきであろう。

Devāṭīśayastotra 8 (ed. by M. Hahn)

na yaḥ śūlaṃ dhatte na ca ***yuvatiṃ** *āṅke suvadanāṃ
na cakraṃ śaktiṃ vā na ca kuliśaṃ ugraṃ na ca halaṃ /
vinirmuktaṃ kleśaiḥ parahitavidhānodyatadhiyaṃ
śaraṇyaṃ lokānāṃ tam ṛṣim upayāto 'smi śaraṇam //

〔三叉〕 戟を持っておらず、美貌の若い女を膝の上に載せておらず、戦輪あるいは槍を、あるいは恐ろしい金剛を、あるいはすきを持っておらず、煩惱から解放されており、利他の行為に熱心な思いをもつ、生類が依るべき処（婦依処）であるかの聖者（仏）に、私は依り処として近づいた（婦依をなした）。

Mālikāvadāna 155 (ed. by K. Okano)

na yaḥ śūlaṃ dhatte na ca **suratiṃ** āṅke suvadanāṃ
na cakraṃ śaktiṃ vā na ca kuliśaṃ ugraṃ na ca halaṃ /
vinirmuktaṃ kleśaiḥ parahitavidhānodyatadhiyaṃ
śaraṇyaṃ lokānāṃ tam ṛṣim upayāto 'smi śaraṇam //

〔三叉〕 戟を持っておらず、とても快樂を楽しむ美貌の女を膝の上に載せておらず、（残りの文は上記の DS の訳と同じ）

Tib. DS 8 (ed. by J. Schneider)

| gang zhig rtse gsum mi bsnam **chags bcas** mchan na chung ma med |
| 'khor lo mdung thung rdo rje drag po dang ni gshol mi bsnam |
| nyon mongs rnam grol **mkhas pa** gzhan la phan 'dogs rnam par brtson |
| jig rten skyabs gyur drang srong de la **'dir ni** skyabs su **mchi** |

Devātīśayastotra 8

8a *yuvatim *aṅke suvadanām] ex conī Hahn: yuvatisahe suvadanā Shastri.

Mālikāvadāna 155

155a suvadanām] Ms. Ed.: suvadatām N.

155b ugraṃ na ca] Ms.: ugraṃ rava N Ed.

155c kleśaiḥ] Ms. Ed.: keśaiḥ N || °nodyatadhiyaṃ Ms.: °nādyatadhiyaṃ N Ed.

155d śaraṇyaṃ] Ms. Ed.: śaraṇya N || upayāto 'smi] corr.: upayātāsmi Ms. N Ed.

Tib. 8 - Remarks by Hahn (p. 321):

8c mkhas pa = *paṭum or *kṛpaṃ? (instead of dhiyaṃ, 8c).

8d 'dir ni ... mchi = *iya yāto? (instead of upayāto, 8d).

コメント pāda a において Hahn 校訂 DS の *yuvatim よりも MA の suratiṃ の読みのほうが正しい読みである可能性が高い。MA が suratiṃ という新たな読みを提供したことにより、蔵訳が chags bcas と訳した理由が見つかるからである。DS の pāda a には蔵訳の chags bcas の訳語に合致する語が無いので、なぜ蔵訳がそう訳したのか、MA のこの読みが出るまでは不明であって、Hahn は脚注39で suvadanām の代わりに *suramaṇām という読みを推測していた。一次に pāda c の °dhiyaṃ の箇所が蔵訳とよく合わないが、少なくともその箇所については MA の読みは DS と同じである。Hahn は脚注40で、蔵訳に mkhas pa (に学識ある、に精通する) と訳されている DS の °dhiyaṃ の読みに疑いをもって、別の読みの可能性 (*°paṭum または *°kṛpaṃ と読む) を示唆している。

Devātīśayastotra 9 (ed. by M. Hahn)

rudro rāgavaśāt striyaṃ vahati yo <--> hriyā varjito

*viṣṇuḥ krūratarah kṛtaghnacaritaḥ skandaḥ svayaṃ *jñātihā /

*krūrāsya mahiśāntakṛṇ naravasā *māmsāsīnī pārvaṭī

pānepī ca vināyako daśabale svalpo 'pi doṣo 'sti kaḥ //

ルドラは情欲のゆえに女を〔膝に〕のせ、(・・欠・・)であり、羞恥心を欠いている。ヴィシュヌはより一層残酷であり、恩知らずな行為をし、スカンダは自ら親族を殺した。残酷な顔をもつ女パールヴァティーはマヒシャを殺し、人間の脂肪と肉を食べる。ヴィナーヤカは飲むことを好む。〔それにひきかえ〕十力(仏)においては、わずかであっても、どんな悪徳があるか。

Mālikāvadāna 156 (ed. by K. Okano)

rudro rāgavaśāt striyaṃ vahati yo *himsro hriyā varjitā

viṣṇuḥ krūratarah kṛtaghnacaritah skandhah svayaṃ jñātihā /

krūrāsya mahiśāntakṛn naravaśāmāṃsāsīnī pārvatī

pānepī ca vināyako daśabalo srasto 'py adoṣah suhṛt //

ルドラは情欲のゆえに女を〔膝に〕のせ、残忍であり、羞恥心を欠いている。ヴィシュヌはより一層残酷であり、恩知らずな行為をし、スカンダは自ら親族を殺した。残酷な顔をもつ女パールヴァティーはマヒシャを殺し、人間の脂肪と肉を食べる。ヴィナーヤカは飲むことを好む。〔それにひきかえ〕十力(仏)はくつろいでいても、欠点のない親友である。

Tib. DS 9 (ed. by J. Schneider)

| lha chen 'dod chags dbang gyur ngo tsha spangs shing co 'dri chung ma len par byed |

| khyab 'jug lhag par gtum zhing byas pa chud gson skem byed rang gi gnyen yang gsod

| | dka' bzlog khro zhing ma he gsod byed ma mo rnams ni mi yi sha tshil za |

| log 'dren chang dad che yi stobs bcu ldan la nyes pa chung ngu'ang 'ga' mi mnga' |

Devātīśayastotra 9

9b *viṣṇuḥ] ex conī Hahn: viṣṇu° Shastri. || *jñātihā] ex conī Hahn: jñātihato Shastri.

9c *krūrāsya] ex conī Hahn: krūrasyā Shastri || *°māṃsāsīnī] ex conī Hahn: °māṃsanī Shastri.

Mālikāvadāna 156

156a *himsro] ex conī: himsyā Ms. Ed.: hisyā N.

156b °jñātihā] Ms.: °jñātiha N Ed.

156c °māṃsāsīnī] corr.: °mānsāsīnī Ms. N Ed.

156d °balo srasto hy adoṣah suhṛt] Ms.(post corr.): °balo s[v]a[tt]o hy adoṣo 'sti kaḥ Ms.(ante corr.): °balo sraṣṭo hy adoṣah suhṛt N: °balo srasto hy adoṣah suhṛt Ed.

Tib. 9 - Remarks by Hahn and Schneider:

9a co 'dri = *bādhi, *drohī or *himsro? (for <-->). Hahn, p. 322, note 41.

9c dka' bzlog khro = *krūromā? (instead of krūrāsya). Schneider, S. 165.

9c ma mo rnams = *mātarah? (instead of pārvatī). Schneider, S. 165.

コメント Hahn の校訂した Shastri 本 DS には、pāda a の yo の後の 2 音が欠損していた。Hahn は脚注41でその 2 音を埋める候補として、蔵訳 co 'dri から推測して、*bādhi または *drohī または *himsro の語を挙げている。MA によって、Hahn が考えたそれら 3 候補のうち、*himsro が正しい読みであったことがわかったのは大きな収穫である。一次に pāda b で Hahn は Shastri 本の jñātihato の読みを jñātihā と修正したが、MA はその Hahn の推測の正しさを支持する。同様に pāda c の *krūrāsya でも、また

*°māṃsāsīnī でも MA によって Hahn の推測の正しさが証明された。—次に、pāda d の daśabale svalpo 'pi doṣo 'sti kaḥ の箇所は、DS の方ではそのように正しく読みが伝承されているが、MA の方では、その MA 写本の筆記者 (Jayamuni) が筆写に利用した DS 写本のその箇所が文が恐らく崩れていたため、その筆記者は書きながら意味がわからずに困ったらしい。彼は最初に daśabalo s[v]a[tt]o hy adoṣo 'sti kaḥ と書いたが、それでは文の意味が通らないことに悩んで、その後テキストの改変を行った。すなわち s[v]a[tt]o の箇所に線を引き、それを修正した新たな読みとして srasto と余白に書いた。文末の 'sti kaḥ も修正して、余白に suhṛt と書いた。つまり理想的には MA の筆記者は最大限に DS に近い読みを保持したままでなんとか修正を試みるべきであったが、彼はその試みがここでは容易ではないと見て取ったのであろう、その試みをあっさり放棄してしまった。彼は DS のように *daśabale *svalpo *'pi *doṣo 'sti kaḥ と修正して読むべきところを、大胆にも、daśabalo srasto 'py adoṣaḥ suhṛt と、大きく違った表現へと無理やり修正してしまったのである。この強引すぎる修正後の読みの意味は「十力 (仏) はくつろいでいても (リラックスしていても)、欠点 (悪徳) のない親友である」であろう。MA 写本の筆記者である Jayamuni が利用した写本には DS の正しい読みがそのように崩れてしまった文として記されていたらしく思われるが、彼はこのように写本でよく読めない箇所をほっておくことができず、自由に作文して一応意味が通る文に変えてしまった。筆記者 Jayamuni はこのように写本の読めない箇所の修正 (もしくは改竄) に積極的な人物であったことがわかる。

Devātiśayastotra 10 (ed. by M. Hahn)

bandhur na me sa bhagavān ripavo na cānye

sākṣān na dṛṣṭacara ekataro 'pi caiṣām /

śrutvā vacaḥsucaritātiśayaprabhāvaṃ

buddhaṃ guṇātiśayalolatayā śritāḥ smaḥ //

私にとってかの世尊は親族ではないし、他の者たち (外道の徒) は敵ではない。直接じかにその [行為の] 一つすら見たのではないが、言葉と善き行為における卓越した偉大さを持つお方であることを聞いて、徳性の卓越を望むが故に、ブッダに私たちは帰依する。

Mālikāvādāna 157 (ed. by K. Okano)

bandhur na *me sa bhagavān na ripur na cānyaḥ

śāstā trilokagurur ekatamo 'pi dhīraḥ /

śrutvā vacaḥsucaritātīśayaprabhāvaṃ

buddhaṃ guṇātīśayalobhatayāśritāḥ smaḥ //

私にとってかの世尊は親族ではないし、他の者たち（外道の徒）は敵ではない。或る一人の賢者であっても、教師・三界の師父であって、言葉と善き行為における卓越した偉大さを持つお方であることを聞いて、徳性の卓越を貪求するが故に、ブッダに私たちは帰依する。

Tib. DS 10 (ed. by J. Schneider)

| bcom ldan de ni bdag gi gnyen min* gzhan dag dgra ma yin |

| de dag gi spyod gzhan yang mngon sum gyur par ma mthong ste |

| tshig dang spyod pa dag gi so so'i khyad par thos pa las |

| sangs rgyas yon tan phul du phyin la dad phyir bdag rten lags |

Devātīśayastotra 10

10c vacaḥsucaritā°] corr. Hahn: vacaḥ sucāritā° Shastri.

Mālikāvādāna 157

157a na *me] ex conī (cf. DS): nase Ms.: nabhe N Ed.

コメント DS pāda a の ripavo na cānye の読みに対して、MA は na ripur na cānyaḥ とするが、蔵訳 gzhan dag dgra ma yin は DS の方の読みを支持する。一次に pāda b で DS と MA の梵文が大きく違っているが、蔵訳は DS の sāksān na dṛṣṭacara [...] caiśām の梵文の方に合致する。仏を直接視ることに関わる表現が DS に出てくる場合、MA では別の表現に故意に変えられてしまっていることは、上記の DS 第1詩節でも起こっている（上記の DS 第1詩節へのコメントを参照）。DS は「私は仏の行為を直接視たわけではない」と語るが、MA のアヴァダーナでは、その言葉を語る人物である園丁が仏教に改宗する際に仏と出会い、仏を視ている以上、その点で MA は文を改変せざるを得なかった。一次に pāda d の lobhatayā と lolatayā の相違については、蔵訳はその語を dad phyir と訳しているので、DS の lolatayā の読みの方に軍配が上がる。本詩節では MA は少なくとも pāda ab の箇所は故意に新しい読み書きに変えられているが、pāda d における読みの違いは恐らく意図的な改変の結果ではないであろう。一応、本詩節は部分的に改竄を受けた詩節の一つと見なしうる。

Devātiśayastotra 11 (ed. by M. Hahn)

nāsmākaṃ sugataḥ pitā na ripavas tīrthyā dhanam naiva no
dattaṃ tena tathāgatena na hr̥taṃ kiṃ *cit kaṇādādibhiḥ /
kiṃ tv ekāntajagaddhitaḥ sa bhagavān buddho yataś *cāmaḥ
vākyam sarvamaḥāpāhāri ca yatas tadbhaktimanto vayam //

善逝（仏）は私たちの父ではないし、外道の徒は敵ではない。かの如来から施しが
私たちに与えられたわけでもないし、カナダなどの〔外道の徒〕から〔私たちは〕
何一つ奪われたわけでもない。しかしながら、かの世尊・ブッダは専一に生類の益を
なす者である故に、また〔彼の〕汚れなき言葉はすべての汚れ（煩惱）を取り去るも
のである故に、私たちは彼に篤い信仰を捧げる。

Mālikāvadāna 158 (ed. by K. Okano)

nāsmākaṃ sugataḥ pitā na ripavas tīrthyā dhanam naiva no
dattaṃ tena tathāgatena <*na> hr̥taṃ kiṃ cit kaṇādādibhiḥ /
kiṃ tv ekāntajagaddhitaḥ sa bhagavān buddho yataś cāmaḥ
vākyam sarvamaḥāpāhāri ca yatas tad bhaktivanto vayam //

（上記の DS の訳と同じ）

Tib. DS 11 (ed. by J. Schneider)

| bde bar gshegs pa bdag gi pha min mu stegs gzhan dag dgra ma yin |
| de bzhin gshegs des bdag nor ma stsal gzegs zan sogs kyis cang ma phrogs |
| 'on kyang sangs rgyas bcom ldan de ni gcig tu 'gro la sman mdzad gsung |
| dri med dri ma thams cad sel ba gang yin de la bdag dad lags |

Devātiśayastotra 11

11b na hr̥taṃ kiṃ *cit] ex conī Hahn: na ca hr̥taṃ kiṃ ca Shastri.

11c *cāmaḥ] ex conī Hahn: cāmahaṃ Shastri.

11d tadbhaktimanto] corr. Hahn: tad bhaktivanto Shastri.

Mālikāvadāna 158

158a tīrthyā] Ms. N: tīrthyāṃ Ed. || naiva no Ms.: naiva te / N Ed.

158b <*na> hr̥taṃ kiṃ cit] ex conī Ms. N: ca hr̥taṃ kiṃ cit Ed.

158d bhaktivanto] Ms. N: bhiktavaṃto Ed.

コメント pāda b では、Hahn がデータとして基づいた Shastri 本では na ca hr̥taṃ kiṃ ca という読みになっていて、それを Hahn が na hr̥taṃ kiṃ *cit と修正したのであるが、彼の kiṃ cit の修正は MA によってその正しさが確かめられる。また pāda c の Hahn による 2 箇所の修正も同様に MA によってその正しさが確かめられる。—次に pāda d にお

ける MA の °vanto と DS の °manto の違いについては、Hahn が基づいた Shastri 本では MA と同じく °vanto の読みになっていた。本来、どちらの写本系統にも °vanto の読みしかなかったわけである。しかし接尾辞の使い方として °bhaktimanto とすることが古典文法の上で望ましいため、Hahn がそう訂正した。

Devātiśayastotra 12 (ed. by M. Hahn)

hitaiṣī yo nityaṃ satatam upakārī ca jagataḥ

kṛtaṃ yena svāsthyaṃ bahuvidharuj*ārtasya jagataḥ /

sphuṭam yasya jñeyaṃ karatalam ivāvaiti sakalaṃ

prapadyadhvaṃ ***santaṃ** tam ṛṣim asamaṃ bhakti*manasaḥ //

絶えず [他者を] 益することを願う者、いつも生類を助ける者であり、様々なかたちの病に苦しむ生類を健康に戻す者、 [おのが] 掌のように明瞭にあらゆる知の対象を理解している者である、—その善良で無比なる聖者に対して、篤い信心をもつ者として、あなた方は帰依をなすがよい。

Mālikāvadāna 159 (ed. by K. Okano)

hitaiṣī yo nityaṃ satatam upakārī ca jagataḥ

kṛtaṃ yena svāsthyaṃ bahuvidharujārtasya jagataḥ /

gūḍhaṃ yaś ca jñeyaṃ karatalam ivāvaiti sakalaṃ

prapadyadhvaṃ **santas** tam ṛṣim *asamaṃ bhaktimanasaḥ //

絶えず [他者を] 益することを願う者、いつも生類を助ける者であり、様々なかたちの病に苦しむ生類を健康に戻す者、 [おのが] 掌のように隠されたあらゆる知の対象を理解している者である、—その無比なる聖者に対して、善良なる篤い信心をもつ者として、あなた方は帰依をなすがよい。

Tib. DS 12 (ed. by J. Schneider)

| gang zhig rtag tu phan dgyes rgyun du 'gro la phan 'dogs mdzad |

| gang zhig 'gro ba sdug bsngal rnam mang gdungs pa bde mdzad dang |

| **gang zhig shes** bya mtha' dag lag mthil bzhin du **gsal** mkhyen pa |

| drang srong mnyam med rgyu mnga' de la glo ba dad par gyur |

Devātiśayastotra 12

12b °ruj*ārtasya] ex conī Hahn: °rujārtasya Shastri.

12d *santaṃ] ex conī Hahn: santas Shastri. || °*manasaḥ] ex conī Hahn: mānasaḥ Shastri.

Mālikāvadāna 159

159a hitaiṣī] corr.: hiteṣī Ms. N Ed. || upakārī ca] Ms.: upakārīva N Ed.

159b rujārtasya] ≙ rujārttasya Ms. Ed.: rucārtasya N.

159c gūḍhaṃ yaś ca jñeyaṃ] Ms.: gūḍhaṃ yaś ca bhayaṃ N: gūḍhaṃ yaś ca jñe bhayaṃ Ed.

159d santas tam ṛṣim *asamaṃ] ex conī (cf. DS): santas tam ṛṣidaraṃ Ms.: santas temṛṣi-
varadaraṃ N Ed.

コメント pāda c で MA の gūḍhaṃ の読みに対して DS は sphuṭaṃ であるが、蔵訳 gsal はその sphuṭaṃ の読みを支持する。gūḍhaṃ 「隠された」という表現は密教の徒がいかにも好みそうな表現なので、密教を好むネパールで写本の筆記者が故意に書き直した表現である可能性が高い。また次に、MA の yaś ca に対して DS は yasya であるが、私は MA の yaś ca の読みのほうが良いと思う。その蔵訳は gang zhig である。次に pāda d で MA と Shastri の santas の読みに対して DS の Hahn の推測した読みは *santaṃ であるが、その修正はやや強引であり、私は santas の読みの方が良いと思う。ブツダに対して santaṃ 「善良な、正しい」という当たり前の平凡な形容詞をわざわざ使う必要はないと感じるからである。蔵訳はその santas / santaṃ の語を訳していない。

Devātīśayastotra 13 (ed. by M. Hahn)

asarvabhāvena yad*ṛchayā vā

parānuvṛtyā vicikitsayā vā /

ye *taṃ namasyanti munīndracandraṃ

te 'py āmarīṃ saṃpadam āpnuvanti //

〔礼拝を〕真心をこめて〔したわけ〕ではなく、あるいはたまたま偶然に〔行っただけ〕であるか、あるいは他人に従った〔だけ〕であるか、あるいは疑念をもちながら〔行っただけ〕場合であっても、月のような『牟尼たちの王』（仏）に礼拝をするならば、そのような者たちであっても、神々の完全な幸福の達成を得る。

Mālikāvadāna 160 (ed. by K. Okano)

asarvabhāvena yadṛchayā vā

parānuvṛtyā vicikitsayā vā /

ye taṃ namasyanti munīndracandraṃ

te 'py āmarīṃ saṃpadam āpnuvanti //

(上記の DS の訳と同じ)

Tib. DS 13 (ed. by J. Schneider)

| snying nas dad dam ji ltar dga' ba dang |
| the tshom gyis sam gzhan gyi ngor yang rung |
| gang zhig thub dbang zla ba der phyag byed |
| des ni lha yi bde ba phun tshogs 'thob |

Devāṭīśayastotra 13

13a *°ṛcchayā] ex conī Hahn: °icchayā Shastri.

13c *tam] ex conī Hahn: tvām Shastri || munīndra°] Fleet Hahn: munindra° Shastri || °candraṃ] Shastri Hahn: °bhadraṃ Fleet.

13d te 'py āmarīṃ] corr. Hahn: te 'py āmarīṃ Shastri: te śyāṃmarīṃ Fleet.

Mālikāvādāna 160

160b parānuvṛtyā] Ms.: parānuvṛtya N Ed.

160d āmarīṃ] Ms.: āmarīṃ N: āmarī Ed.

コメント 本詩節では、Hahn が修正した後の DS テキストと MA の間に相違が見出されない。つまり Hahn が推測により修正した読みすべてが MA によって確かめられ、支持されたことになる。なお pāda a の asarvabhāvena を蔵訳が snying nas dad 「心から信仰深い」と訳し、また yadṛcchayā を ji ltar dga' ba 「好むがままに」と訳しているのは、やや意訳した訳である。— 本詩節には Fleet による異読があるが、これは *Indian Antiquary* に Fleet によって発表された碑文テキストから得られた異読である。Shastri がこの碑文中にある詩節に気づいた。Hahn (2000), pp. 314-315 を参照のこと。

Devāṭīśayastotra 14 (ed. by M. Hahn)

paurāṇī śrutir eṣa lokamahito buddhaḥ kilāyaṃ harir
dṛṣṭvā janmajarāvināśavaśagaṃ lokam kṛpābhyudgataḥ /
jātaḥ śākyakule *vare (?) *'dbhutamatis *trātā nṛṇāṃ gautamaḥ
śāstāram hitam eva kas tam adhunā nāvaiti mūḍho janaḥ //

これはプラーナの聖典伝承であるが、生類から尊崇されるこのブッダとは、ハリ（ヴィシュヌ神）であるようだ。[彼は] 生類が生と老と滅び（死）に支配されているのを見て、憐れみから発起した方として、希有なる思いをもつ、人類の救済者ガウタマとして、すぐれた釈迦族に誕生なされた。かのお方が有益な教師であることを、今日いかなる愚かな人々が理解しないのか。

Mālikāvadāna 161 (ed. by K. Okano)

paurāṇī śrutir eṣa lokamahito buddhaḥ kilāyaṃ harir

drṣṭvā janmajarāvīpattivaśagaṃ lokam kṛpābhyudyataḥ /

jātaḥ śākyakulendur acyutamatis trātā nṛṇāṃ gautamaḥ

śāstāraṃ hitam eva kas tam adhunā nāvaiti mūḍho janaḥ //

これはプラナーナの聖典伝承であるが、生類から尊崇されるこのブツダとは、ハリ（ヴィシュヌ神）であるそうだ。〔彼は〕生類が生と老と災い（死）に支配されているのを見て、憐れみから昇り出た釈迦族の月として、不屈の思いをもつ、人類の救済者ガウタマとして、誕生なさった。かのお方が有益な教師であることを、今日いかなる愚かな人々が理解しないのか。

Tib. DS 14 (ed. by J. Schneider)

| gna' sngon khyab 'jug 'di yis 'jig rten skye rga na 'chi'i dbang gyur thos nas su |

| mi rnams bskyab phyir rmad byung blo yis snying brtse brtson pas shākya'i rigs rgyas par |

| gau ta mar 'khrungs sa stengs 'jig rten 'dir ni sangs rgyas gyur par grag ces thos |

| skye bo nyon mongs blun zhing rmongs pas ston pa phan 'dogs lags par ma 'tshal grang |

Devāṭīśayastotra 14

14c śākyakule *vare (?) *'dbhutamatis *trātā] ex conī Hahn: śākyakulendraradbhūtamatis trāto Shastri.

Mālikāvadāna 161

161a śrutir eṣa] Ms.: śrutineṣa N Ed.

Tib. 14 - Remarks by Schneider (S. 166):

14b snying brtse brtson pas = *kṛpābhyudyataḥ? (instead of kṛpābhyudgataḥ Shastri/Hahn).

コメント 蔵訳はかなり意識しているようで、pāda b の rgyas par や、pāda c の sa stengs 'jig rten 'dir ni や、pāda d の nyon mongs の表現など、梵文テキストと合わない不可解な訳語が幾つもある。pāda a の lokamahito を 'jig rten 'dir ni と訳したようであるが、なぜそう訳したのかは分からない。°mahito (尊崇された) にあたる訳語が蔵訳に見当たらない。一次に pāda b で、MA の vipatti に対して DS は vināśa であるが、どちらの語も蔵訳の 'chi (死) の訳に当てはまるので、この梵語の読みの相違に対して優劣をつけるのは難しい。また MA の abhyudyata に対して DS が abhyudgata になっているという違いは、蔵訳の brtson pas に意味が近いのは abhyudyata であるから、その MA の読みのほうを採用すべきであろう。一次に pāda c で、MA は śākyakulendur であるが、Hahn の DS は śākyakule (*vare?) と推測する。Hahn が基づいた Shastri 本は śākyakulendrar であったので、もともと Shastri 本は MA に近い読みであったことがわかる。Hahn は蔵訳の rgyas par の訳語を見て、*vare と読む可能性を提案したが、しかし蔵訳者が rgyas par と

訳した原語が *vare であったかどうかは甚だ疑わしい。むしろ MA の śākyakulendur の読みに従うべきであろう。indu (月) という表現は、abhyudyata (昇った) という語とセットになって使われていると理解される。また acyuta と *'dbhuta という語の相違が問題になるが、adbhuta の読みのほうが、蔵訳の rmad byung の語と合致するので、MA の acyuta よりも良い。そこで、DS の pāda c は śākyakulendur adbhutamatis と読むべきであろう。すると「憐れみから昇起した釈迦族の月たる、希有なる心をもつ、人類の救済者、ガウタマとして」とその箇所を訳すことになる。

以上の吟味に基づいて私が提案する DS 14 の再校定テキスト：

paurāṇī śrutir eṣa lokamahito buddhaḥ kilāyaṃ harir
 drṣṭvā janmajarāvināśavaśagaṃ lokam kṛpābhyudyataḥ /
 jātaḥ śākyakulendur adbhutamatis trātā nṛṇāṃ gautamaḥ
 śāstāram hitam eva kas tam adhunā nāvaiti mūḍho janaḥ //

Devātīśayastotra 15 (ed. by M. Hahn)

yadā rāgadveṣād asura*sura***ratnāpahaṇam**
 kṛtaṃ **māyānvītaṃ** (?) dharaṇiharaṇāsaktamatinā /
 tadā pūjyo *vandyo harir **api vimukto** *'budhatayā
 vinirmuktaṃ buddhaṃ na namati jano mohabahulaḥ //

貪りと瞋りの故に、大地を奪うことに執着した思いをもつ者（ヴィシュヌ神）によって、詐術をそなえた (māyānvītaṃ) アスラとスラ（神々）の宝の掠奪がなされた時、非賢者性（愚者性）を**脱した者であるハリ**（ヴィシュヌ神）も、[多くの者によって] 供養されるべき者・礼拝されるべき者とされた。[しかるに] 愚かな迷妄に満ちた人々は、解脱している方であるブッダを礼拝しない。

Mālikāvadāna 162 (ed. by K. Okano)

yadā rāgadveṣād asurasuradārāpahaṇam
 kṛtaṃ **māyāvītaṃ** (or *māyāvitve?) dharaṇiharaṇāsaktamatinā /
 tadā pūjyo vandyo harir **aparimukto** 'budhatayā
 vinirmuktaṃ buddhaṃ na namati jano mohabahulaḥ //

貪りと瞋りの故に、大地を奪うことに執着した思いをもつ者（ヴィシュヌ神）によって、アスラとスラ（神々）の妻の掠奪が、[彼の] 欺詐ある性質として、なされた時、非賢者性（愚者性）のゆえに**解脱していない者であるハリ**（ヴィシュヌ神）は [多くの者によって] 供養されるべき者・礼拝されるべき者とされた。[しかるに] 愚かな迷妄に満ちた人々は、解脱している方であるブッダを礼拝しない。

Tib. DS 15 (ed. by J. Schneider)

l gang tshe 'dod chags zhe sdang gis ni lha min khyim nas **rin chen** phrogs pa dang l
l chags pa'i blo gros kyis ni **ngan g.yo** byas nas sa dag phrogs par gyur kyang ni l
l de tshe khyab 'jug **ma grol bzhin du** skye bo blun po rnam ni mchod phyag 'tshal l
l sangs rgyas nges par rnam grol gyur kyang skye bo phal cher rmongs pas phyag mi
'tshal l

Devātīśayastotra 15

15a asura*sura*ratnā°] ex conī Hahn: asuradārā° Shastri.

15b °ānvītaṃ] corr. Hahn: °anvītaṃ Shastri.

15c *vandyo] ex conī Hahn: 'vandyo Shastri || *'budhatayā] ex conī Hahn: budhatayā Shastri.

Mālikāvādāna 162

162b māyāvitvaṃ] N: māyā[v]itvaṃ Ms.: māyādvitvaṃ Ed. (Read *māyāvitve?) || °haraṇāsak-
ta°] ex conī (cf. DS): °haraṇāsakta° Ms. N Ed.

162c 'budhatayā] Ms. N Ed. (Avagraha is ascertained here.)

162d vinirmuktaṃ] N Ed. (= DS): nirmuktaṃ Ms. || mohabahulaḥ] Ms.: māhāvahulaḥ N Ed.

Tib. 15 - Remarks by Schneider (S. 166):

15c ma grol bzhin du = *na mukto? (instead of vimukto Shastri/Hahn). Cf. Ṭikā: ma grol.

コメント pāda a で、MA の °dārā° (妻) の箇所が、DS では °*ratnā° (宝) と Hahn によって推測の読みを与えられているが、それは蔵訳の rin chen を根拠にした推測である。Shastri 本の読みは asuradārā° なので、MA と同じように °dārā° と読む伝承、すなわち「宝」ratna の掠奪ではなくて、「妻」dāra の掠奪という伝承であったことが知られる。ネパールにそう読む伝承があったことがわかる。しかし蔵訳の註釈で説明される Viṣṇu 神話の内容から判断して、私は Hahn の推測の読み asura*sura*ratnāpaharaṇam の方が正しいと思う。一次に pāda b の Hahn 本の māyānvītaṃ (?) の箇所は、Hahn が基づいた Shastri 本は māyānvītaṃ と記すが、韻律上の不適切から Hahn はそれを *māyānvītaṃ と修正した上で、確信がもてずにその語の後に (?) と疑問符を記した。蔵訳は ngan g.yo (悪しき欺し) であって、māyā の後の anvīta (具えた) が ngan (悪しき) という蔵語と合わないため、Hahn は疑問符を付けたのであろう¹⁴⁾。一方、MA は māyāvitvaṃ と読

14. この *māyānvīta (māyā を持つ) の語にやや近い表現として、Kalpadrumāvadānamālā の第11章 Yaśomatyaavadāna 中の Yaśomatistuti, 第17偈に māyādhara viṣṇur の表現がある。J.S. Speyer (1906, 1909), Avadānaśataka, II, xxxii.

む。その語は形容詞 *māyāvin* "deceitful" に抽象名詞を造る接尾辞 *-tva* を付けた語で「詐欺性、詐術性、欺詐ある性質、欺詐を具有する性質」の意味であろう。**māyānvītaṃ* よりは *māyāvitvaṃ* と読む方がやや蔵訳に近づいたように思われるが、しかし *māyāvitvaṃ* は **māyāvitve* (locative) と読むべきかもしれない。写本ではその *-tvaṃ* の字は *-tve* と字の形が極めて近いからである。その場合「[ヴィシュヌの] 欺詐ある性質において、…の掠奪がなされた」とこの文を訳せる。また可能性としては **māyāvitvād* と格を *ablative* に直して読むことも考えられるが、その場合は「欺詐ある性質の故に」と訳せる。—次に *pāda c* の DS の *api vimukto* (解脱した) の箇所については、文脈から判断しても明らかに MA の読み *aparimukto* (解脱していない) の読みの方が勝れている。蔵訳は *ma grol bzhin du* (解脱していない) であり、否定辞 *ma* が確認できる。Hahn の脚注82を読むと、Hahn はさすがに DS のこの箇所に違和感を強く感じていたことがわかる。解脱していない *Viṣṇu* と解脱した *Buddha* が対比されて、仏陀ではなく解脱していない方を崇拝する大衆の愚かさが語られていることが、MA の読みによって、やっとはっきりした。Hahn 校訂の DS はここでも MA の読みによって訂正されるべきである。以上の吟味に基づいて私が提案する DS 15 の再校定テキストは次の通り：

*yadā rāgadveṣād asurasura*ratnāpahaṇam*
*kṛtaṃ *māyāvitve dharaṇiharaṇāsaktamatinā /*
tadā pūjyo vandyo harir aparimukto 'budhatayā
vinirmuktaṃ buddhaṃ na namati jano mohabahulaḥ //

Devātiśayastotra 16 (ed. by M. Hahn)

caturjaladhimekhalākulanitambabhārālasām

visṛjya haraye *mahīṃ <*sa> balir āpa kaṣṭhāṃ daśām /

pradāya munaye tu pāṃsulavam apy aśoko nṛpaḥ

kṣitiṃ sakalacandraṃḍala*karāmbarāṃ prāptavān //

四海という腰帯を [はちきれんばかりに] 満たす臀部の重荷 (重さ) によって動きの鈍い [女である] 大地を、バリはハリ (ヴィシュヌ神) に贈って、[その結果バリは] 悲惨な状態を得た。[一方] しかしアショーカ王は牟尼 (仏) にわずかな塵を与えたので、満ちた月の輪の光線を衣裳とする (月光が照らす限りの) [すべての] 大地を得た。

Mālikāvadāna 163 (ed. by K. Okano)

caturjaladhimekhal*ākulanitambabhārālasām

mahīm <*sa> mahatīm visṛjya haraye vāpa (!) kaṣṭām baliḥ /

pradāya munaye tu pāṃśulavam apy aśoko nṛpaḥ

kṣitīm sakalacandramaṇḍalatarāñ ca samprāptavān //

四海という腰帯を [はちきれんばかりに] 満たす臀部の重荷 (重さ) によって動きの鈍い [女である] 偉大な大地を、かのバリはハリ (ヴィシュヌ神) に贈って、[その結果バリは] 悲惨な [状態] を得た。[一方] しかしアショーカ王は牟尼 (仏) にわずかな塵を与えたので、満ちた月の輪を超える [すべての] 大地を得た。

Tib. DS 16 (ed. by J. Schneider)

| sa 'di rgya mtsho bzhi yi ska rags gtams pa'i *khur *bu'i ljid kyis ni |

| lci lci ltar 'dug khyab 'jug byin yang stobs chen sdug bsngal gnas skabs gyur |

| thub pa la ni rdul tsam phul bas rgyal po mya ngan med pa yis |

| zla ba'i dkyil 'khor dpal gyi 'od zer gos can sa stengs mtha' dag thob |

Devātīśayastotra 16

16b *mahīm <*sa>] ex conī Hahn: mahatīm Shastri.

16d °*karāmbārām] ex conī Hahn: °talām ca sam Shastri.

Mālikāvadāna 163

163a °mekhal*ākulanitamba°] corr.: °mekhalākunitamba° Ms.(post corr. marg.): °mekhalānitamba° Ms.(ante corr.): °mekhalākuratamba° N Ed.

163b mahīm <*sa> mahatīm] ex conī: mahīm mahatīm Ms. Ed. (metre!): mahīm mahatīm N || haraye vāpa] Ms. N Ed. (metre!) || baliḥ] ≙ valiḥ Ms. Ed.: valīḥ N.

コメント pāda b の箇所では両テキストは大きく違っているが、MA のほうが韻律がちこち乱れていて、ひどく劣化した読みを示す。この MA の出来の悪い pāda b は、DS の pāda b の箇所のテキストの伝承がなんらかの理由で乱れて意味不明になったため、MA においてやむなく修正の試みとして、その書き直しがなされて、生じたものと判断される。pāda b は結果的に、改悪されたテキストとなっている。Shastri 本は MA と同じ mahatīm という悪い読みを有するが、MA ほど pāda b が改悪されていない。MA は haraye vāpa の箇所で韻律のエラーを犯しており、私はその箇所の修正をあきらめて、とりあえず MA の写本のとおりにした。ここで daśām の語を失っているのが、文としておかしい。MA のこの pāda b のテキストがこのままでは駄目なことは明白であり、MA の作者の pāda b の書き直しの試みは無残な失敗に終わったといえる。Shastri 本の伝承のほうがましである。— また pāda d では Hahn が蔵訳から推測した読みである °*karāmbārām prāptavān の箇所が、Shastri 本と MA では共に °tarāñ ca samprāptavān という読みに

なっており、それは実に本物らしくない悪い読みであるので、Hahn がその Shastri 本の読みを全く捨てて、蔵訳から大胆な推測をせざるを得なかった理由がわかる。この詩節はこのように pāda b と pāda d に問題が残り、納得が出来ないままに残すしかない。とりあえず Hahn が苦勞して修正した形で DS を読んでおくしかないであろう。MA のこの pāda d の伝承は Shastri と同じなので、MA の作者による改竄を受けてはいない。

Devātiśayastotra 17 (ed. by M. Hahn)

paḥṣapāto na me buddhe na dveṣaḥ kapilādiṣu /

yuktimac ca vaco *yasya *śāstus tasya parigrahaḥ //

私は [意図的に] ブッダに味方するわけではなく、カピラなどの [異教徒] を憎んでいるわけでもない。道理に合った言葉をもつところのその教師を [私は] 受け入れる (認容する)。

Mālikāvādāna 164 (ed. by K. Okano)

paḥṣapāto na me buddhena dveṣaḥ kapilādiṣu /

muktimac ca vaco yasya kāryas tasya parigrahaḥ //

私は [意図的に] ブッダに味方するわけではなく、カピラなどの [異教徒] を憎んでいるわけでもない。解脱をそなえた言葉をもつところのその者を受け入れるべきである (その者の認容をなすべきである)。

Tib. DS 17 (ed. by J. Schneider)

| bdag ni sangs rgyas phyogs mi 'dzin |

| ser skya sogs la mi sdang yang |

| gang zhig rigs par ldan pa'i tshig |

| de nyid ston par yongs su 'dzin |

Devātiśayastotra 17

17c *yasya] ex conī Hahn: asya Shastri.

17d *śāstus] ex conī Hahn: kāryas Shastri.

Mālikāvādāna 164

164a paḥṣapāto] Ms.: yakṣapāto N Ed.

164b dveṣaḥ] Ms.: dveṣaṭa N Ed.

コメント pāda c での、MA の muktimac と DS の yuktimac の違いについては、蔵訳に支持される DS の yuktimac の読みの方が勝れている。—次に pāda d では Hahn が蔵訳 ston par から推測した読みである DS の *śāstus と、Shastri 本と MA の両者が共に伝える読みである kāryas が相違点としてあるが、どちらの読みを採っても意味が通る。

しかし私は Hahn の提案する読みのほうが古く、正しいと思う。従って Hahn の DS 17 の詩節は MA を見た後でも変更を加える必要を少しも感じない。この MA 164 詩節はネパールで少し伝承が崩れた結果の姿であろう。

Devāṭīśayastotra 18 (ed. by M. Hahn)

avaśyam eṣāṃ katamo 'pi sarvavij

jagaddhitaikāntaviśālasānaḥ /

sa eva mṛgyo hy atisūkṣmacetasāṃ

***janair aśeṣaiḥ kim anarthapaṇḍitaiḥ //**

これらの者たちの中で、いずれかの者が確かに一切智であって、生類の利益のために純一に広大な教えを説いた者であれば、その者こそが、甚だ思考の鋭い精神をもつ者たちにとって、探し求められるべき者である。無益な事柄を知る学者たるすべての者たちに何の用があるろう。

Mālikāvādāna 165 (ed. by K. Okano)

avaśyam eṣāṃ katamo 'pi sarvavit

jagaddhitaikāntaviśāla*śānaḥ /

sa eva mṛgyo hy atisūkṣmacetasā

janena śeṣaiḥ kim anarthapaṇḍitaiḥ //

これらの者たちの中で、いずれかの者が確かに一切智であって、生類の利益のために純一に広大な教えを説いた者であれば、その者こそが、甚だ思考の鋭い精神をもつ人々によって探し求められるべき者である。残りの、無益な事柄を知る学者たちに何の用があるろう。

Tib. DS 18 (ed. by J. Schneider)

| 'di ltar su yang rung ste nges par kun mkhyen dang |

| 'gro la gcig tu phan 'dogs mdzad pa'i lugs che ba |

| de dag blo gros zhib mo'i mig gis btsal nas su |

| bsten par bya yi gzhan dag mkhas la ci zhig mkho |

Devāṭīśayastotra 18

18d ***janair aśeṣaiḥ]** ex conī Hahn: janān aśeṣaiḥ Shastri.

Mālikāvādāna 165

165b jagaddhitai°] Ms.: jagarddhite° N: jagarddhitai° Ed. || viśāla*śānaḥ] ex conī (cf. DS): viśālasāraḥ Ms. N Ed.

Tib. 18 - Remarks by Schneider (S. 166-167):

18a 'di ltar = *evam? (instead of eṣāṃ Shastri/Hahn). Cf. Ṭikā: 'di dag gi nang nas.

18c blo gros zhib mo'i mig gis = *matisūkṣma*caḥṣuṣāṃ? (instead of hy atisūkṣmacetasāṃ Shastri/Hahn).

18d bsten par bya yi = *sa *cānusevyaḥ? (instead of janair aśeṣaiḥ Hahn, janān aśeṣaiḥ Shastri).

コメント pāda cd において MA では atisūkṣmacetasā の句が janena に懸かり、次の śeṣaiḥ はその後ろの °paṇḍitaiḥ に懸かる。こちらの MA の読みのほうが、DS の読み cetasāṃ *janair aśeṣaiḥ よりも意味がすっきりして、勝れた読みである。なお蔵訳は Schneider が指摘するように、pāda cd の箇所はやや文面が違った梵文に基づいて訳されたようであるが、少なくとも gzhan dag の訳語は DS の aśeṣaiḥ ではなく MA の śeṣaiḥ の読みの方を支持する。結論として、Hahn の DS 18 詩節は MA のテキストのように読むべきである。

Devātiśayastotra 19 (ed. by M. Hahn)

yasya ca na santi nikhilā

doṣāḥ sarve guṇās ca vidyante /

brahmā va viṣṇur vā

maheśvaro vā sa me śāstā //

どんな悪徳も無く、あらゆる徳性が有る者であれば、—— [たとえ] ブラフマーであれ、ヴィシュヌであれ、大自在天 (シヴァ神) であれ、—— そのお方が私の教師である。

Mālikāvadāna 166 (ed. by K. Okano)

yasyāpi kiñcin na hi doṣaleśaṃ

sarve guṇāḥ santi jagaddhitārthe /

brahmāpi viṣṇur giriśo harir vā

sa me hi śāstā śubhakāri mitram //

どんなわずかな悪徳も無く、生類の利益のため、あらゆる徳性が有る者であれば、—— [たとえ] ブラフマーであれ、ヴィシュヌであれ、ギリシャ (シヴァ神) であれ、ハリであれ、—— そのお方が私の師であり、幸せをもたらす友である。

Tib. DS 19 (ed. by J. Schneider)

| gang la skyon kun yod min la |

| yon tan thams cad yod gyur na |

| tshangs dang khyab 'jug dbang phyug che |

| de yang bdag gi ston pa yin |

Devātiśayastotra 19

19a nikhilā] corr. Hahn: nikhilān Shastri.

19b sarve] corr. Hahn: sarve ca Shastri

Mālikāvadāna 166

166b sarve guṇāḥ] Ms.(post corr. marg.): guṇāḥ Ms.(ante corr.): śaraḍguṇāḥ N Ed.

166c viṣṇur giriśo] Ms.: viṣṇutiriṣo N Ed.

166d śubhakāri] N Ed.: śubhakārī Ms.

コメント この詩節は両者が大きく違っているが、蔵訳は DS の文と全く一致する。MA の文はネパールで成立したのであろう。DS で Āryā であった韻律を MA で Upajāti に変更するために、MA の作者は語を付け加えて文を大きく変えたのであろう。韻律の変更がこの改変の理由である。sama-vṛtta のタイプの韻律に慣れたネパールの学僧が Āryā を含む jāti のタイプの韻律を見て、韻文としての違和感を感じたために行った恣意的な改竄ではないだろうか。MA という作品の制作において MA の作者は DS に相当する古い資料を利用しながら、その作者にはそのテキストを伝承に忠実に完全に引用しようという義務感が希薄であったために、韻律の変更という、あまり書き直す必要がない場合でも、このように自由に作文が行われたことがわかる点で、この詩節の改変の事実は興味深い。ともあれ、DS のこの詩節は MA によって修正する必要はない。

Devātiśayastotra 20 (ed. by M. Hahn)

yasya **doṣā na vidyante vidyante cāmītā** guṇāḥ /

sarvajñāś **ca kṛpāluś ca** tam ahaṃ śaraṇaṃ **gataḥ** //

その方には諸々の悪徳が無く、無量の徳性が有り、一切智であり、憐れみ深い方であるから、私はそのお方に帰依している。

Mālikāvadāna 167 (ed. by K. Okano)

yasya **na vidyate doṣo** vidyante **sakalā** guṇāḥ /

sarvajñāḥ **sa jagacchāstā** tam ahaṃ śaraṇaṃ **vraje** //

その方には悪徳が無く、あらゆる徳性が有り、一切智であり、生類の師であるから、私はそのお方に帰依する。

Tib. DS 20 (ed. by J. Schneider)

| gang la skyon ni mi mnga' zhing |

| yon tan dpag med mnga' ba dang |

| thams cad mkhyen dang thugs rje can |

| de la bdag ni skyabs su mchi |

Devātīśayastotra 20

20a doṣā] corr. Hahn: doṣāḥ Shastri.

Mālikāvādāna 167

—

コメント この詩節はすべての pāda に、両者の読みが違っている箇所がある。蔵訳との一致により、DSの方が古いかたちであって、MAはそれを改変したテキストであると判断できる。これほどMAで詩節のあちこちが違っていることは、単に写本が汚損して読めない等の原因でやむをえずに文の改変が起こったとは考えにくい。たしかに、MAが利用したDSの写本は、いくつもの箇所で伝承が劣悪化して読めず、筆記者に強く修復を要求するものだったのかもしれない、それが、これまでにMAで見えてきた複数の事例のような積極的な改変を誘った一つの理由かも知れない。しかしながら、このMAの詩節の場合を見ると、MAが施した改変が、単に伝承が劣化して読めなくなったテキストの修復という保護的な目的でなされたとはばかりは言い難いように思う。pāda aのDSの *yasya doṣā na vidyante* をMAが *yasya na vidyate doṣo* と変えているのは、DSの元の写本の文がちゃんと読めているのにもかかわらず、MAは無用にも、わざとその語順を変えたことを意味する。これは修復とはいえない。改竄的な性格の強い変更である。MAの作り手にはDSを借用する時に、そのテキストを自分の気に入るように改竄しても構わないとする意識があったのではないかと思わざるを得ない。DSのこの詩節において、MAの作者はDSから文を忠実に完全に借用すること、その行為自体に躊躇いを感じていたのではないかとすら、疑うことが出来る¹⁵⁾。ともあれ、この詩節においてはMAに生じた改竄の明白な理由を見つけるのは難しい。このように自

15. つまりMAの作者はMAの一部としてDSの詩節を写す時に、何らかの動機があつて、わざとあちこちの語を入れ替えて「別の詩節」にしたかたつたのではないかと疑うことが出来よう。彼は、自分は写経師のように古いテキストを単に機械的に筆写するのではなく創造的に (creatively) 筆写しているのだということの証を残したかたつたのだろうか。それとも、そんな個人的な感情によるものではなく、別のテキストをそっくり利用する時に、わざと詩節の数箇所を変えることによって、二つのテキストが同一性を主張することが無いように、両者がきちんと別個の作品として伝承されてゆくように、配慮したのか。つまり、もしMAの中にあるテキストをDSとほとんど同じテキストにした場合、後代の人間は、両テキストの貸借の前後関係がわからないため、DSという本来の作品の独立性を疑う人が出てこないとも限らない。そのためMAとDSはあくまで別々の作品であるという決定的な印象を与えるために、DSを写す時にわざと作品の最初や最後のあたりに位置するいくつかの詩節において故意の改変を施し、わざと両テキストが同一にならないように配慮した可能性も考えられる。

由に作文が行われた MA の文によって DS のこの詩節は修正する点はないと判断できる。

Devātīśayastotra 21 (= Devatāvimarśastuti, ed. by M. Hahn)

evam stute stutisahasranadīsamudre

buddhe vibuddhakamalāyatapattranetre /

yat kiṃ cid asti kuśalaṃ mama vāksamutthaṃ

sattvā bhavantu sukhinaḥ < v v > tena sarve //

// ācāryaśaṅkarasvāmīpādakṛtā devatāvimarśastutiḥ samāptā //

幾千の『讚』という河が流れ込む海である、開花した蓮の大きな葉のごとき眼をおもちになるブツダを讚えおわって、私の〔この〕言葉から生じた功德がいかほどか有るならば、それによってあらゆる有情が幸せになりますように！

阿闍梨シャンカラスヴァーミン様の作、『神格への吟味の讚』終わる。

Mālikāvādāna (ed. by K. Okano)

DS 21 に対応する詩節なし。

In MA there is no corresponding stanza of DS 21.

Tib. DS 21 (ed. by J. Schneider)

| padma kha bye rgyas pa'i 'dab ltar dkyus ring spyan mnga' ba |

| bstod pa'i chu klung stong *gi rgya mtsho de ltar bstod bgyis pa |

| bdag gi tshig gis bskrun pa'i dge ba cung zad ci mchis pa |

| des ni sems can thams cad bde ba dag dang ldan gyur cig |

Devātīśayastotra 21

21a stute] corr. Hahn: stuta Shastri.

21b buddhe] corr. Hahn: buddhaṃ Shastri.

Colophon: °svāmīpādakṛtā] corr. Hahn: °svāmīpādakṛta Shastri.

Mālikāvādāna

—

Tibetan DS colophon:

| lha las phul du byung ba'i⁽¹⁶⁾ bstod pa slob dpon bde byed bdag pos mdzad pa rdzogs so ||

| rgya gar gyi mkhan po sarba dznyā de wa dang | lo tsā ba bande rin chen mchog gis bsgyur |

zhu chen gyi lo tsā ba bande dpal brtsegs rakṣi tas zhus te gtan la phab pa'o ||

16. 蔵訳の巻末のコロフォンに記された作品名は、lha las phul du byung ba'i bstod pa であるが、蔵

コメント この DS の最後の詩節は MA には欠けている。MA のアヴァダーナの中に DS の作者 Śaṅkarasvāmin が自分の作品から生じた功德を生類に廻向するこの詩節だけは入れるわけにはゆかなかったからである。DS の pāda d にある 2 音節の欠損は、MA にこの詩節が欠けているために、埋めることが出来ない。

以上、表 1 として、DS の第 1 伝承と第 2 伝承の相違を具体的に示すために、岡野が今回校訂した MA の DS 相当箇所テキストと、Hahn が校訂した DS のテキストと、DS 蔵訳との 3 本を並べた資料を示した。

I-5. 梵文 3 テキストの相違点を比較するための資料

次にもう一つの、比較のための資料である表 2 を以下に提示したい。

この表 2 は Hahn (2000) の DS と筆者 (岡野) の MA との、両梵文テキストの相違点を示したものである。この表 2 によって、上記の表 1 を時間をかけて見なくても、私が今回校訂した MA のテキスト (第 2 伝承) が、Hahn (2000) の DS 校訂テキスト (第 1 伝承) の更なる改善に、どの箇所において貢献する可能性があるかを容易に見つけることが出来るはずである。

この表で、アステリスク (*) の印が語頭についての語は校定者による推測の読み (conjecture) であることを示すが、例えば Hahn (2000) において推測の読みであったものが、MA の写本で実際にその読みが確認されてはや推測ではなくなった場合は、MA の方ではそのアステリスクの印が消えている。つまりアステリスクの有無で、推測の有無もこの表は表現している。

表 2⁽¹⁷⁾

DS stanza	DS ed. by Hahn	DS ed. by Shastri	MA ed. by Okano
1a	pratyakṣato na bhagavān sugato na viṣṇuḥ	= Hahn	sambuddha eva bhagavān suguṇī na viṣṇur
1b	ālokyate	= Hahn	saṃśasyate
1cd	*°prabhāvaṃ śrutvā	°prabhāvāt śrutvā	°prabhāvāñ chrutvā
2a	°dāyudharaudrapāṇiḥ	= Hahn	°do vighṛṇaiḥ pramāyī

訳の冒頭に掲げられた作品名の文では、byung ba'i が byung bar と記される。

17. この表 2 の Shastri edition の段の中で、= Hahn と記してある箇所は、その読みが Hahn edition と全く同じ読みであることを示す。また *が語頭についての語は校定者による推測の読みであることを示す。

2b	śambhur vilagnanṣīro- 'grakapālamālī	= Hahn	rudro vibhūtyajakapāla- dharah pramattaḥ
2d	pūjayāma upaśāntam	= Hahn	pūjayemahi suśāntam
3a	°kulanāśakaro babhūva	= Hahn	°nṛpanāśakaraḥ sa cakrī
3b	kilāsīt	= Hahn	pinākī
4a	rakṣaṇīyo	rakṣaṇīyaḥ	rakṣaṇīyo
4c	*°buddheḥ	°buddhaiḥ	*°buddheḥ (°buddhir Ms.)
4d	vañcanīyāḥ	= Hahn	*vañchanīyāḥ (vañchanīyāḥ Ms.)
5a	*°janakāni *vacāṃsi	°janitāni ca yāni	°janitāni vacāṃsi
5c	*°śamakāni	°samayāni	°śamakāni
5d	*vandyatvam	bandhatvam	vandyatvam
6a	*°vadhāya	°vadhāva	°vadhāya
6b	kṛpayā vidhiṣu	= Hahn	jagataḥ kṛpayā
6d	pūjyas *tayoḥ	pūjyastayo	pūjyas tayoḥ
7a	sacakrāyudhaṃ	= Hahn	ca cakrāyudhaṃ
7c	°bhayārtitān	= Hahn	°bhayānkitān
7d	°vadhō*dyatapraharaṇān	°vadhōsyata prahaṇān	°vadhodyatapraharaṇān
8a	*yuvatim *anke suvadanāṃ	yuvatisahe suvadanā	suratim anke suvadanāṃ
9a	< -- > (*bādhī? or *drohī? or*himśro?)	< -- >	*himsro (himsyā Ms.)
9b	*viṣṇuḥ	viṣṇu	viṣṇuḥ
9b	*jñātihā	jñātihato	jñātihā
9c	*krūrāsya	krūrasya	krūrāsya
9c	*°māṃsāsini	°māṃsanī	°māṃsāsini (°māṃsāsini Ms.)
9d	°bale svalpo 'pi doṣo 'sti kaḥ	= Hahn	°balo srasto 'py adoṣaḥ suhṛt (°balo s[v]a[tt]o hy adoṣo 'sti kaḥ Ms.(ante corr.))
10a	ripavo na cānye	= Hahn	na ripur na cānyaḥ
10b	sākṣān na dṛṣṭacara ekataro 'pi caiṣāṃ	= Hahn	śāstā trilokagurur ekatamo 'pi dhīraḥ
10c	vacaḥsucaritā°	vacaḥ sucāritā°	vacaḥsucaritā°
10d	°lolatayā	= Hahn	°lobhatayā
11b	na hṛtaṃ kiṃ *cit	na ca hṛtaṃ kiñca	<*na> hṛtaṃ kiṃ cit
11c	*cāmalaṃ	cāmahaṃ	cāmalaṃ
11d	tadbhaktimanto	tad bhaktivanto	tadbhaktivanto

12b	°ruj*ārtasya	°rujārtayasya	°rujārtasya
12c	sphuṭam yasya	= Hahn	gūḍhaṃ yaś ca
12d	*santaṃ	santas	santas
12d	°manasaḥ	°mānasaḥ	°manasaḥ
13a	*°ṛcchayā	°icchayā	°ṛcchayā
13c	*taṃ	tvāṃ	taṃ
13c	munīndra°	munindra°	munīndra°
13d	āmarīṃ	āmarīṃ	āmarīṃ
14b	°vināśa°	= Hahn	°vipatti°
14b	°ābhyudgataḥ	= Hahn	°ābhyudyataḥ
14c	śākyakule *vare (?) *'dbhutamatis *trātā	śākyakulendrā- adbhūtamatiśtrāto	śākyakulendur acyutamatis trātā
15a	asura*sura*ratnā°	asuradārā°	asurasuradārā°
15b	māyānvītaṃ (?)	māyānvitam	māyāvītaṃ (or *māyāvīte?)
15c	*vandyo	'vandyo	vandyo
15c	api vimukto *'budhatayā	api vimukto budhatayā	aparimukto 'budhatayā
16b	visṛjya haraye *mahīṃ <*sa> balir āpa kaṣṭhāṃ daśāṃ	visṛjya haraye mahatīṃ balir āpa kaṣṭhāṃ daśāṃ	mahīṃ mahatīṃ visṛjya harayevāpa kaṣṭhāṃ baliḥ
16d	°*karāmbarāṃ	°talāṃ ca sam	°talāñ ca samprāptavān
17c	yuktimac	= Hahn	muktimac
17c	*yasya	asya	yasya
17d	*śāstus	kāryas	kāryas
18cd	°cetasāṃ *janair aśeṣaiḥ	°cetasāṃ janān aśeṣaiḥ	°cetasā janena śeṣaiḥ
19a	yasya ca na santi nikhilā	yasya ca na santi nikhilān	yasyāpi kiñcin na hi doṣaleśāṃ
19b	doṣāḥ sarve guṇāś ca vidyante	doṣāḥ sarve ca guṇāś ca vidyante	sarve guṇāḥ santi jagaddhitārthe
19c	brahmā va viṣṇur vā	= Hahn	brahmāpi viṣṇur giriśo harir vā
19d	maheśvaro vā sa me śāstā	= Hahn	sa me hi śāstā śubhakāri mitram
20a	doṣā na vidyante	doṣāḥ na vidyante	na vidyate doṣo
20b	cāmitā	= Hahn	sakalā
20c	sarvajñaś ca kṛpāluś ca	= Hahn	sarvajñaḥ sa jagacchāstā
20d	gataḥ	= Hahn	vraje
21a	stute	stuta	— ⁽¹⁸⁾

18. この表で DS 第21詩節（最後の詩節）の箇所には、MA には相当詩節が存在しないので、—と表記している。

21b	buddhe	buddhaṃ	—
21d	sukhinaḥ < v v > tena	sukhinaḥ < v v > tena	—

この表 2 に示された、Hahn (2000) と MA のテキスト間の読みの違いを検討してゆくと、MA という梵文作品の DS 相当詩節がもたらした DS 校訂への貢献が明らかになる。その得られた成果を、次の様に簡単にまとめてみると：

(1) Okano の MA (第 2 伝承) に基づいて、蔵訳も考慮に入れた上で、Hahn (2000) の DS 梵文テキスト (第 1 伝承) を修正した方がよいと思われる箇所が、多数指摘できる。それは以下のように両者の読みが異なる箇所である (以下、DS の詩節番号でその箇所を示す)：

4d DS vañcanīyāḥ ⇔ MA *vāñchanīyāḥ; 5d DS na ⇔ MA ca; 6b DS kṛpayā vidhiṣu ⇔ MA jagataḥ kṛpayā; 8a DS *yuvatiṃ ⇔ MA suratiṃ; 9a DS <- -> ⇔ MA *hiṃsro; 12c DS yasya ⇔ MA yaś ca; DS °ābhyudgataḥ ⇔ MA °ābhyudyataḥ; 15b DS māyānvītaṃ(?) ⇔ MA māyāvitvaṃ; 15c DS api vimukto ⇔ MA aparimukto; 18c DS cetasaṃ ⇔ MA cetasā; 18d DS *janair aśeṣaiḥ ⇔ MA janena śeṣaiḥ

(2) Hahn (2000) が推測に基づいて Shastri 本を修正した箇所に対して、今回 MA (第 2 伝承) に基づいて Hahn のその推測が正しかったことが確認できた箇所を多数指摘できる。Hahn の推測した読み (conjecture) に対してアステリスクの印 (*) を付すと、その読みが、今回 MA によって、推測が正しかったことが確認できた箇所は以下の通りである：

5a DS *vacāṃsi, 5c DS *śamakāni, 5d DS *vandyatvam, 6a DS *vadhāya, 6d DS *tayoh, 8a DS *aṅke, 9a DS *viṣṇuḥ, 9b DS *jñātihā, 9c DS *krūrāsyā, 9c DS *°māṃśāsīnī, 12d DS °°manasaḥ, 13a DS *r̥chayā, 13c DS *taṃ, 15a DS asura*sura°, 15c DS *vandyo, 15c DS *budhatayā, 16b DS *mahīṃ, 17c DS *yasya

(3) 第 1 伝承たる Hahn の校訂 DS テキストとは異なる読みが、第 2 伝承たる MA で得られた箇所が沢山あるが、第 2 伝承の読みが第 1 伝承の読みよりも必ずしも良い読みとは言えないことも多い。DS の校訂のためには使えない悪い読みも MA には沢山ある。その、第 2 伝承が第 1 伝承とは異なる読みが集中的に現れる詩節に関しては、扱いに注意する必要がある。次の I-6 で述べるように、MA において意図的な改変の手が集中的に加えられたと判断できる詩節にある、DS と異なる読みと、そうではない読み (つまり集中的に強い改変の手が加えられていないと判断できる詩節にある、DS と異なる読み) とは、質が異なると思われるので、同じ MA の内部の DS 相当箇所の異読とはいえ、両者をきちんと区別して扱う必要がある。MA で故意に集中的に改変がなされたら

しい詩節に属さない場合であれば、DS とは異なる MA の読みは、その読みが蔵訳から支持されないとしても、多少の価値がある。例えば、次のようなものである：

7c DS °ārtitān ⇔ MA °ānkitān; 12c DS sphuṭaṃ ⇔ MA gūḍhaṃ; 17c DS yuktimac ⇔ MA muktimac.

—— 以上、DS と MA との比較の作業を行ってきたが、その作業の結果として得られた、私が Hahn 本 DS に対して施す改善案を盛り込んだ新しい DS のテキストをここで試案として示しておきたい。太字の部分が Hahn 本と違っている。

Devātīśayastotra (= Devatāvimarśastuti)

A new edition by Okano

pratyakṣato na bhagavān sugato na viṣṇur
ālokyate na ca haro na hiraṇyagarbhaḥ /
teṣām tu rūpacaritātīśayaprabhāvaṃ
śrutvā vicārayati ko guṇavān na veti // 1

viṣṇuḥ samudyatagadāyudharaudrapāṇiḥ
śambhur vilagnanṛśiro'grakapālamālī /
ekāntaśāntacaritātīśayas tu buddhaḥ
kaṃ pūjayāma upaśāntam aśāntarūpam // 2

duryodhanādikulanāśakaro babhūva
viṣṇur haras tripuranāśakaraḥ kilāśit /
krauñcaṃ guho 'pi dṛḍhaśaktihataṃ cakāra
buddhas tu kevalam ayaṃ jagato hitaiṣī // 3

pīḍyo mamāyam ayam eva tu rakṣaṇīyo
vadhyo 'yam ity api surottamanītir eṣā /
niḥśreyasābhyudayasaukhyahitaika*buddher
buddhasya naiva ripavo na hi **vāñchanīyāḥ** // 4

rāgādidoṣajanakāni vacāṃsi viṣṇor
unmattaceṣṭitakarāṇi ca yāni śambhoḥ /
niḥśeṣadoṣaśamakāni tathāgatasya

vandyatvam arhati **ca** ko 'tra vicārayadhvam // 5

yaś codyataḥ paravadhāya ghr̥ṇāṃ vihāya
trāṇāya yaś ca **jagataḥ kṛpayā** pravṛttaḥ /
rāgī ca yo bhavati yaś ca vimuktarāgaḥ
pūjyas tayoḥ ka iha taṃ vadatānucintya // 6

śakraṃ vajradharaṃ balaṃ haladharaṃ kṛṣṇaṃ **ca** cakrāyudhaṃ
skandaṃ śaktidharaṃ śmaśānanilayaṃ rudraṃ trisūlāyudhaṃ /
etān duḥkhabhayārtitān gataghṛṇān bālān vicitrāyudhān
nityaṃ prāṇivadhodyutapraharaṇān kas tān namasyed budhaḥ // 7

na yaḥ śūlaṃ dhatte na ca **suratim** anke suvadanāṃ
na cakraṃ śaktiṃ vā na ca kuliśam ugraṃ na ca halaṃ /
vinirmuktaṃ kleśaiḥ parahitavidhānodyatadhiyaṃ
śaraṇyaṃ lokānāṃ tam ṛṣim upayāto 'smi śaraṇam // 8

rudro rāgavaśāt striyaṃ vahati yo **himsro** hriyā varjito
viṣṇuḥ krūratarāḥ kṛtaghnacaritaḥ skandaḥ svayaṃ jñātihā /
krūrāsyā mahiśāntakṛn naravasāmāmsāsīnī pārvaṭī
pānepsī ca vināyako daśabale svalpo 'pi doṣo 'sti kaḥ // 9

bandhur na me sa bhagavān ripavo na cānye
sākṣān na dṛṣṭacara ekataro 'pi caiśām /
śrutvā vacaḥsucaritātiśayaprabhāvaṃ
buddhaṃ guṇātiśayalolatayā śritāḥ smaḥ // 10

nāsmākaṃ sugataḥ pitā na ripavas tīrthyā dhanaṃ naiva no
dattaṃ tena tathāgatena na hṛtaṃ kiṃ cit kaṇḍādātibhiḥ /
kiṃ tv ekāntajagaddhitaḥ sa bhagavān buddho yataś cāmalaṃ
vākyam sarvamalāpahāri ca yatas tadbhaktimanto vayam // 11

hitaiṣī yo nityaṃ satatam upakārī ca jagataḥ
kṛtaṃ yena svāsthyaṃ bahavidharujārtasya jagataḥ /
sphuṭam yasya jñeyaṃ karatalam ivāvaiti sakalaṃ

prapadyadhvaṃ **santas** tam ṛṣim asamam bhaktimanasah // 12

asarvabhāvena yadṛcchayā vā
parānuvṛtyā vicikitsayā vā /
ye tam namasyanti munīndracandram
te 'py āmarīm saṃpadam āpnuvanti // 13

paurāṇī śrutir eṣa lokamahito buddhaḥ kilāyaṃ harir
dṛṣtvā janmajarāvināśavaśagaṃ lokam kṛpā**bhyudyataḥ** /
jātaḥ **sākyakulendur** adbhutamatis trātā nṛṇām gautamaḥ
śāstāram hitam eva kas tam adhunā nāvaiti mūḍho janaḥ // 14

yadā rāgadveśād asurasura*ratnāpaharaṇam
kṛtaṃ ***māyāvitve** dharāṇiharaṇāsaktamatinā /
tadā pūjyo vandyo harir aparimukto 'budhatayā
vinirmuktaṃ buddhaṃ na namati jano mohabahulaḥ // 15

caturjaladhimekhalākulanitambabhārālasām
visṛjya haraye mahīm <*sa> balir āpa kaṣṭam daśām /
pradāya munaye tu pāmsulavam apy aśoko nṛpaḥ
kṣitiṃ sakalacandraṃḍala*karāmbarām prāptavān // 16

pakṣapāto na me buddhe na dveṣaḥ kapilādiṣu /
yuktimac ca vaco *yasya *śāstus tasya parigrahaḥ // 17

avaśyam eṣām katamo 'pi sarvavit
jagaddhitaikāntaviśālaśāsanah /
sa eva mṛgyo hy atisūkṣmacetasā
janena śeṣaiḥ kim anarthapaṇḍitaiḥ // 18

yasya ca na santi nikhilā
doṣāḥ sarve guṇāś ca vidyante /
brahmā va viṣṇur vā
maheśvaro vā sa me śāstā // 19

yasya doṣā na vidyante vidyante cāmitā guṇāḥ /
sarvajñaś ca kṛpāluś ca tam ahaṃ śaraṇaṃ gataḥ // 20

evam stute stutisahasranadīsamudre
buddhe vibuddhakamalāyatapattranetre /
yat kiṃ cid asti kuśalaṃ mama vāksamutthaṃ
sattvā bhavantu sukhinaḥ < v v > tena sarve // 21
// ācāryaśankarasvāmipādakṛtā devatāvimarśastutiḥ samāptā //

上記の新たな DS 梵文テキストに基づく、私の DS の和訳を以下に挙げる。

1 視覚によって（直接知覚によって）世尊・善逝（仏）は視られることがなく、ヴィシュヌも、ハラ（シヴァ神）も、黄金の胎（ブラフマー神）も、[視られ]ない。しかるに彼らの姿かたちと行いの卓越した輝かしさを耳にして、どの者が徳性があり、[どの者が] そうでないかに [人は] 考えをめぐらせる。

2 ヴィシュヌは振り上げたガダー（棍棒）の武器のある恐ろしい手をもつ。シャンブ（シヴァ神）は人間の頭頂部（生首?）・髑髏の数珠をつけている。しかるにブッダは完全に寂靜なる行為という卓越をもつ。我々は誰を供養しようか——寂靜なる者か、それとも寂靜ならざる姿をもつ者か。

3 ヴィシュヌはドゥルヨーダナなどの一族を滅亡させた者であった。ハラ（シヴァ神）はトリプラの破壊者であったと伝わる。グハ（スカンダ神）はクラウンチャを固い槍で刺し殺した。このブッダのみが純粹に、生類に益することを願った。

4 「私にとって、こいつは苦しめられるべきであり、こいつは護られるべきであり、こいつは殺されるべきだ」——これが神々の最高者の行動のしかたである。至福（解脱）と増進（繁栄）の幸せに益することを、ただ一つの思いとしてもつブッダにとって、敵である者たちもおらず、好もしい者たち（愛すべき味方）もいない。

5 ヴィシュヌの言葉は情欲などの悪徳を生じさせる。またシャンブ（シヴァ神）のそれ（言葉）は狂った振舞いをさせる。如来のそれはあらゆる悪徳を鎮める。ここであなた方は熟考すべきである、[それらのうちの] 誰が、拝礼されるに値しない者なのかを。

6 一方の者は憐愍を捨てて、他者を殺すために努力するが、他方の者は救済のために、生類への憐れみにより、活動する。また一方の者は情欲を有するが、他方の者は情欲から解き放たれている。その両者のどちらが供養に値するか、ここでよく考えて、彼 [の名] を言ってみなさい。

7 金剛を手にするシャクラ（インドラ神）、すきを手にするバラ（バララーマ）、また、戦輪の武器をもつクリシュナ、槍を手にするスカンダ、墓場を住所にして三叉戟の武器をもつルドラ、——これらの、苦しみと恐怖によって苦しめられた、憐愍無く、子供っぽい、様々な武器をもつ、常に生き物を殺すために武器を振り上げる彼らを、いかなる賢者が礼拝しようか。

8 [三叉] 戟を持っておらず、とても快樂を楽しむ美貌の女を膝の上に載せておらず、戦輪あるいは槍を、あるいは恐ろしい金剛を、あるいはすきを持っておらず、煩惱から解放されており、利他の行為に熱心な思いをもつ、生類が依るべき処（帰依処）であるかの聖者（仏）に、私は依り処として近づいた（帰依をなした）。

9 ルドラは情欲のゆえに女を[膝に]のせ、残忍であり、羞恥心を欠いている。ヴィシュヌはより一層残酷であり、恩知らずな行為をし、スカンダは自ら親族を殺した。残酷な顔をもつ女パールヴァティーはマヒシャを殺し、人間の脂肪と肉を食べる。ヴィナーヤカは飲むことを好む。[それにひきかえ]十力（仏）においては、わずかであつても、どんな悪徳があるか。

10 私にとってかの世尊は親族ではないし、他の者たち（外道の徒）は敵ではない。直接じかにその[行為の]一つすら見たのではないが、言葉と善き行為における卓越した偉大さを持つお方であることを聞いて、徳性の卓越を望むが故に、ブッダに私たちは帰依する。

11 善逝（仏）は私たちの父ではないし、外道の徒は敵ではない。かの如来から施しが私たちに与えられたわけでもないし、カナダなどの[外道の徒]から[私たちは]何一つ奪われたわけでもない。しかしながら、かの世尊・ブッダは専一に生類の益をなす者である故に、また[彼の]汚れなき言葉はすべての汚れ（煩惱）を取り去るものである故に、私たちは彼に篤い信仰を捧げる。

12 絶えず[他者を]益することを願う者、いつも生類を助ける者であり、様々なかたちの病に苦しむ生類を健康に戻す者、[おのが]掌のように明瞭にあらゆる知の対象を理解している者である、——その無比なる聖者に対して、善良なる篤い信心をもつ者として、あなた方は帰依をなすがよい。

13 [礼拝を]真心をこめて[したわけ]ではなく、あるいはたまたま偶然に[行っただけ]であるか、あるいは他人に従った[だけ]であるか、あるいは疑念をもちながら[行っただけ]の場合であつても、月のような『牟尼たちの王』（仏）に礼拝をするならば、そのような者たちであつても、神々の完全な幸福の達成を得る。

14 これはプラーナの聖典伝承であるが、生類から尊崇されるこのブッダとは、ハリ（ヴィシュヌ）であるようだ。[彼は]生類が生と老と滅び（死）に支配されているのを見て、憐れみから昇り出た釈迦族の月として、希有なる心をもつ、人類の救済者ガ

ウタマとして、誕生なされた。かのお方が有益な教師であることを、今日いかなる愚かな人々が理解しないのか。

15 貪りと瞋りの故に、大地を奪うことに執着した思いをもつ者（ヴィシュヌ）によって、アスラとスラ（神々）の宝の掠奪が、[彼の] 欺詐ある性質において、なされた時、非賢者性（愚者性）のゆえに解脱していない者であるハリ（ヴィシュヌ）は[多くの者によって] 供養されるべき者・礼拝されるべき者とされた。[しかるに] 愚かな迷妄に満ちた人々は、解脱している方であるブッダを礼拝しない。

16 四海という腰帯を[はちきれんばかりに] 満たす臀部の重荷（重さ）によって動きの鈍い[女である] 大地を、バリはハリ（ヴィシュヌ神）に贈って、[その結果バリは] 悲惨な状態を得た。[一方] しかしアショーカ王は牟尼（仏）にわずかな塵を与えたので、満ちた月の輪の光線を衣裳とする（月光が照らす限りの）[すべての] 大地を得た。

17 私は[意図的に] ブッダに味方するわけではなく、カピラなどの[異教徒] を憎んでいるわけでもない。道理に適った言葉をもつところのその教師を[私は] 受け入れる（認容する）。

18 これらの者たちの中で、いずれかの者が確かに一切智であって、生類の利益のために純一に広大な教を説いた者であれば、その者こそが、甚だ思考の鋭い精神をもつ人々によって探し求められるべき者である。残りの、無益な事柄を知る学者たちに何の用があらう。

19 どんな悪徳も無く、あらゆる徳性が有る者であれば、— [たとえ] ブラフマーであれ、ヴィシュヌであれ、大自在天（シヴァ神）であれ、— そのお方が私の教師である。

20 その方には諸々の悪徳が無く、無量の徳性が有り、一切智であり、憐れみ深い方であるから、私はそのお方に帰依している。

21 幾千の『讚』という河が流れ込む海である、開花した蓮の大きな葉のごとき眼をおもちになるブッダを讚えおわって、私の[この] 言葉から生じた功德がいかほどか有るならば、それによってあらゆる有情が幸せになりますように！

阿闍梨シャンカラスヴァーミン様の作、『神格への吟味の讚』終わる。

I-6. MAに見られるDSテキストの改変はなぜ生じたか

DSの蔵訳から推測される本来のDSの梵文テキストと大きくかけ離れた読みが、第2伝承（MAの中のDS相当箇所）のほうにおいて、第1伝承（ShastriとHahn校訂のDS）の写本よりも、頻繁に出現する傾向がある。梵文テキストと一緒に蔵訳テキストも挙げている上記の表1を注意深く見た人は、DSの蔵訳から推測される本来のDSの梵文テキストと大きくかけ離れた読みが、第2伝承のテキスト全体の中で、決して散発

的に気まぐれに現れるのではなく、いくつかの詩節で、局所的に集中したかたちで現れていることに気づくに違いない。そのような局所的に集中的になされた故意の改変、すなわち改竄が、第2伝承においていつ生じたのかを考えて見ると、MA中のDS相当箇所テキスト——以下、その略号をMA(DS)とする——の梵文が初めて書かれた時、すなわちMAというavadāna作品がネパールにおいて制作されて、そこに古いDSのテキストが初めて組み込まれた時こそ、古いDSのテキストに対する積極的な変更としての改竄が施された時であったに違いない。その時以外に、そのような強引な読みの改変を行う機会は無かったであろう。Subhāṣitamahāratnāvadānamālāが作られた時、その中にMAという第20章を作るにあたって、その作者は彼が利用するDSの梵文写本をそのまま素直に忠実に写すというやり方をとらずに、何らかの意図をもって、DSの梵文に対して局所的に積極的な改変を加えながら、利用したのであろう。

第2伝承たる、MA(DS)において、その積極的な改変が見られる箇所を具体的に示せば、それは次の表3に示される如くである：

表3 MAが積極的に改変された(と思われる)読みを示す箇所におけるDSとMA(DS)の表現の違い

DS stanza	DS ed. by Hahn	MA(DS)
1a	pratyakṣato na bhagavān sugato na viṣṇuḥ	saṃbuddha eva bhagavān suguṇī na viṣṇur
1b	ālokyate	saṃśasyate
2a	°dāyudharaudrapāṇiḥ	°do vighṛṇaiḥ pramāyī
2b	śambhur vilagnanṛśiro- 'grakapālamālī	rudro vibhūtyajakapāladharaḥ pramattaḥ
3a	°kulanāśakaro babhūva	°nṛpanāśakaraḥ sa cakrī
3b	viṣṇur haras tripuranāśakaraḥ kilāsīt	haras tripuranāśakaḥ(!) pinākī
9d	°bale svalpo 'pi doṣo 'sti kaḥ	°balo srasto 'py adoṣaḥ suhṛt Ms.(post corr.); °balo s[v]a[tt]o hy adoṣo 'sti kaḥ Ms.(ante corr.)
10a	ripavo na cānye	na ripur na cānyaḥ
10b	sākṣān na dṛṣṭacara ekataro 'pi caiṣām	śāstā trilokagurur ekatamo 'pi dhīraḥ
16b	visṛjya haraye *mahīṃ <*sa> balir āpa kaṣṭām daśām	mahīṃ mahatīṃ visṛjya harayevāpa kaṣṭām baliḥ
19a	yasya ca na santi nikhilā	yasyāpi kiñcin na hi doṣaleśaṃ

19b	doṣāḥ sarve guṇāś ca vidyante	sarve guṇāḥ santi jagaddhitārthe
19c	brahmā va viṣṇur vā	brahmāpi viṣṇur giriśo harir vā
19d	maheśvaro vā sa me śāstā	sa me hi śāstā śubhakāri mitram
20a	doṣā na vidyante	na vidyate doṣo
20b	cāmitā	sakalā
20c	sarvajñaś ca kṛpāluś ca	sarvajñaḥ sa jagacchāstā
20d	gataḥ	vraje

この表3に記したDSとMA(DS)の——すなわちDSの第1伝承と第2伝承の——読みの相違は、明らかに意図的改竄を疑うべき性格のものであり、それらは写本が伝承される間に自然に生じた異読としては説明がつかない。しかし逆に、上記の表3に記していないところの両者の読みの相違すべては、写本伝承の間に意図せずして生じた相違として理解して差し支えないものである。

それ故、第2伝承の梵文テキストの読みを扱う際には、「或る時に意図的に古いテキストの読みが変えられたため、それで大きな違いが生じているケース」と、「恣意的な改変の故の違いではなく、写本伝承の途中で自然に違いが生じたにすぎないケース」の、二つのケースを、意識してきちんと区別する必要があるように思う。

上記表3が示すとおり、MA(DS)のテキストの、第1～3詩節、9～10詩節、16詩節、19～20詩節が、「意図的に読みが改変されたケース」の読みが頻発している詩節にあたる。これらの詩節にあるMA(DS)の異読は蔵訳と合わず、あまりに異常で信頼出来ないため、Hahn校訂DS梵文テキストを改善する役には立たないといってよい。

それら以外の、MA(DS)の第4～8詩節、11～15詩節、17～18詩節にある、DSとは異なる読みはどれも、恐らく「意図せずして伝承の途中でいつの間にか違う読みが生じてしまったケース」にあたる。これらの詩節の異読は、後代の意図的な改変（改竄）を被った結果ではない読みと見て差し支えないので、Hahn校訂テキストを改善するために有益なデータとなる。

表4

DSの詩節に明白に改竄の手が加えられたMA(DS)の詩節：	1, 2, 3, 9, 10, 16, 19, 20
DSの詩節に改竄の手が加えられていないMA(DS)詩節：	4, 5, 6, 7, 8, 11, 12, 13, 14, 15, 17, 18

表4を見て、MA(DS)がもつ20の詩節のうち、テキスト全体の開始部と終結部（第1～3詩節、第19～20詩節）において意図的な改変が加えられた箇所が多くある事、またその始部と終部の中間にある詩節には意図的な改変を被っていない詩節が多い事は、その意図的な改変（改竄）を行った人物がMAの作者であったことを示唆している。

つまり MA の作者が MA の中に DS の詩節テキストを組み込む時に、彼は DS の最後の第21詩節を、MA での利用に適さない詩節として切り捨てたに留まらず、起源が異なる二つのテキストが接合する場所である、DS の冒頭と末尾のあたりを特に気にして、手を加えたと推測される。

MA(DS) のいくつかの詩節が、DS と比べて極めて不自然で強引な改変を受けているテキストであることがわかる一つの顕著な例として、MA 166詩節（第 2 伝承）と、それに対応する DS 第19詩節（第 1 伝承）の梵文テキストの違いを例に挙げるなら：

第 2 伝承： Mālikāvadāna 166：

yasyāpi kiñcin na hi doṣaleśam
sarve guṇāḥ santi jagaddhitārthe /
brahmāpi viṣṇur giriśo harir vā
sa me hi śāstā śubhakāri mitram //

第 1 伝承： Devātīśayastotra 19：

yasya ca na santi nikhilā
doṣāḥ sarve guṇāś ca vidyante /
brahmā va viṣṇur vā
maheśvaro vā sa me śāstā //

この二つの詩節を見比べて、MA の詩節の改変されたと思われる箇所を太字にしてみた。この DS 第19詩節（第 1 伝承）は Āryā の韻律で書かれた優雅な詩節であるが、恐らくその Āryā の韻律が苦手らしいネパールの avadānamālā の作者によって無理やりに Upajāti の韻律にされて、その韻律の型にするために必要な沢山の余計な語句が付け加えられて、今の MA 第166詩節（第 2 伝承）のような姿になったのである。このような意図的な改変が、単にこの第19詩節だけで済んだはずが無い。同じ時に恐らく同じ人物によって、表 3 と表 4 に示した複数の詩節において、意図的な改変がなされたと考えてよいであろう。その意図的な改変を行った人物は恐らく MA の avadāna 全体のテキストを作った作者と同一であろう。つまり MA という Subhāṣitamahāratanāvadānamālā 第20章全体のテキストを作った人物が、MA の内部に DS のテキストを組み込む時に、DS のテキストに対してもいくつかの詩節において積極的に手を加えたのであろう。

DS のテキストに対して、現 MA のテキストを作った人物がいかなる理由によって積極的な改変を施したのか、その改変の理由を上記の表 1 へのコメントにおいて私は詩節ごとに記したが、ここで表 5 として、改竄がなされた箇所ごとに、そこで考えられる改変の理由を表としてまとめて示したい。

表 5

改竄のある MA(DS)の stanza	MA(DS)において故意の文面の変更（改竄）がなされた理由
1 ab	pāda ab で DS の <i>pratyakṣato na [...] ālokyate</i> 「[仏は] 眼で直接的に視られない」の読みが MA では <i>saṃbuddha eva [...] saṃśasyate</i> 「仏こそが讃えられる」に書き直されているが、その文面変更の理由は明白であり、MA の話ではこの詩節を異教徒の在家信者に向かって語るのは園丁であって、その園丁は仏たる釈尊の姿を眼で視て仏教徒に改宗した人物であるから、DS の「[仏は] 眼で直接的に視られない」の表現をそのままにしておいて、それを園丁に語らせるわけにいなかった。つまり DS のテキストを MA の中に入れる際に、必要となる変更であった。
2 ab	pāda ab のヴィシュヌ神とシヴァ神の持ち物などの表現において、MA は改竄後の、DS とは大きく違っている表現を示す。なぜ両神の描写を変えたのかは不明であるが、MA の改竄者はその両神の表現に不満を感じて、独自のものに変更したのではないか。
3 ab	pāda a において、MA の現テキストの作り手は DS の正しい読み <i>babhūva</i> を MA の <i>sa cakrī</i> という表現に差し替えたらしい。その時 <i>sa cakrī</i> の語がヴィシュヌ神を意味する語であるため、DS の pāda b にあった <i>viṣṇur</i> の語を削ったらしい。その改竄の結果 MA の pāda b が韻律的に欠陥あるものとなった。
9 d	MA 写本を筆記した Jayamuni は pāda d において DS の正しい読みが少し崩れた文を写本にまず筆記したが、彼はその文がよく意味が通らないことに気づき、そのままほっておくことができず、pāda d を少し自由に作文して、一応意味が通る文に変えてしまった。
10 ab	DS は pāda b で「私は仏の行為を直接視たわけではない」と語るが、MA のアヴァダーナでは、その言葉を語る人物である園丁が先に仏に出会っている以上、改竄をせざるを得なかった。
16 b	詩節の pāda b の箇所テキストが、恐らく写本伝承の乱れにより理解不能であったために、それを修正しようとした。（結果的にうまくゆかず、韻律のエラーが残されたままになっている。）
19 abcd	詩節の韻律を強引に Āryā から Upajāti に変更した。
20 abcd	詩節のあちこちを改変しなければならない明白な理由が見当たらない。詩節のテキストが DS と全く同一になることを嫌がって恣意的になされた改変と思われる。

I-7. MA に見られる意図的な改変を行ったのは誰か

では MA において表5のような DS テクストの意図的な改変を行った人物は誰だろうか。

この MA という1つの章において、MA の章を含む Subhāṣitamahāratnāvadānamālā 写本全体の筆記者である Jayamuni のペンの動きに注意してゆくと、彼が筆記者として目の前にある写本をおとなしく受動的な態度で写しているとは決していえない箇所があることに気づく。その顕著な例が MA 第154詩節の pāda d の箇所である。この箇所にペンを走らせていた Jayamuni は、筆写の途中で筆を止めてテキストの文に悩み、自ら大胆な改変を施したらしいことが、その書き直した跡からわかる。Jayamuni は初め、その箇所で s[v]a[tt]o hy adoṣo 'sti kaḥ と紙に書いた。その後、彼は文を読み直して、それでは文の意味が通らないことに気づいたのであろう。確かにそれでは意味が通らないはずである、この箇所を正しくは DS 第9詩節の pāda d にあるように、svalpo 'pi doṣo 'sti kaḥ と記さねば、文の意味が通らないのであるから。しかし Jayamuni が筆写のために利用した DS 写本は恐らく、Jayamuni が入手する前に既にその箇所に誤りが生じていた写本であったため、そのまま書いたのでは意味が通らなかった。こういう場合、受動的で無責任な態度の筆記者であれば、原文を変えることを恐れて、意味が通らなくても元の写本にある字の通りに書いて、その文をスルーしてしまうであろう。しかし Jayamuni は絶えず写本を理解しながら書き、意味が通る文でなければ気が済まない、責任感の強い筆記者であったようだ。彼はその箇所を、srasto 'py adoṣaḥ suhṛt という文に書き直した。これは創作に近い、思い切った文の改変であるといつてよい。読んで意味が通らなければ、Jayamuni はこのように文を大胆に強引に変えてしまうことも辞さない性格の筆記者であったことがこの箇所からわかる。avadānamālā 文献群の筆写に際して、Jayamuni はまさに creative な筆記者であり、文に不満をもてば積極的に書き変えることを厭わない筆記者として活動しているようだ。

このように、MA(DS) 9d における改変は Jayamuni 本人がなしたものであることがその写本の書き直しの痕からわかるが、それ以外の表5の箇所の多くの改変についても、私はそれを行ったのは筆記者の Jayamuni であるか、あるいはその Jayamuni のもとで働く Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の製作グループの一人であると考えている⁽¹⁹⁾。(その作業グループについては後に説明する。)

19. Subhāṣitamahāratnāvadānamālā 写本の筆記者が Jayamuni であることの確認は、岡野 (2019) 16 頁の説明を参照のこと。

Jayamuni は、ネワールの歴史書『王統史』*vaṃśāvalī* にある彼の伝記的情報から推測するに、故国の仏教の学術文芸の復興を夢見て努力している、愛郷心が強い筆記者であり、秘かな情熱をもって仕事をした学者である。決して受動的・義務的に人から命じられた写本を筆写しているような人物ではなく、学者として計画的に、自発的に自分が写すべき写本を探しては丁寧に写し、必要とあらば（彼が写した諸写本から確認できるように）テキストの改変や再編集を行うことも厭わない人物である。Subhāṣitamahāratnāvadānamālā のようなネパール土着の *avadānamālā* 文献の場合、その筆記者の役割とは、通常我々が考えているものとは恐らく違っている。Jayamuni が果たしたその *avadānamālā* 諸作品における筆記者としての仕事は、むしろ *Avadānaśataka* を再話する文献群を作る作業工程の「最終確認者」の役割を果たす、「完成されたテキストの最終確認者」としての筆記者であったのではないか⁽²⁰⁾。

Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の筆写ばかりでなく、その作品の作成にも Jayamuni が関わっている可能性を示す決定的な証拠は無いが、しかしこの第20章 MA の中に *Devātīśayastotra* のテキストが入っており、また次に来る第21章 *Pāñcālarājavadāna* においても『六道頌』*Ṣaḍgatikārikāḥ* のテキストが入っていることは⁽²¹⁾、Subhāṣitamahāratnāvadānamālā という作品を作った（あるいは、企画した）人物が、単にアヴァダーナを再話する目的だけに興味をもっていた人物ではないことを示唆する。*Devātīśayastotra* と *Ṣaḍgatikārikāḥ* のどちらのテキストも写本がネパールでも極めて稀にしか存在しない類いのテキストであり、17世紀頃のカトウマンドウではすでにほとんど忘れられかけた作品であったはずである。その頃にこのような滅多に写本がない古い文学的なテキストを見つけて珍重していた人物として、インドの仏教文学の梵語の古い作品や写本の搜索ならびに保存に強い興味と情熱をもっていた学者 Jayamuni をまず思い浮かべるのは当然であろう。これは憶測にすぎないが、Jayamuni が彼の古写本探求の中で見つけたこのような珍しい梵文テキストの伝承がネパールから完全に失われてしまうことを恐れて、*avadānamālā* の製作において、それらの散逸しやすい短いテキストをわざと幾つかのA

20. これは岡野 (2019), pp. 8-9 にも記した私の推測であるが、Jayamuni の背後には数人の準備と製作の段階を手伝う Patan 地区の僧侶たちがいて、その下位グループの者たちが作成した仮原稿を、上位に立つ Jayamuni が指導しながら自ら筆記することで確認し、それで作品の最終形としての写本を確定することが出来たのではないか。そうであるなら、Jayamuni が書いて完成した *avadānamālā* 諸写本が、依用されるべき、最も権威あるものとして、作成後に次の世代の筆写生たちにとっての *archetype* 写本として使われていったのは、当然のことであつたらう。

21. 第21章 *Pāñcālarājavadāna* には『六道頌』*Ṣaḍgatikārikāḥ* の第1偈（掃敬偈）を除く第2～第105偈のテキストが丸ごとそっくり入れられている。それらのテキストについては岡野 (2018) と岡野 (2019) を参照。

ヴァダーナの中に組み込んだ（あるいは、組み込むように製作グループに依頼した）と考えられないだろうか。第20章と第21章という連続する章の中に、アヴァダーナとは全く異なる古いテキストをほぼ丸ごと組み込む編集・製作態度は明らかに意図的なものである。それは Jayamuni という人物を中心に推し進められた17世紀ネパールの「失われかけた古い仏教写本の伝承の復興運動」の方向性と合致している。このことは Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の作成・企画に Jayamuni が関わっていた可能性を示唆するものと考えられないだろうか。

I-8. Avadānaśataka を韻文で再話する文献の製作者

上節に記したように、Subhāṣitamahāratnāvadānamālā という重要な文献を製作したグループの中核にいる人物として Jayamuni という人物を考えるなら、彼が成し遂げた仕事については、作品の筆写という一行為に限定せず、「Avadānaśataka を韻文で再話する avadānānamālā 文献群」全体の製作運動を指揮したこと、と捉えたほうがより本質的な理解であろう。そもそも Subhāṣitamahāratnāvadānamālā という作品は、或る時期に計画的に一気に作られた「Avadānaśataka 系列の avadānānamālā 文献群」全体の製作物の一部であるから、その作品を含むそれらの再話文献群全体を作った製作者グループを想定する必要がある。その製作者たちのグループと、その avadānānamālā 文献群の代表的な2作品 (Kalpadrumāvadānamālā と Subhāṣitamahāratnāvadānamālā) の最も信頼できる archetype 写本を作った筆記者である Jayamuni という人物とを切り離して考えることは、無理があると私は考えている⁽²²⁾。最終稿の筆写人も製作者に含めるなら、「Avadānaśataka 系列の avadānānamālā 文献群」の製作者グループに対して、敢えて「Jayamuni を中心とする製作者集団」という言い方をするのも可能であるように私は思う。岡野 (2019) で述べたように、そのグループの本拠地は Patan の Jayamuni の寺 Mahābuddha Bāhā (= Bodhimaṇḍa 寺) にあったと推測されるので、その地域に住む仏教徒の知識人や僧侶 (金剛師や比丘) がその製作者グループのメンバーであったと私は推測する⁽²³⁾。

22. 「Avadānaśataka 系列の avadānānamālā 文献群」と「仏伝 avadānamālā 文献群」のジャンルにおいて、Jayamuni 以外の他の写本の筆記者たちはみな誤りが多く、意味が不明でも全く受動的な態度で写しているだけに見える。常に正確に意味が通る梵文を書こうとする熱心さをもつ Jayamuni に匹敵する筆記者はその avadānānamālā のジャンルでは見つからないが、その事実には注意すべきである。また Kalpadrumāvadānamālā と Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (= Ratnāvātattva) の諸写本において、Jayamuni 筆写本が archetype 写本の位置を占める。

23. Jayamuni の寺 Mahābuddha Bāhā が avadānamālā 文献の製作に関わっていたことを示唆するものとして、複数の avadānamālā 文献の中に出てくる mahābuddha という言葉に注意する必要があることは、すでに岡野 (2019) 12頁注21にも記した通りであるが、今回校訂した MA の中でも第56偈の前半句 (sākyamunir mahābuddho jineśvaras tathāgataḥ) にもその mahābuddha の語を見つけるこ

ネパールの *avadānamālā* 文献群がいつ、どのような人々によって創られたのかということは L. Feer や J.S. Speyer による *avadānamālā* に関する最初の研究以来、百年以上も学界において未解決のままになっている問題であるが、私は17世紀中葉に活躍した Jayamuni という Newar 仏教の説話文献の確立者に特に注目することが、この大きな問題を解決する糸口になると考えている。

avadānamālā 文献群のうち「*Avadānaśataka* を韻文で再話する文献群」として、次の四つの作品が現存している：

- (1) *Kalpadrumāvadānamālā*
- (2) *Ratnāvadānamālā*
- (3) *Subhāṣitamahāratanāvadānamālā* (= *Ratnāvadānatattva*)
- (4) *Aśokāvadānamālā*

これら四つの作品の中には *Avadānaśataka* を韻文で再話した内容とはいえない章も含まれているが、それらの章は後代に追加された章と見なし、それらの余計な章を取り

とが出来る。また MA の第56偈で *mahābuddho* の語の次にある *jineśvara* という人物の名にも注意する必要がある。この *jineśvara* という語は *Jayaśrī* の説法の対告者である一番弟子の名であり（岡野 (2019), 10-11頁を参照）、*Jayamuni* が受け継いだ *Jayaśrī* の法統を示唆する名である。— なおこの MA 第20章56偈以外に、*mahābuddha* という語が見つかる箇所を更に類似文献に探してみると、高島出版本 *Ratnāvadānamālā* に3箇所あり（出典①②③）、また同じ高島出版本の *Ratnāvadānatattva* に（MA の章以外に）1箇所あり（出典④）、また Speyer が校訂した *Kalpadrumāvadāna* にも1箇所あり（出典⑤）、また私が以前校訂した岡野 (2011), p. 221頁、SMRAM 30章 *Jātyandhapretikāvadāna* にも1箇所ある（出典⑥）ことがわかった。出典：①高島（第3章 *Cakrāvadāna*）36頁第5偈の前半句：*yaḥ purāsin mahābuddhaḥ sarvajñaḥ śrīghano jinaḥ*。②高島（第7章 *Vaṣuṣmatkumārāvadāna*）92頁第98偈の前半句：*adyāgreṇa mahābuddha bhavatāṃ śaraṇaṃ vraje*。③高島（第11章 *Hastakāvadāna*）137頁第46偈の前半句：*tatrādrākṣīt mahābuddhaṃ bhagavantaṃ sabhāsthitam*。④高島（第19章 *Raivatāvadāna*）246頁第86偈の後半句：*nirvṛta ālayalīno mahābuddho bhaved dhruvaṃ*。⑤ Speyer (1906, 1909), II, p. 89, *Kalpadrumāvadānamālā*, Chapter 10, *gāthā* 468ab: *śākyamunir mahābuddhaḥ sarvajño lokanāyakaḥ*。⑥ SMRAM 30 *Jātyandhapretikāvadāna*, 岡野 (2011) 221頁第5偈の前半句：*tadyathā sa mahābuddho bhagavān chākyapuṅgavaḥ*。— このように「*Avadānaśataka* 系 *avadānamālā* 文献群」においても *mahābuddha* という語をあちこちに見つけることが出来るが、その語の使用は、それらの文献群が *Jayamuni* の寺である *Mahābuddha* 寺建立の後に彼のグループによって作られた一つの証拠と言えるであろう。仏伝 *avadānamālā* である *Sambhadrāvadānamālā* の写本（東大 No. 429）は *Jayamuni* 自身が筆写したことが確実な作品であるが、その作品の第1章の最初の偈が *yo bhagavān mahābuddhaḥ* という *pāda* から始まっており、その *pāda* は *Tathāgatajanmāvadānamālā* の第1章の最初の偈を開始する *pāda* と同じである。明らかにこの二つの仏伝作品が製作される時に、その作者には *mahābuddha* という語が強く意識されていたことがわかる。

除いて、これら四つの作品の中の Avadānaśataka を再話した章を全部合わせて、その全体像を眺めてみた時 — 下の表 6 を参照 — 「Avadānaśataka を韻文で再話する avadānamālā」を作るという巨大な製作プロジェクトが存在し、機能していたことを確信できる。その製作プロジェクトは17世紀中頃のカトウマンドウ盆地でほぼ達成されていたと見てよい。そして私が知る限り、17世紀前半より前に、そのプロジェクトが存在したことを示す写本は皆無である。ネパール仏教写本の諸カタログを調べても、これらの Avadānaśataka 系列の avadānamālā は紙写本は沢山あるが、貝葉写本が1本も見つかっておらず、紙を使用する時代になって初めて作られた可能性が極めて高いように思われる。

表 6

Avś (varga)	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
KDAM	1	11	21	-	41	51	61	71	81	91
	2	12	22	-	42	52	62	72	82	92
		<15>		<33>		<54>				<100>
		<16>								
RAM				<32?>						
	3	13	23	-	43	53	63	73	83	93
	4	14	24	-	44		64	74	84	94
						<55>				
SMRAM	-		25	-	45		65	-	85	95
	6		26	-	46	56	66	76	86	96
	7	17	27	-	47	57	67	77	87	97
	8	-	28	-	48	58	68	78	88	98
	9	-	29	-	49	-	69	79	-	-
AAM	10	20	30	-	50	60	70	80	90	-

(上の表6は Avadānaśataka の百章のどの章が、四つの avadānamālā のどの作品において再話されたかを示すもので、岡野(2006)9頁にある表と同じである。表の上部のローマ数字は Avadānaśataka の中の「部類」varga の番号を示す。表中の略号は Avś = Avadānaśataka; KDAM = Kalpadrumāvadānamālā; RAM = Ratnāvadānamālā; SMRAM = Subhāṣitamahāratnāvadānamālā; AAM = Aśokāvadānamālā である。また <> の中にある数字は、表の全体から見た時に、外れた位置にある章を示す。)

見逃せないことは、この四つの作品のうち、(1) Kalpadrumāvadānamālā と (3) Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の二つの作品には Jayamuni が書いた写本が現存していることである。それらの Jayamuni 写本は後の世代に筆写された写本たちにとっての archetype 写本の役割を果たしており、それより古い写本も、それよりも良い写本も見つかっていない。そして Jayamuni が筆写したこの (1) Kalpadrumāvadānamālā と (3) Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の二つの作品を合わせるだけで、Avadānaśataka の百話を再話した章の全体の総数のじつに7割が得られてしまうことに注意すべきである⁽²⁴⁾。(2) Ratnāvadānamālā については Jayamuni の筆写した写本がまだ見つかっていないが、その作品は題名からもわかるように、(3) Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (≡ Ratnāvadānatattva) との内容的連続性が極めて高い作品である。それ故、(3) を筆写した Jayamuni が姉妹文献の (2) Ratnāvadānamālā を筆写してその写本を作らなかった可能性は低いと私は思う⁽²⁵⁾。

このように「Avadānaśataka を再話する文献群」は特に (1) (2) (3) の3作品によって製作プロジェクトの成果の大半が占められていると言ってよいが⁽²⁶⁾、それらは極めて強い

24. この四つの作品において Avadānaśataka の話を再話する章が幾つあるか、その話の数を上記の表6に基づき、数えてみると、(1) Kalpadrumāvadānamālā には全部で23章、(2) Ratnāvadānamālā には全部で19章、(3) Subhāṣitamahāratnāvadānamālā には全部で35章、(4) Aśokāvadānamālā には全部で8章ある。総数85章のうち、Jayamuni が筆写した (1) と (3) の合計は58章であるから、(1) と (3) に含まれる章の総数は、四つの作品全体の約7割近くを占めることになる。

25. 現存する (2) Ratnāvadānamālā の諸写本のもとになった親写本は見つかっていない。その失われた親写本こそが Jayamuni 筆写本なのではないではないかと疑うことが出来よう。

26. この四つの作品の中で (4) の Aśokāvadānamālā はやや異質であり、Avadānaśataka の再話である章を八つしか含まない。それ故、私はその作品は (1) (2) (3) の3作品よりも後の時代に、Avadānaśataka の再話ではない内容の沢山の章をもつ別の作品との合体・再編集を受けた作品かもしれないと考えている。つまり Avadānaśataka の再話である八つの章が最初に製作されたが、その段階ではその作品はまだ Aśokāvadānamālā という名称ではなかったと思われる。その後、作品形成の第2段階において、Aśoka 関連の avadāna の再話した章を含む別の作品集と合体させられて、Aśokāvadāna の再話を作品全体の冒頭に置く現状のような一つの作品となった、ネパールで少なくとも2段階の編集を経て成立した作品ではないかと考えられる。

共通の属性をもった作品群であるので、その全体の製作が恐らく一つのよく統率された製作グループによって遂行されたこと、そしてそれは Jayamuni という説話文献に熱意を抱く人物によって筆写されたことで完成した作品群であったのではないかという可能性を、諸学者は真剣に検討してみなければならないと思う。

Jayamuni が貝葉写本から紙に筆写して作った Avadānaśataka の写本 (CUL, Add. 1611) は、Speyer が集めた写本を調べた限りでは、それ以降に書かれた Avadānaśataka の他の若い紙写本が派生する、オリジナル写本の役割を果たしたようだ。それと同様に、Jayamuni が筆写した「Avadānaśataka の再話文献たる avadānamālā 作品群」の紙写本も、後に作られた他の avadānamālā 写本にとってのオリジナル写本の役割を果たしたと思われる、少なくとも (1) Kalpadrumāvadānamālā と (3) Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の現存する Jayamuni 写本については、そのような archetype 写本の役割を果たしていることが、若い諸写本との関係を調べて推測できる⁽²⁷⁾。

Jayamuni が古い貝葉 (NGMPP E1554/24) から入念に筆写したその Avadānaśataka の 1 本の紙写本 (CUL, Add. 1611) が果たした歴史的な重要性に、特に注目すべきである。Jayamuni がまず後代に書かれた紙写本にとっての archetype 写本の役割を果たしたと思われる重要な 1 本の Avadānaśataka の紙写本を作ったことが、結果的に次のプロセスとして、彼の作った Avadānaśataka の紙写本を利用しながら Avadānaśataka を再話する avadānamālā 文献群が計画性をもって整然と形成されることへと繋がっていったと考えられる。そもそも Jayamuni がその Avadānaśataka の紙写本を古い貝葉写本から丁寧に筆写したわけは、その紙写本を利用しながら Avadānaśataka の再話文献たる avadānamālā 作品群を製作するというねらいがあったのではないかとさえ、私たちは疑うことが出来よう。そしてそのように Jayamuni 筆写本 Avadānaśataka を用いて製作された可能性が高い avadānamālā 文献群において——そのうちの (1) Kalpadrumāvadānamālā と (3) Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の 2 作品については間違いなく——Jayamuni が自ら筆写した紙写本が他の若い諸写本にとってのオリジナル写本の役割を果たす最重要な写本となっている。このように考える時、Avadānaśataka の再話文献群の製作グループの背後には恐らく Jayamuni がいて、彼が各章の再話に重複がおきないように計画的に製作を指揮することによって 17 世紀中頃のある短い期間に一気に Avadānaśataka の再話文献が作ら

27. 同様に Mahajātakamālā の諸写本においても、Jayamuni が筆写して作った紙写本 (B) こそが、他の 5 本の紙写本にとっての archetype 写本になっていることを Hahn (1985) は彼の Mahajātakamālā の研究で確認した。またそれと同じことが、Mahāvastu の若い諸写本と Jayamuni 筆写の紙写本との関係においてもいえる。Jayamuni が様々な仏教説話文献の紙写本を作ると、その筆写の仕事は必ずそれらの文献において他の若い紙写本を生じさせる元本になっている。そのことから Jayamuni が当時有した学術的権威と影響力を知ることが出来る。

れたのではないかと推測することは、決して無理な推測ではないであろう。そしてもし Jayamuni がそのような主導的な役割を「Avadānaśataka を再話した avadānamālā 文献群」において果たした人物ならば、もう一つの重要な avadānamālā 文献群のジャンルであるところの、「インドの梵文の釈尊伝を再話した avadānamālā 文献群」（具体的には Tathāgatajanmāvadānamālā, Saṃbhadrāvadānamālā の2文献）の形成においても、彼が同じような主導的な役割を果たしたのではないかと疑うことができよう。Jayamuni はそのネパール撰述の仏伝 Tathāgatajanmāvadānamālā (= Padyalalitavistara) と Saṃbhadrāvadānamālā の2文献においても、自ら筆写した、後代の諸写本の親写本となるべき正確さをそなえたオリジナル写本を残しているからである。

ちなみに17世紀中葉に「インドの梵文の釈尊伝を再話した avadānamālā 文献群」が作られたという事と、ネパールに現存する梵文仏伝 Lalitavistara の写本の数が17～18世紀頃に爆発的に増えたという事とは、密接な関わりがあると私は思う。その頃の Lalitavistara の紙写本の数の増大はまさに爆発と行ってよい。恐らく17世紀頃にネパールにおいて、釈尊への信仰の復興を伴った一種の「梵文仏伝の復興運動」が生じたと思われる、それに従って、人気が高まった Lalitavistara を含むインドの梵文仏伝文献の紙の写本がその時代以降に沢山作られたのではないかと推測される。17世紀頃の釈尊伝・釈尊信仰の復興運動を先導したのは Patan にある Jayamuni の寺、Mahābuddha ではなかっただろうか。そこは設立時から釈尊信仰と強く結びついた寺である。

さて以上述べてきたように、「Patan の Jayamuni を中心とする仏教知識人たちのグループによって17世紀中葉に最初に大規模な avadānamālā 文献群が作られた」という仮説を私は抱いている。その Jayamuni が指揮した17世紀中葉の製作プロジェクトによって、ネパールにおける前期の avadānamālā 文献群（Avadānaśataka 系と仏伝系の avadānamālā と Mahajātakamālā など）⁽²⁸⁾が成立し、それに触発されて、17世紀後半から18世紀後半にかけて残りの avadānamālā 文献群⁽²⁹⁾も次第に成立してくるのではないかと私は

28. 私は前期（Jayamuni の時代）の avadānamālā 文献群について、以上のように推測して記したが、ただし Svayambhūpurāṇa 系の文献群の成立については、背後にいる Svayambhūnāth 仏塔を信仰する僧侶集団の創作活動として考察する必要があるので、それは Jayamuni が主導する avadānamālā 文献群の制作運動とは別に（それより前に）起こったものとして、別の問題として考察すべきかもしれない。また Divyāvadāna[mālā] という作品は、インドで成立した後もたらされた可能性がある作品なので、その avadānamālā は、ネパール撰述の avadānamālā 文献群とは別に扱う必要がある。

29. ネパールの「前期の avadānamālā 文献群」よりも遅れて成立してきた、「後期の avadānamālā 文献群」として今私が暫定的に思い浮かべているのは、Dvāvīṣṭyavadānakathā, Kapiśāvadāna, Kavītāvadāna, Maṇīśailāvadāna (or Maṇīśailamāhātmya), Vicitrakarṇikāvadāna, Vratāvadānamālā, Sarvajñamitrāvadāna などの文献である。ただしこれらの文献の多くは未研究のままなので、

考える。これらの私見はまだネパール仏教写本文献学の領域の片隅で出て来た仮説にすぎず、現地調査を含めたより広範な文化的研究によって確認された意見ではないので、今後ネパール仏教文化に関心をもつ研究者たちが様々な角度からこの意見を検討してくれることを希望したい。もし私の「Jayamuni 仮説」が完全に証明しきれない意見であるとしても、その批判と検証の作業によって、ネパールの *avadānamālā* 諸文献の形成の謎をめぐる研究が次第に学的に緻密化してゆくであろう。

I-9. Jayamuni という人物の仕事について

最後に、Jayamuni という人物の仕事について私見を述べておきたい。

Jayamuni が行った仕事について私たちが知っていることは限られており、彼が Newar 仏教の復興という志に従って生涯で成し遂げようとした仕事を語ろうとする場合、何に基づいて語るのが確実かといえば、それは何よりも彼が書いた諸写本のリストに基づいて、である。

彼が筆写した写本については、Formigatti (2016a), Tournier (2017), Marciniak (2017c) の研究により13作品が彼の筆写であることが確認（あるいは推測）されたが³⁰⁾、岡野 (2019: 17) はその写本のリストにさらに3作品 (*Subhāṣitamahāratnāvadānamālā*, *Tathāgatajanmāvadānamālā*, *Samḥadrāvadānamālā*) を加えた。

Formigatti らが確認した13作品の写本のリストに私が3作品を加えた、合計16作品の Jayamuni 筆写の写本リストを見ると、先に13作品のリストを眺めていた時にはまだはつきりしていなかったことが16作品のリストになるとはつきりして、自然に一つの仮説に導かれるように思われる。その仮説とは、「Jayamuni が *avadānamālā* 諸文献を筆写したばかりでなく、その製作に深く関わっていたのではないか」という仮説である。私はそれを上の節でも説明したが、その仮説についてももう少し詳しく説明したい。次に挙げるのは岡野 (2019: 17) に示したものと同一、その16作品のリストであるが、それを見よう。(今回は私が後で説明を行う便宜のため、AグループとBグループという仮の区分づけを16写本に対して行っている。)

Jayamuni に筆写された16写本のリスト

(A List of 16 Manuscripts Written by Jayamuni)

[Aグループ:]

本当に後期の文献群に位置づけられるかどうか、今後評価し直されねばならない。

30. Formigatti (2016a: 112-113), Tournier (2017: 385-388), Marciniak (2017c: 123-125) の研究によって Jayamuni の筆写と確認あるいは推測された写本の数を数えると13本ある。

Avadānaśataka (CUL, Add. 1611)
Rāṣṭrapālapariṣcchā (CUL, Add. 1586)
Sumāgadhāvadāna (CUL, Add. 1585)
Divyāvadānamālā (NGMCP A 123/6)
Mahāvastu (NGMCP B 98/14)
Bodhisattvajātakāvanamālā (NGMCP B 98/4)
Ḍṛḍhādhyāśayāvadāna by Gopadatta (NGMCP H 380/7)
Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra (CUL, Add. 1041)
Bodhicaryāvatāra (NGMCP H 380/7)
Dhīmatīpariṣcchāvadāna (NGMCP A 131/14)⁽³¹⁾
[Bグループ:]
Kalpadrumāvadānamālā (NGMCP A 117/13 to A 118/1; A 861/5)
Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (NGMCP B 101/3)
Mahajjātakamālā (NGMCP B 98/15)
Sugatāvadāna (NGMCP H 380/7)
Tathāgatajanmāvadānamālā [= Padya-Lalitavistara] (NGMCP A 123/5)
Saṃbhadrāvadānamālā (東大 Matsunami No. 429)

Jayamuni は17世紀のネパール仏教の「貝葉の時代」から「紙の時代」への本格的な転換期にあたって⁽³²⁾、紙の時代の筆写生たちに以後に用いられるべき信頼できる親写本を作るために、特に彼が関心がある説話文献を中心に、インドからネパールに伝わった仏教古写本の注意深い筆写を行った。インドで滅びつつある仏教の遺産をネパールで忠実に誤りなく受け継いでゆくための使命感が、それらの作品を細心に筆写した Jayamuni の仕事の内的動機であったろう。上記の Aグループのほとんどの写本は、その目的で作られ、その役目を確かに果たしたと考えてよい。

次に、Bグループに属する写本はどれも、インド仏教が産んだ古い作品を写したものではない。これらは Newar 仏教のローカルな性格が強い再話文献であり、Jayamuni が

31. Dhīmatīpariṣcchāvadāna (ただし NGMCP Catalogue のデータでは Śrīmatīpariṣcchāvadāna) は、A と B のどちらのグループに入れるべきか、実際に写本を見てもないと判断が困難であるが、NGMCP によればそれは5葉の写本であって、再話文献たる avadānamālā とは思えないので、一応Aグループに入れた。なお śrī-Dhīmatīpariṣcchāvadāna という写本が Haraprasad Sastri (1915) のネパール写本カタログの III. 190E (p. 160) にもあるが、その写本は9葉から成り、韻文と散文が混じり合った作品である。

32. Formigatti (2016b), p. 64 を参照。

生存した時代にカトゥマンドゥ盆地で成立した可能性が高い、ネパール撰述の作品である。それらBグループの作品を熱心に筆写した Jayamuni の使命感は、インド仏教の遺産を忠実に受け継ぐことだけに満足することなく、中国仏教やチベット仏教の如く、自文化独自の文献をもつこと、自分の故国における仏教の布教活動に役立つ新しい説話文献を確立することにあつたといえるであろう。

このように見る時、Jayamuni のAグループの諸作品の筆写と、Bグループの諸作品の筆写では、同じ筆写であっても、その目的が明確に異なるといえる。

写本Bグループの中に二つある「Avadānaśataka の再話文献」である、Kalpadrumāvadānamālā と Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (≡ Ratnāvadānatattva) は、製作にあたって Avadānaśataka の写本を利用したはずであるが、Jayamuni と接する製作グループの人々が Jayamuni 自身が写した(写本Aグループの中にある) Avadānaśataka の紙写本(CUL, Add. 1611)をその製作の作業にあたって利用することによって作られた作品である可能性が高いと私は考えている。もしそうであるとすると、Jayamuni が筆写した Avadānaśataka 写本(Add. 1611)の筆写年は西暦1645年であることがわかっている³³⁾、「Avadānaśataka の再話文献」である avadānamālā 文献群の成立は必然的に1645年以降であるということになる。また写本Bグループの中にある「インドの仏伝を再話した avadānamālā」である Tathāgatajanmāvadānamālā と Saṃbhadrāvadānamālā も、Jayamuni 自身が写した(Aグループの中にある)仏伝 Mahāvastu の紙写本(NGMCP B 98/14)を利用して生まれた作品である可能性が高いと私は考えている。もしそうであるとすると、Jayamuni 筆写本の Mahāvastu (NGMCP B 98/14)の筆写年代は西暦1657年なので、ネパールにおいて「インドの仏伝を再話した avadānamālā」の諸作品が成立した年代は西暦1657年以降であることになろう。Jayamuni が筆写した写本である Saṃbhadrāvadānamālā の筆写年代は1686年なので、実際にこの推理は合っているように思われる。Tathāgatajanmāvadānamālā の Jayamuni 写本のほうは残念ながら、岡野(2019: 15)に記したように、筆写年代を不明とするしかないが、仏伝としての内容から判断すればその作品が Saṃbhadrāvadānamālā より先に成立したと判断できるので、Tathāgatajanmāvadānamālā の基幹部分(つまり作品前半の Jayamuni 筆写部分)の成立年代は必然的に西暦1657年と1687年の間に置かれることになる。

33. この Avadānaśataka の紙写本 Add. 1611 が Jayamuni の筆写であるという重要な指摘については Formigatti (2016a), pp. 112-114 を参照。この Jayamuni 写本は Speyer (1902-1909) の Avadānaśataka の校訂において B 写本と呼ばれて、彼が見た諸写本の中でオリジナル写本の役割を果たした。出本充代 Demoto (2006) の推測によれば、この Jayamuni 写本は 12~14世紀頃の Avadānaśataka 貝葉写本(NGMPP E-1554/24)から写すことで作られたものらしい。Fiordalis (2019) はその Demoto (2006) の見解の正しさを検証した。

全体的に言えば、Bグループに含まれる Jayamuni の諸作品の筆写は、Jayamuni が Aグループの重要な作品を筆写した後になされた可能性が高い。このように Jayamuni が筆写を行ったBグループの作品は、彼がAグループの筆写で行った仕事を土台にして成立した作品である点に注意して、Jayamuni が生涯に成し遂げた仕事の大きな流れを理解する必要があろう。

Jayamuni が行った Bグループの作品の筆写は、最初の段階のインド仏教の遺産を忠実に受け継ぐための Aグループの筆写という「基礎的」な仕事を承けて、その次の段階として成立した、Newar 仏教文化の独自の発展のために行った「応用的」な仕事、インド仏教の遺産を Newar 社会の仏教教育のために積極的に活用するための仕事であると理解できる⁽³⁴⁾。

Jayamuni の生涯の仕事は、全体的にこのように、第1段階の「土台固め」の仕事から第2段階の「応用」の仕事へと移行したのであろう。もともと Jayamuni はこの第2段階に至ることを目指していたのかも知れないが、そのためには第1段階の仕事から始めることが必要だった。Jayamuni は第1段階の「紙の信頼できる筆写本の作成」の仕事を推し進めて準備をなし、遂に第2段階の仕事として、Avadānaśataka を翻案し再話する仕事 (Subhāṣitamahāratnāvadānamālā と Kalpadrumāvadānamālā) と Newar 仏教独自の梵文の仏伝文献を作る仕事 (Tathāgatajanmāvadānamālā と Saṃbhadrāvadānamālā) との、二つの大きな仕事に取りかかったのであろう⁽³⁵⁾。第2段階における前者の avadāna 関連の仕事が後者の仏伝関連の仕事より先に行われ、後者のその仕事の2番目の作品である Saṃbhadrāvadānamālā が Jayamuni が晩年になした最後の仕事であった。

34. 紙の時代になってネパールで avadānamālā 文献が作られた理由を考えると、それはネパールの僧侶階級や仏教徒の知識人の導入期の教育に用いるためにあったのではないだろうか。梵語の教育を受けつつある僧侶たちやそれに準じる在家信者たちが仏教の本格的なテキストに入って行く前段階に与えるべき教育教材として、彼らを集めて語り聞かせるべき、理解しやすい平易な教育用のテキストを作る必要があったのではないか。それは独り読んで学ぶテキストではなく、ある程度の人数を会堂に集めて耳で聞かせて教育するためのテキストではなかったか。現在ネパールで梵文の avadāna は教育用というより、祭日に唱えるテキストとして儀式的な使われ方をするだけのものであるが、これは Newar 仏教において18世紀後半以降に梵語力が全般的に衰えたために、本来耳で聞いて学びつつ楽しむべき梵文 avadāna テキストが耳で聞いても理解することが不可能になり、その結果、本来の用途である僧侶や知識人の仏教教育に、その梵文テキストを使うことをあきらめ、祭日のような限られた場で儀式的に使うしかない状況になったのではないかと推測される。18世紀以降に梵文 avadāna を Newarī 語に移し替える動きが顕著になってゆくとつれ、梵文 avadāna テキストは社会で教育用に活用される場を失っていったのであろう。

35. 更に Jayamuni が創作を手伝った可能性がある別の仕事として、Mahajjātakamālā がある。

以上のように Jayamuni の生涯の筆写活動の推移を概観するなら、Jayamuni の時代に生成されつつあったBグループの作品に関して、Jayamuni が単に筆写の作業だけを行ったとは考えにくい。彼が熱心に筆写活動した、Bグループの作品群の生成そのものに彼が直接関わって、製作グループの指導を行っていたと考える方が自然であろう。

I における参考文献：

Demoto, M. (2006): "Fragments of the Avadānaśataka", in: Jens Braarvig (Ed.), *Buddhist Manuscripts, Volume III of Manuscripts in the Schøyen Collection*, Oslo, 207-244.

Formigatti, C. (2016a): "Walking the Deckle Edge: Scribe or Author? Jayamuni and the Creation of the Nepalese Avadānamālā Literature", *Buddhist Studies Review*, 2016, pp. 101-140.

Formigatti, C. (2016b): "Towards a Cultural History of Nepal, 14th - 17th century : A Nepalese Renaissance?", *Rivista degli studi orientali*, LXXXIX, supplemento 1, pp. 51-66.

Hahn, M. (1985): *Der grosse Legendenkranz (Mahajjātakamālā). Eine mittelalterliche buddhistische Legendensammlung aus Nepal*. Asiatische Forschungen, Bd. 88, Wiesbaden.

Hahn, M. (2000): "Śaṅkarasvāmin's Devatāvīmarśastuti", in: *Vividharatnakaraṇḍaka*. Hrsg. von Christine Chojnacki, Jens-Uwe Hartmann und Volker M. Tschannerl, *Indica et Tibetica* 37, Swisttal-Odendorf, pp. 313-329.

Library of Tibetan Works and Archives (1981): *The sublime path of the victorious ones. A book of Buddhist liturgies ... compiled by the office of His Holiness the Dalai Lama. Rendered into English at The Translation Bureau of the Library of Tibetan Works and Archives*. Dharamsala, pp. 47-50.

Marciniak, K. (2017c): "A manuscript of Gopadatta's Jātakamālā copied by Jayamuni Vajrācārya", *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology*, XX, pp. 123-128.

Schneider, J. (1993): *Der Lobpreis der Vorzüglichkeit des Buddha. Udbhaṭasiddhasvāmins Viśeṣastava mit Prajñāvarmans Kommentar. Nach dem tibetischen Tanjur herausgegeben und übersetzt*, Indica et Tibetica Verlag, Bonn.

Schneider, J. (2014): *Eine buddhistische Kritik der indischen Götter: Śaṅkarasvāmins Devatāvīmarśastotra mit Prajñāvarmans Kommentar. Nach dem tibetischen Tanjur herausgegeben und übersetzt*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, vol. 81. Vienna: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien Universität Wien.

Schneider, J. (2015): "Eine buddhistische Sicht auf den Buddhāvātāra", *Berliner Indologische Studien*, 22, pp 87-102.

Schneider, J. (2019): "A Buddhist Perspective of the Buddhāvātāra", *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute*, 2015, pp. 77-93.

Shastri, Losang Norbu (1990): *Supra-divine praise of Ācārya Śankaraswami-pāda. Translated and critically edited with annotations in Tibetan*, Pandita series 1, Sarnath, Varanasi.

Speyer, J. S. (1906, 1909): *Avadānaśataka, a century of edifying tales belonging to the Hīnayāna*, Bibliotheca Buddhica No. 3, St.-Pét. 2 vols.

Tournier, V. (2017): *La formation du Mahāvastu et la mise en place des conceptions relatives à la carrière du bodhisattva*, EFEO Monographies No. 195, Paris.

岡野潔 [Okano Kiyoshi] (2006) : 「Subhāṣitamahāratnāvadānamālā について」、『南アジア古典学』1号(2006年7月)、1-19頁。

岡野潔 (2011) : 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (2) — Śakracyavana, Mahendrasena, Pretikā の説話 —」、『南アジア古典学』6号、2011年7月、165-266頁。

岡野潔 (2018) : 「六道頌 (Ṣaḍgatikārikāḥ) の研究 — 梵蔵漢巴 対照テキスト —」、『南アジア古典学』13号、2018年7月、1-164頁。

岡野潔 (2019) : 「Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (8) — Jayamuni, TJAM 第14章 (I), SMRAM 第21章, Kalpalatā 第84章 —」、『南アジア古典学』14号、1-123頁。

II SMRAM 第20章 Mālikāvadāna の作品全体の研究

I で第20章 Mālikāvadāna (略号 MA) の局所的な研究として、梵文 DS と合致する部分 (第148～167詩節) のみの梵文テキストの提示と説明を行った。この II では第20章 MA の作品全体のテキストを扱う。

MA は基本的に Avadānaśataka 第7話 Padmaḥ を種本にして、そのストーリーに大体忠実に (最後の部分を例外として) 再話を行っている。MA と Avadānaśataka で共通しているその話の粗筋を示すと、次のとおりである。

釈尊が舎衛城の祇園精舎に滞在されていた時、或る一人の園丁が1本の新鮮な蓮を手を持って、王宮に向かってシュラーヴァステイーの街を歩いていると、異教徒の在家信者が彼を見て、その蓮を売ってくれないかと頼んだ。しかしその時ちょうど給孤独長者がその場にやって来て、2倍の値で蓮を売るように求める。異教徒はそれを見ると、負けずに言い値を倍にし、その様にしてお互いに値を競り上げていった結果、その1本の蓮の値段が十万金にまで値が上がった。その時園丁は思案し、二人に一体そもそもこの蓮を何に用いるのかと尋ねた。その園丁の問いに、

異教徒はナーラーヤナ（ヴィシュヌ神）に捧げるためと答え、給孤独長者はブッダに捧げるためと答えた。園丁がそのブッダとはどのような者かと尋ねると、給孤独長者は詳しく彼に釈尊の徳性を語って聞かせた。園丁はそれを聞くと、蓮を売のをやめて、自らこの蓮をブッダに捧げたいと申し出た。給孤独長者は悦んで彼を釈尊のもとに連れて行った。

祇園精舎で園丁は仏の偉大な姿を見て感激し、その蓮を仏の頭上に投げると、その蓮は荷車の車輪の大きさになって、仏の頭上で空中に停まった。その奇跡を見て、園丁は釈尊の足下にひれ伏し、「私は将来ブッダになりたい」と誓願の言葉を発した。すると釈尊は微笑して、口から五色の光線を発した。それらの光線は三千大千世界を経巡ってから戻って来て、釈尊の頂髻で消えた。その時アーナンダが釈尊が微笑んだ意味を尋ねると、釈尊は将来この園丁がパドモッタラという名の仏になると語り、園丁に成仏の授記をなした。

ここまでが Avadānaśataka と MA の話の共通部分の粗筋であるが、Avadānaśataka 第7話は園丁の成仏の授記をもってそのまま話を終える。しかし MA はそのようなかたちで話を終えずに、その後続く出来事を新たに話に追加した。それは次のような内容のものである：

園丁が仏教に入信した後、くだんの（蓮を入手できなかった）異教徒の在家信者は、それを聞いて園丁のもとにやって来ると、園丁を激しく非難した。仏を信じる者たちはみな死後に悪趣に墮ちるが、ヒンドゥー教の神々を信じるならば天界に生まれる、と異教徒は説き、園丁に強く仏教への改宗の放棄を勧めた。仏をおとしめるその異教徒の言葉を聞いて、園丁は黙っていられず、仏の徳性の偉大さについて、異教徒に反論し、雄弁をふるう（この箇所は梵文 DS のテキストが入る）。

園丁が仏教に改宗したと知って激怒した異教徒がやってきて園丁の信仰を批判したため、園丁が仏教とヒンドゥー教の優劣をめぐって異教徒に説法するという出来事が、このようにオリジナルな（Avadānaśataka の元の話には対応箇所がない）展開として、新たに追加されている。その、園丁による説法の主要部分をなしているのが、DS からの20の借用詩節なのである。その DS からの連続的な詩節の借用の後に、MA は釈尊への信仰表明としての17のオリジナルな詩節を加えて、園丁による異教徒への説法を形作っている。その園丁の説法を聞くと、異教徒はただちにヒンドゥー教の神への信仰を捨て、仏弟子になり、仏を信奉した——このようなかたちで MA は話を終える。

MA は、一本の蓮の花をもっていたことをきっかけに給孤独長者の導きで園丁が仏教に入信して将来ブッダになる授記を得たという、Avadānaśataka に基づく話をした後に、その入信した園丁が今度は異教徒に対してヒンドゥー教よりも仏教のほうが勝れて

いることを説くという新しい展開を作り、全く異質な DS のテキストを入れることに成功している。

以下、II-1 で、MA の梵文テキストを示し、II-2 で和訳を示し、II-3 で Avadānaśataka の原話、第7話『蓮』（Padmaḥ）との比較を行いたい。

II-1. SMRAM 第20章 Mālikāvadāna の梵文テキスト

略号

Avś = Avadānaśataka

DS = Devāṭīśayastotra / Devatāvīmarśastuti

Ed. = Ratnamālāvadāna by K. TAKAHATA (1954)

SMRAM = Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (NGMCP B101/3)

MA = Mālikāvadāna (the 20th chapter of SMRAM)

Ms. = Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (NGMCP B101/3)

N = Ratnāvadānatattva (NGMCP E1343/4; = NGMCP D47/2)

S20 = the 20th chapter of SMRAM, i.e. Mālikāvadāna

以下に SMRAM 第20章『園丁アヴァダーナ』の校定梵文テキストを挙げる。

20 Mālikāvadāna

Ed. pp. 313-322

Ms. 152b3-161a1

N 208a7-216b1

[152b3] athāśoko mahīnāthaḥ kṛtāñjalipuṭo mudā / upaguptaṃ tam arhantaṃ praṇatvā prārthayat punaḥ // 1	[= Ed. 1]
bhadanta śrotum icchāmi punar anyat subhāṣitam / tad yathā guruṇādiṣṭaṃ tathādeṣṭuṃ ca me 'rhati // 2	[= Ed. 2]
iti tena narendraṇa prārthite sa yatīśvaraḥ / upagupto narendraṃ taṃ samālokyaiṃvā ādiśat // 3	[= Ed. 3]
śṛṇu sādhu mahārāja yathā me guruṇoditam / tathāhaṃ tat pravakṣyāmi tava puṇyavivṛddhaye // 4	[= Ed. 4]
tadyathā bhagavān buddhaḥ śākyasiṃho jagadguruḥ / sarvajñaḥ sugataḥ śāstā dharmarājo munīśvaraḥ // 5	[= Ed. 5]
ekasmin samaye tatra śrāvastyā upakaṇṭhike / jetāraṇye mahodyāne vihāre śrāvakaiḥ saha // 6	[= Ed. 6]

bhikṣubhiś cailakaiś cāpi bhikṣuṅbhir upāsakaiḥ / upāsikābhir anyaiś ca bodhisattvagaṇair api // 7	[= Ed. 7]
sarvasattvahitārthena bodhicaryāṃ prakāśayan / saddharmaṃ samupādiśya vijahāra prabhāsayan // 8	[= Ed. 8]
tat saddha[153a]rmāmṛtaṃ pātuṃ sarve lokāḥ samāgatāḥ / śakrādayo 'pi devendrā brahmādilokapālakāḥ // 9	[= Ed. 9]
daityendrā garuḍā nāgā yakṣagandharvakinnarāḥ / siddhā vidyādharās cāpi rākṣasās ca maharddhikāḥ // 10	[= Ed. 10]
ṛṣayo brāhmaṇās cāpi kṣatriyās ca narādhipāḥ / vaiśyā rājakumārās ca mantriṇo 'mātyakā janāḥ // 11	[= Ed. 11]
gṛhasthāḥ sārthavāhās ca vaṇijāḥ śilpino 'pi ca / paurā jānapadā grāmyā anye kārpatikā api // 12	[= Ed. 12]
sarve te samupāgatya tatra taṃ śrīghanaṃ munim / dṛṣtvā pradakṣiṅkṛtya praṇatvā samupācaran // 13	[= Ed. 13]
yathākramaṃ samabhyarcya natvā sāñjalayo mudā / parivṛtya puraskṛtya sarve te samupāśrayan // 14	[= Ed. 14]
tān sarvān samupāsīnān dṛṣtvā sa bhagavān muniḥ / āryasatyaṃ samārabhya dideśa dharmam uttamam // 15	[= Ed. 15]
taddharmaṃ samupākarṇya sarve te saṃprabodhitāḥ / dharmavaiśeṣam ājñāya babhūvur bodhivāñchinaḥ // 16	[= Ed. 16]
tadā tatra pure rājā prasenajit sakauśalaḥ / yadā na sugatas tatra tadā tīrthikabhāg abhūt // 17	[= Ed. 17]
yadā tu sugatas tatra sasāṃghikāḥ samāgataḥ / tadā sa nṛpatir nityaṃ śrīghanaṃ taṃ sadābhajat // 18	[= Ed. 18]
tasmimś ca samaye tatra kaścid ārāmiko vanāt / navāṃ padmaṃ samādāya rājñe dātuṃ pure 'viśat // 19	[= Ed. 19]
tatraikapathi taṃ dṛṣtvā tīrthikopāsiko mudā / sahasā tasya puro gatvā prārthayat taṃ saroruham // 20	[= Ed. 20]
bho mālīnī idam padmaṃ yadi vikre[153b]tum icchasi / ucitaṃ mūlyam ādāya mahyaṃ dātuṃ tvam arhasi // 21	[= Ed. 21]
iti tenārthitaṃ śrutvā mālīkāḥ lubhitāśayaḥ / yadīcchati bhavān dadyāmi iti taṃ dātuṃ aicchata // 22	[= Ed. 22]
tasmīn eva kṣaṇe tatra gṛhastho 'nāthapiṇḍadaḥ / puṣpārthī samupāyāto mālīkaṃ tam aprcchata // 23	[= Ed. 22]
bho mālīnī idam padmaṃ yadi vikretum icchasi /	

dviguṇaṃ mūlyam ādāya bhavān me dātum arhati // 24	[= Ed. 23]
iti tenoditaṃ śrutvā tīrthikopāsako 'pi saḥ /	
taddviguṇena mūlyena tad padmaṃ samayācata // 25	[= Ed. 24]
iti tenārthitaṃ śrutvā sa cāpy anāthapiṇḍadaḥ /	
taddvaiguṇyena mūlyena kamalaṃ tam ayācata // 26	[= Ed. 25]
tac chrutvā tairthikaḥ so 'pi madadarpābhimānitaḥ /	
tatriguṇena mūlyena grahītuṃ taṃ samaicchata // 27	[= Ed. 26]
tad dṛṣṭvā sa gṛhastheṣo 'nāthapiṇḍada utsahī /	
caturguṇena mūlyena padmaṃ taṃ cābhyayācata // 28	[= Ed. 27]
evaṃ tau gṛhapatī sādhu yāvac chatasahasrakaiḥ /	
mūlyais taṃ padmam ādātuṃ māliṇaṃ taṃ yayācatuḥ // 29	[= Ed. 28]
tad dṛṣṭvārāmikaḥ so 'pi pravardhayan parasparam /	
tayor dvayor adattvaiva manasaivaṃ vyacintayat // 30	[= Ed. 29]
ayaṃ gṛhapatiśreṣṭho hy anāthapiṇḍadaḥ sudhīḥ /	
acapalo mahādhirāḥ sthiraśattvo vicakṣaṇaḥ // 31	[= Ed. 30]
kasyārthe nv idaṃ padmam iyanmūlyena yācate /	
nūnam atra mahaddhetur bhaviṣyati na saṃśayaḥ /	
tad etat pariṛcchyai[154a]va dāsyāmi sadguṇārthine // 32	[= Ed. 31,32]
iti dhyātvā svacittena sa ārāmika utsukaḥ //	
tairthikaṃ taṃ samālokya papracchaitvaṃ samādarāt // 33	[= Ed. 33]
bho puruṣa bhavān kasya kāryasyārtha idaṃ kajam /	
iyānmūlyena vikretum icchati tad vadasva me // 34	[= Ed. 34]
iti tenoditaṃ śrutvā sa tairthikaḥ pramoditaḥ /	
ārāmikaṃ tam ālokya prabodhayitum abravīt // 35	[= Ed. 35]
yaḥ śrīpatir jagadbhartā nārāyaṇo janārdanaḥ /	
tasya pūjāṃ kariṣyāmi tad idaṃ dehi me 'mbujam // 36	[= Ed. 36]
iti tenoditaṃ śrutvārāmiko so 'nubodhitaḥ /	
anāthapiṇḍadaṃ taṃ ca dṛṣṭvā kāryam aṛcchata // 37	[= Ed. 37]
bho sādhu bhavāṃś cāpi kim artham idam ambujam /	
bahumūlyaiḥ samāhartum icchati tad vadasva me // 38	[= Ed. 38]
iti tad vacanaṃ śrutvā so 'nāthapiṇḍadaḥ sudhīḥ /	
ārāmikaṃ tam ālokya prabodhayitum abravīt // 39	[= Ed. 39]
sādhu sādhu mahābhāga yad idaṃ te saroruham /	
bahumūlyena vāñchāmi tad arthaṃ kathyate śṛṇu // 40	[= Ed. 40]
yo 'tra śauddhodanī rājā cakravartī nṛpādhipaḥ /	

sarvasattvahitārthena saṃbodhisādhanodyataḥ // 41	[= Ed. 41]
sarvatra bhuvane loke kleśākulāsamāhite /	
bodhicaryāvihīne 'tra mleccha*dharme pravartite // 42	[= Ed. 42]
bodhicaryāṃ svayaṃ dhṛtvā prakāśayitum udyataḥ /	
sarvarājyaṃ parityajya sarvāṃś cāpi parigrahān // 43	[= Ed. 43]
vairāgyadharmam āśritya saṃsārabhoganiḥspṛhaḥ /	
gayāśīrṣe nage gatvā kṛtvā tapaḥ suduḥkaram // 44	[= Ed. 44]
tato loke [154b] hitaṃ kartuṃ samutthāya samāhitaḥ /	
bodhivṛkṣatalāsīnas tasthau dhyānasamāhitaḥ // 45	[= Ed. 45]
tatra māragaṇān sarvāñ jītvā kleśagaṇān api /	
saṃbodhijñānam āsādy buddho bhavati sāmpratam // 46	[= Ed. 46]
so 'yaṃ buddho jagacchāstā jagannātho jagadguruḥ /	
jagadbhartā jagatṛāyī dharmarājā munīśvaraḥ // 47	[= Ed. 47]
sarvajñaḥ sugataḥ śrīmān ṣaḍabhijño vināyakaḥ /	
satyavādī mahādhīraḥ satyadharmaśubhārthabhṛt // 48	[= Ed. 48]
samantabhadrarūpāṃśaḥ saumyarūpo jitendriyaḥ /	
dvātriṃśallakṣaṇāśtīvyañjanapratimaṇḍitaḥ // 49	[= Ed. 49]
bhagavāñ chrīghano brahmavihāriko guṇākaraḥ /	
sarvatraidhātukādhīśaḥ sarvaduṣṭaprasāntakṛt // 50	[= Ed. 50]
sarvamāravijetārhan saṃbodhimārgadeśakaḥ /	
vāñchitārthaprado dātā cintāmaṇiguṇādhikaḥ // 51	[= Ed. 51]
śuddhaśīlaḥ śubhācāraḥ kṣāntivratadharaḥ sudhīḥ /	
sarvasattvahitodyogī niḥkleśaḥ sarvajit kṛtī // 52	[= Ed. 52]
samādhidhyānasamraktaḥ saṃbodhidharmabhāskaraḥ /	
prajñānidhir mahāvijñaḥ sarvavidyāviśāradaḥ // 53	[= Ed. 53]
sarvopāyavidhānajñaḥ prañidhipāratāraḥ /	
trailokavijayī vīraḥ saṃbodhikāryapūraḥ // 54	[= Ed. 54]
vijñānormisamādhistaḥ saṃbodhijñānaratnabhṛt /	
sarvasattvaśubhaṃkārī sarvākārasvarūpikaḥ // 55	[= Ed. 55]
śākyamunir mahābuddho jineśvaras tathāgataḥ /	
sarvasattvahitārthena sarvatra samupācāran // 56	[= Ed. 56]
bhāsayan sakalān lokān bhadrāṃ kṛtvā samantataḥ [155a] /	
ihāpi sarvasattvānāṃ bhadrāṃ kartuṃ samāgataḥ // 57	[= Ed. 57]
sāmpratam jetakārame vihāre saha sāmghikaḥ /	
saddharmam ādiśan nityaṃ viharati prabhāsayan // 58	[= Ed. 58]

tasya pūjām ahaṃ kartum icchāmi sāmpratam khalu / tadarthe bahumūlyena yācāmīdaṃ saroruham // 59	[= Ed. 59]
tad bhavān mūlyam ādāya dehi ma idam ambujam / yathābhilaṣitam dravyam dāsyāmi te pramaṇayan // 60	[= Ed. 60]
śraddhayedam pradattam cet tvayāham saṃpramoditaḥ / etatpuṇyavipākena bodhicittam avāpsyasi // 61	[= Ed. 61]
sarvadā sadgatim yāyād durgatim na kadācana / kramād bodhicarīḥ pūrya saṃbodhim api prāpnuyāḥ // 62	[= Ed. 62]
evam matvā bhavān sādho yadi saṃbodhim icchati / yathābhilaṣitam dravyam ādāyedaṃ pradehi me // 63	[= Ed. 63]
iti tenārthitam śrutvā sa mālīkaḥ pramoditaḥ / taṃ grhastham anāthānām bhartāram evam abravīt // 64	[= Ed. 64]
aho buddho mahābhijño dṛṣyate na kadācana / īdṛg mahad guṇam cāpi śrūyate na kvacin mayā // 65	[= Ed. 65]
tad ahaṃ taṃ jagannātham draṣṭum icchāmi sāmpratam / tatsaddharmāmṛtam pātum vāñchā me jāyate khalu // 66	[= Ed. 66]
tasmāt tatra svayaṃ gatvā saṃbuddham taṃ munīśvaram / anena puṇḍarīkena pūjayiṣye 'ham ādarāt // 67	[= Ed. 67]
tad bhavān kṛpayā sādho saṃbuddhasya jagadguroḥ / nītvā mām āśrame tatra saddharme yoktum arhati // 68	[= Ed. 68]
iti tenārthitam śrutvā so 'nāthapiṇḍado mudā / mālīkaṃ taṃ samālokyā punar evam abhāṣata // 69	[= Ed. 67]
sādhu sādhu mahābhāga ku[155b]ruṣvaivaṃ yadīcchasi / prāgaccha tvam mayā sārddham pūjaya taṃ munīśvaram // 70	[= Ed. 68]
ity uktvā mālīkaṃ taṃ sa grhapatih prasādayan / ādāya jetakārāme vihāre samupācarat // 71	[= Ed. 69]
tatra tena sahopetya so 'nāthapiṇḍado grhī / sāñjalis taṃ jagannātham natvaikānte samāśrayat // 72	[= Ed. 70]
tataḥ sa mālīko 'drākṣīc chrīghanam taṃ munīśvaram / sabhāmadhyāsanāsīnam bhikṣusaṃghapuraskṛtam // 73	[= Ed. 71]
dvātriṃśallakṣaṇāśītivyañjanapratimaṇḍitam / ratnarāśim ivojjvālam vyāmaprabhābhyalamkṛtam // 74	[= Ed. 72]
samantabhadrarūpāṃśam saumyarūpaṃ śubhendriyam / dṛṣtvā sa mudito natvā kṛtvā tridhā pradakṣiṇam // 75	[= Ed. 73]
tat padmaṃ purataḥ kṣiptvā kṛtāñjalipuṭo mudā /	

natvā pādaḥ munēḥ tasya tatraikānte samāśrayat // 76	[= Ed. 74]
kṣiptamātraṃ ca tat padmaṃ sahasākāśasaṃsaran / chattribhūtvā muner mūrdhna uparisthaṃ vyarājata // 77	[= Ed. 75]
tad dṛṣṭvā te sabhālokāḥ sarve 'tivismayānvitāḥ / aho buddhasya māhātmyam iti proktvā prasedire // 78	[= Ed. 76]
tad dṛṣṭvā mālikāḥ so 'tivismayānanditāśayaḥ / utthāya sahasā śāstuh pādayor nyapatan nataḥ // 79	[= Ed. 77]
tathā sa sñjalir natvā pādābjayor jagadguroḥ / saṃbuddhapadalābhāya praṇidhānaṃ vyadhād dhṛdā // 80	[= Ed. 78]
etatpuṇyavipākena loke 'ndhe 'parināyake / kleśākule vinaṣṭe 'haṃ bhūyāsaṃ sugato jinaḥ // 81	[= Ed. 79]
svayaṃ tartum aśaktānāṃ tārāyitā bhavodadhim / tathā kleśābdhimagnānāṃ samuddhartābhimocakaḥ // 82	[= Ed. 80]
[156a] dharme 'nāśvasitānāṃ ca sadāśvāsāyitāpi vai / adṛṣṭabodhimārgānāṃ darśāyitā bhaveya hi // 83	[= Ed. 81]
iti tena kṛtaṃ matvā praṇidhānaṃ sa sarvavit / bhagavān muditaḥ prāviraḥ kārṣṭiḥ susmitaṃ tadā // 84	[= Ed. 82]
tatra smite munīndrasya mukhapadmād vinirgatāḥ / suraśmayaḥ pañcavarṇāḥ prasasrus trijagatsv api // 85	[= Ed. 83]
yā adhastād gatābhāsaḥ tā sarvanarakeṣv api / avabhāsyā śubhaṃ kṛtvā pracakrur duḥkhanāśanaṃ // 86	[= Ed. 84]
tatprabhābhiḥ parisprṣṭāḥ sarve te narakāśritāḥ / duḥkhamuktā sukhāsprṣṭā vismitā evaṃ abruvan // 87	[= Ed. 85]
aho kiṃ nu mahāsaṅkhyā asmākaṃ jāyate 'dhunā / itaś cyutāḥ kuhānyatra samutpannā vyaṃ nu kim // 88	[= Ed. 86]
iti cintāparītānāṃ teṣāṃ cittaprabodhane / bhagavān nirmitaṃ buddhaṃ praīṣayat prati nairayam // 89	[= Ed. 87]
tad dṛṣṭvā narakasthāḥ te sarve 'tivismayānvitāḥ / parasparaṃ samālokya punar evaṃ babhāṣire // 90	[= Ed. 88]
bhavanto no itaś cyutvā nānyatra saṃgatā vyaṃ / ihaiva narakasthāḥ smaḥ kutrāpi calitā na hi // 91	[= Ed. 89]
kiṃ tv ayaṃ samupāyāto hy apūrvadarśanaḥ pumān / nūnam asyānubhāvena jāyate śubhatā 'dhunā // 92	[= Ed. 90]
nūnam ayaṃ mahāsattvo dṛṣṭvāsmān duḥkhapīḍitān / kṛpayā sarvathoddhartuṃ narake 'tra samāgataḥ // 93	[= Ed. 91]

tad asya samupāśritya prakṛtvā śaraṇaṃ sadā /	
praṇatvā śraddhayā nityaṃ bhajemahi samādarāt // 94	[= Ed. 92]
iti saṃbhāṣya te sarve nārakīyāḥ prabodhitāḥ /	
taṃ buddhaṃ śaraṇaṃ gatvā praṇatvā prā[156b]bhajan mudā // 95	[= Ed. 93]
tadbhajanodbhavaṃ puṇyair sarve te narakāsthitaḥ /	
sahasā sadgatiṃ yātā babhūvur dharmabhājanāḥ // 96	[= Ed. 94]
evaṃ tā raśmayaḥ sarvāḥ sarvāṃs tān narakāśritān /	
samuddhṛtya punas tatra jagacchāstur upāyayuh // 97	[= Ed. 95]
yā vāpy ūrdhvaṃ gatā bhāsas *te 'vabhāsyā diśo 'ṣṭa ca /	
yāvad bhavāgraparyantam avabhāsyābhiprāsaran // 98	[= Ed. 96]
gāthābhiś ca surān sarvān divyakāyasukhāratān /	
samantato mahacchabdair uccair evam acodayan // 99	[= Ed. 97]
anityaṃ sarvasaṃsāraṃ duḥkhaṃ sūnyam anātmakam /	
iti matvā śubhe dharme sarvadā caratādarāt // 100	[= Ed. 98]
niṣkrāmatārabhadhvaṃ tad yujyadhvaṃ buddhaśāsane /	
triratnaśaraṇaṃ kṛtvā bhajadhvaṃ sarvadādarāt // 101	[= Ed. 99]
yo hy asmiṃ saugate dharme cariṣyati samāhitaḥ /	
sa hitvā janma saṃsāre duḥkhasyāntaṃ kariṣyati // 102	[= Ed. 100]
etac chabdaṃ samākaraṇya sarve devāḥ prabodhitāḥ /	
triratnaśaraṇaṃ kṛtvā prabhejire samāhitaḥ // 103	[= Ed. 1]
evaṃ tā raśmayaḥ pañca sarvāṃl lokān surān api /	
triratnaśaraṇe sthāpya punar muner upāyayuh // 104	[= Ed. 2]
tatra tā raśmayaḥ sarvā ekībhūtāś ca piṇḍitāḥ /	
jinam pradakṣiṇīkṛtya taduṣṇīṣe 'viśat punaḥ // 105	[= Ed. 3]
tad dṛṣtvā te sabhālokāḥ sarve 'tivismayāhatāḥ /	
kim ādiśen munīndro 'yam iti dhyātvā niṣedire // 106	[= Ed. 4]
athāyusmān sa ānando matvā teṣāṃ vitarkitam /	
utthāya sāñjalir natvā bhagavantaṃ tam abravīt // 107	[= Ed. 5]
bhagavan bhavatā kena hetunā sṛjyate smitam [157a] /	
nāhetu sugatāḥ sarve vihasanti kadā cana // 108	[= Ed. 6]
yadarthe hetunā smitaṃ bhavān muñcati sāmpratam /	
tadartaṃ śrotum icchanti sarve lokā ime khalu // 109	[= Ed. 7]
yadarthena bhavān smitaṃ prakaroti jagadguro /	
tadartaṃ samupādiśya sarvāṃl lokān prabodhaya // 110	[= Ed. 8]
ity ānandoditaṃ śrutvā bhagavān sa munīśvaraḥ /	

sarvān lokān samālokya tam ānandaṃ cābravīt // 111	[= Ed. 9]
evam etat *sadānanda nāhetupratyayaṃ kvacit /	
sarve buddhāḥ pramuñcanti smitaṃ kiṃcit kadācana // 112	[= Ed. 10]
paśya tvam yad ayaṃ sādhu āramikaḥ prasāditaḥ /	
mamaivam śraddhayā pūjāṃ karoti śuddhayā mudā // 113	[= Ed. 11]
etatpuṇyavipākena mālika 'yaṃ subuddhimān /	
bodhicittaṃ samāsādyā bodhicaryāṃ caran kramāt // 114	[= Ed. 12]
sarvāḥ pāramitāḥ pūrya sarvān mārān vinirjayan /	
samyaksambodhim āsādyā niḥkleśo 'rhan munīśvaraḥ // 115	[= Ed. 13]
daśabalo jagannāthaḥ sarvasattvāhitārthabhṛt /	
padmottamo 'bhido buddhas tathāgato bhaviṣyati // 116	[= Ed. 14]
yad ayaṃ mama saddharmasādhane 'bhiprasāditaḥ /	
sambodhipraṇidhiṃ dhṛtvā karoti śraddhayārcanām // 117	[= Ed. 15]
evaṃ ye śraddhayā nityaṃ triratnaṃ śaraṇaṃ gatāḥ /	
bhajanti te janāḥ sarve bhavyeḥ sugatātmajāḥ // 118	[= Ed. 16]
tatas te sarvasattvānām hitārtheṣu samudyatāḥ /	
bodhisattvā mahāsattvā bhaviṣyanti guṇākaraḥ // 119	[= Ed. 17]
tataḥ pāramitāḥ sarvāḥ paripūrya yathākramam /	
tataḥ sambodhim āsādyā bhavyeḥ [157b] sugatā api // 120	[= Ed. 18]
evaṃ matvātra saṃsāre sambodhijñānavāñchibhiḥ /	
triratnabhajanaṃ kṛtvā caritavyaṃ sadā śubhe // 121	[= Ed. 19]
ity ādiṣṭaṃ munīndreṇa śrutvānandādayo 'pi te /	
bhikṣavaḥ saṃghikāḥ sarve prābhyanandan prabodhitāḥ // 122	[= Ed. 20]
sarve lokāś ca te sarve śrutvaivaṃ śrīghanoditam /	
triratnaśaraṇaṃ kṛtvā prabhejire 'numoditāḥ // 123	[= Ed. 21]
evaṃ sāstrā munīndreṇa vyākṛtaṃ svayam ātmanaḥ /	
śrutvā sa mālikaś cāpi prābhyanandat pramoditaḥ // 124	[= Ed. 22]
tadārabhya sadā nityaṃ mālikaḥ so 'numoditaḥ /	
triratnabhajanaṃ kṛtvā prācarad bodhicārikām // 125	[= Ed. 23]
tataḥ so 'nāthapiṇḍo 'pi tena saha pramoditaḥ /	
sāñjalis taṃ jagannāthaṃ natvā svanilayaṃ yayau // 126	[= Ed. 24]
tatra sa mālika gehe bhāryayā saha moditaḥ /	
triratnaśaraṇaṃ kṛtvā prācarat sarvadā śubham // 127	[= Ed. 25]
tatas taṃ saugate dharme 'nucarantaṃ niśamya saḥ /	
tīrthikopāsiko ruṣṭa upetya paryabhāṣata // 128	[= Ed. 26]

are re durmate pāpin kim evaṃ carase 'śubhe /	
sarvathā tvam paribhraṣṭo narake duḥkham āpsyasi // 129	[= Ed. 27]
yad apātre durācāre mithyādharmaḥhibhāṣiṇi /	
upetya bhajanaṃ kṛtvā cinoṣi kilviṣaṃ mahat // 130	[= Ed. 28]
bhajanti ye narā buddhaṃ na te gacchanti sadgatim /	
durgatim eva te yātās *caranta *aśubhe sadā // 131	[= Ed. 29]
kadā cid api tadgehe bhadrāṃ na jāyate kvacit /	
lakṣmīś cāpi vasen naiva yato dharmo vinaśyate // 132	[= Ed. 30]
kiṃ cin nāsti śubhācāraṃ tasya [158a] bhikṣāśino yateḥ /	
kim evaṃ śraddhayā nityaṃ bhajase sadguror iva // 133	[= Ed. 31]
kṛpaṇo yaḥ svayaṃ bhraṣṭaḥ parāṃś ca bhraṃśayed iha /	
adharmam api saddharmam ity ākhyāyābhivañcate // 134	[= Ed. 32]
sa kiṃ śāstā sudhīr vijño dharmarājo munīśvaraḥ /	
sadbhir na pūjanīyo 'sau nindanīyo hi durmatih // 135	[= Ed. 33]
iti satyaṃ mayākhyātaṃ hitārthaṃ te śubhārthinaḥ /	
yadi dharme 'sti te vāñchā śrutvāsmadvacanaṃ cara // 136	[= Ed. 34]
tadbuddhasaṃgatim tyaktvā tīrthe snātvā samāhitaḥ /	
brahmāṇaṃ viṣṇuṃ īśānaṃ bhaja nityaṃ yathāvidhim // 137	[= Ed. 35]
brahmāṇaṃ ye bhajanty atra sarve te brahmacāriṇaḥ /	
pariśuddhāśayā bhadrā saṃprayānti surālayam // 138	[= Ed. 31]
ye bhajanti sadā viṣṇuṃ na te gacchanti durgatim /	
sadgatim sarvadā yātā bhavanti manujādhipāḥ // 139	[= Ed. 32]
ye bhajanti mahārudraṃ na te gacchanti nārake /	
sarvasaukhyāni saṃbhuktvā yānti cānte śivālayam // 140	[= Ed. 33]
evaṃ matvātra saṃsāre yadi saukhyaṃ sādēcchasi /	
tad etāṃs trijagannāthān bhaja nityaṃ prapūjayan // 141	[= Ed. 34]
etan me vacanaṃ śrutvā bhaja tān sadgurūn yatīn /	
teṣāṃ saddharmam ākarṇya cara nityaṃ śubhe vrata // 142	[= Ed. 35]
tathā te maṅgalaṃ nityaṃ sarvadātra bhaved dhruvam /	
ante pāpavinirmuktāḥ prayānti tridaśālayam // 143	[= Ed. 36]
iti tenoditaṃ śrutvā mālikaḥ sa viroṣitaḥ /	
tairthikaṃ taṃ samārabhya paribhāṣyaivam abravīt // 144	[= Ed. 37]
ā kim evaṃ vadasy atra mā maivaṃ vadathāḥ punaḥ /	
tvam eva naraḥ yāyā nindase yan munīśvaram // 145	[= Ed. 38]
śṛṇv atrāhaṃ pravakṣyāmi saṃbuddhe guṇa[158b]m alpakaṃ /	

vistareṇa katham̐ vaktum̐ śakyate 'lpadhiyā mayā // 146	[= Ed. 39]
tathāpi kathyate 'lpatvāt tavābhibodhane mayā /	
śrutvā tvayā vicāryaiva sad asac ca parīkṣyatām // 147	[= Ed. 40]
saṃbuddha eva bhagavān suguṇī na viṣṇuḥ	
saṃśasyate na ca haro na hiraṇyagarbhaḥ /	
teṣāṃ tu bhadracaritātīśayaprabhāvāñ	
chrutvā *vicārayati ko guṇavān na veti // 148	≈ DS 1 [= Ed. 41]
viṣṇuḥ samudyatagado vighrṇaiḥ pramāyī	
rudro vibhūtyajakapāladharaḥ pramattaḥ /	
ekāntaśāntacaritā<ti>śayas tu buddhaḥ	
kaṃ pūjayemahi suśāntam aśāntarūpam // 149	≈ DS 2 [= Ed. 36]
duryodhanādīnṛpanāśakaraḥ sa cakrī	
<*viṣṇur> haras tripura*nāśakaraḥ pinākī /	
krauñcaṃ guho 'pi dṛḍhaśaktihataṃ cakāra	
buddhas tu kevalam *ayam jagatām hitaiṣī // 150	≈ DS 3 [= Ed. 67]
pīḍyo mamāyam ayam eva tu rakṣaṇīyo	
vadhyo 'yam ity api surottamanītir eṣā /	
niḥśreyasābhyudayasaukhyahitaika*buddher	
buddhasya naiva ripavo na hi *vāñchanīyāḥ // 151	≈ DS 4 [= Ed. 68]
rāgādidoṣajanitāni vacāṃsi viṣṇor	
unmattaceṣṭitakarāṇi ca yāni śambhoḥ /	
niḥśeṣadoṣaśamakāni tathāgatasya	
vandyatvam arhati ca ko 'tra vicārayadhvam // 152	≈ DS 5 [= Ed. 69]
yaś codyataḥ paravadhāya ghrṇāṃ vihāya	
trāṇāya yaś ca jagataḥ kṛpayā pravṛttaḥ /	
rāgī ca yo bhavati yaś ca vimuktarāgaḥ	
pūjyas tayoh ka iha taṃ vadatānucintya // 153	≈ DS 6 [= Ed. 70]
śakraṃ vajradharaṃ balaṃ haladharaṃ kṛṣṇaṃ ca cakrāyudham	
skandaṃ śaktidharaṃ śmaśānanilayaṃ rudraṃ triśūlāyudham /	
etān duḥkhabhayānkitān gataghrṇān bālān vicitrāyudhān	≈ DS 7
nityaṃ prānivadhodyutapraharaṇān kas tān namasyed budhaḥ // 154 [= Ed. 71]	
na yaḥ sūlaṃ dhatte na ca suratim anke suvadanām	
na cakraṃ śaktim vā na ca kuliśam ugraṃ na ca halaṃ /	
vinirmuktaṃ kleśaiḥ parahitavidhānodyatadhiyaṃ	
śaraṇyaṃ lokānāṃ tam ṛṣim upayāto 'smi śaraṇam // 155	≈ DS 8 [= Ed. 72]

rudro rāgavaśāt striyaṃ vahati yo *himsro hriyā varjitā
 viṣṇuḥ krūratarah kṛtaghnacaritaḥ skandhaḥ svayaṃ jñātihā /
 krūrāsya mahiṣāntakṛn naravaśāmāmsāsīnī pārvatī
 pānepsī ca vināyako daśabalo srasto 'py adoṣaḥ suhṛt // 156 ≈ DS 9 [= Ed. 73]
 bandhur na *me sa bhagavān na ripur na cānyaḥ
 śāstā trilokagurur ekatamo 'pi dhīraḥ /
 śrutvā vacaḥsucaritātīśayaprabhāvaṃ
 buddhaṃ guṇātīśayalobhatayāśritāḥ smaḥ // 157 ≈ DS 10 [= Ed. 74]
 nāsmākaṃ sugataḥ pitā na ripavas tīrthyā dhanam naiva no
 dattaṃ tena tathāgatena <*na> hṛtaṃ kiṃ cit kaṇādādibhiḥ /
 kiṃ tv ekāntajagaddhitaḥ sa bhagavān buddho yataś cāmalaṃ
 vākyam sarvamalāpahāri ca yatas tad bhaktivanto vayam // 158 ≈ DS 11 [= Ed. 75]
 hitaiṣī yo nityaṃ satatam upakārī ca jagataḥ
 kṛtaṃ yena svāsthyaṃ bahavidharujārtasya jagataḥ /
 gūḍhaṃ yaś ca jñeyaṃ karatalam ivāvaiti sakalaṃ
 prapadyadhvaṃ santas tam ṛṣim *asamaṃ bhaktimanasaḥ // 159 ≈ DS 12 [= Ed. 76]
 [159b] asarvabhāvena yadrchayā vā
 parānuvṛtyā vicikitsayā vā /
 ye taṃ namasyanti munīndracandraṃ
 te 'py āmarīṃ sampadam āpnuvanti // 160 ≈ DS 13 [= Ed. 77]
 paurāṇī śrutir eṣa lokamahito buddhaḥ kilāyaṃ harir
 dṛṣtvā janmajarāvīpattivaśagaṃ lokaṃ kṛpābhyudyataḥ /
 jātaḥ śākyakulendur acyutamatis trātā nṛṇāṃ gautamaḥ
 śāstāraṃ hitam eva kas tam adhunā nāvaiti mūḍho janaḥ // 161 ≈ DS 14 [= Ed. 78]
 yadā rāgadveśād asurasuradārāpaharaṇam
 kṛtaṃ māyāvitvaṃ (*māyāvitve?) dharaṇiharaṇāsaktamatinā /
 tadā pūjyo vandyo harir aparimukto 'budhatayā
 vinirmuktaṃ buddhaṃ na namati jano mohabahulaḥ // 162 ≈ DS 15 [= Ed. 79]
 caturjaladhimekhalākuranitambabhārālasam
 mahīṃ <*sa> mahatīṃ viśṛjya haraye vāpa (!) kaṣṭam balih /
 pradāya munaye tu pāṃśulavam apy aśoko nṛpaḥ
 kṣitīṃ sakalacandramaṇḍalatarāṇī ca samprāptavān // 163 ≈ DS 16 [= Ed. 80]
 pakṣapāto na me buddhena dveṣaḥ kapilādiṣu /
 muktimac ca vaco yasya kāryas tasya parigrahaḥ // 164 ≈ DS 17 [= Ed. 81]
 avaśyam eṣāṃ katamo 'pi sarvavit

jagaddhitaikāntaviśāla*śāsanah / sa eva mṛgyo hy atisūkṣmacetasā janena śeṣaiḥ kim anarthapaṇḍitaiḥ // 165	≈ DS 18 [= Ed. 82]
yasyāpi kiñcin na hi doṣaleśam sarve guṇāḥ santi jagaddhitārthe / brahmāpi viṣṇur giriśo harir vā sa me hi śāstā śubhakāri mitram // 166	≈ DS 19 [= Ed. 83]
yasya na vidyate doṣo vidyante sakalā guṇāḥ / sa[160a]rvajñāḥ sa jagacchāstā tam ahaṃ śaraṇam vraje // 167	≈ DS 20 [= Ed. 84]
yo dṛṣtvā karuṇādṛṣṭyā samrakṣati jagac chubhe / tasyāham śaraṇam gatvā bhajāmi satataṃ mudā // 168	[= Ed. 85]
yaṃ dṛṣtvā suprasannās te bhavanti nirmalāśayāḥ / tam eva sugataṃ nātham bhajāmi śaraṇam gataḥ // 169	[= Ed. 86]
yenaiva trijagallokaṃ putratvat pratipālitam / tam eva trijagannātham bhajāmi śaraṇam gataḥ // 170	[= Ed. 87]
yasmai suśraddhayā dattaṃ tat phalaṃ bodhisādhanam / tam eva śrīghanam bhaktyā bhajāmi śaraṇam gataḥ // 171	[= Ed. 88]
yasmād dharmāmṛtaṃ pītvā sarve sattvāḥ pramodinaḥ / tam eva dharmabhartāram bhajāmi samupāśrayan // 172	[= Ed. 89]
yasya puṇyānubhāvena subhadraṃ bhuvanatrāye / tam eva sadguṇādhāram bhajāmi samupasthitaḥ // 173	
yasmin kleśā na santy eva santi sarve 'pi sadguṇāḥ / tam eva śrīpradātāram bhajāmi śraddhayādarāt // 174	[= Ed. 89]
buddha eva jagacchāstā buddha eva jagadguruḥ / buddha eva jagannātho buddha eva munīśvaraḥ // 175	[= Ed. 90]
tad ahaṃ sarvabhāvena buddhasya śaraṇam gataḥ / śraddhayā dharmam āśādyā bhajāmi bodhiprāptaye // 176	[= Ed. 91]
ye buddhe śaraṇam yānti na te gacchanti durgatim / nirmuktapāpakāḥ saukhyam bhuktvā yānti jinālayam // 177	[= Ed. 92]
śṛṇvanti saugataṃ vākyam ye te na yānti durgatim / samantabhadrasaukhyāni bhuktvā yānti sukhāvāntim // 178	[= Ed. 93]
bhajanti lokanātham ye te 'pi na yānti durgatim / pāpamuktāḥ sukhāny eva bhuktvā yānti surālayam // 179	[= Ed. 94]
etad ratnatrayam loka utpannam sadguṇākaram / tad ahaṃ śaraṇam gatvā bhajāmi [160b] samupāsikaḥ // 180	[= Ed. 95]

etatpuṇyavipākena sarvasattvahitārthataḥ /	
kramād bodhicarīm pūrya saṃbuddhapadam āpnuyām // 181	[= Ed. 96]
tadāhaṃ sugato bhūtvā sarvasattvaśubhārthabhṛt /	
sattvān bodhau pratiṣṭhāpya nirvṛtiṃ samavāpnuyām // 182	[= Ed. 97]
evaṃ vijñāya saddharmaṃ yadīcchati bhavān api /	
triratnaśaraṇaṃ gatvā bhaja nityaṃ sadādarāt // 183	[= Ed. 98]
etatpuṇyavipākena sadā tvaṃ sadgatiṃ tataḥ /	
bodhiṃ cāpi samāsādyā saṃbuddhapadam āpnuyāḥ // 184	[= Ed. 99]
iti tena samākhyātaṃ śrutvā sa paribodhitāḥ /	
tairthyadharmāṃ pratikṣīpya saṃbuddhaśrāvako 'bhavat // 185	[= Ed. 100]
tadārabhya sadā nityaṃ saddharmaśravaṇotsukaḥ /	
vihāre samupāsṛtya prābhajat taṃ munīśvaram // 186	[= Ed. 1]
iti me guruṇādiṣṭaṃ śrutaṃ mayā tathocyate /	
tvaṃ cāpy evaṃ mahārāja triratnaṃ sarvadā bhaja // 187	[= Ed. 2]
prajāś cāpi mahārāja bodhayitvā prayatnataḥ /	
bodhimārge pratiṣṭhāpya pālayasva samāhitaḥ // 188	[= Ed. 3]
etatpuṇyavipākena sadā te maṅgalaṃ bhavet /	
kramād bodhicarīḥ pūrya saṃbuddhapadam āpnuyāḥ // 189	[= Ed. 4]
iti tenārhatādiṣṭaṃ śrutvāśokaḥ sa bhūmipaḥ /	
tatheti pravijñāpya prābhyanandat sapārśadaḥ // 190	[= Ed. 5]
śṛṅvantīdaṃ mudā ye jinavarakathitaṃ mālikasyāvadānaṃ	
ye cāpi śrāvayanti pramuditamanasaḥ śraddhayā bhadrakāmāḥ /	
te sarve lokanāthās trimalakalijito bodhisattvā maheśā	
bhuktvā saukhyaṃ sadānte jinavarānilaye saṃprayā[161a]nti prasannāḥ // 191	
// iti mālikāvadānaṃ samāptam // 20	

Apparatus criticus

- 1b kṛtāñjalipuṭo] Ms. Ed.: kṛtāñjaliḥ puṭo N.
2d ca me 'rhati] Ms.: vamarhati N: tvaṃ arhati Ed.
3b prārthite] Ms.: prārthitaṃ N Ed.
3d samālo°] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): samolo° A'.
4c pravakṣyāmi] Ms. Ed.: pravakṣyāpi N.
7c anyaiś] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): anyaiś A'.
7d bodhisatvaga°] Ms. Ed.: bodhisatvaiga° N.

- 11a brāhmaṇāś] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): brāhmaś A'.
- 12d anye] Ms. Ed.: anekā N.
- 13d °caran] Ms. Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): °carat A' N.
- 15a °upāsīnān] Ms. N: °upāsīnām Ed.
- 15d uttamaṃ] Ms. Ed.: utamaṃ N.
- 16d babhūvur] Ms. babhuvur N Ed. || vāñchinaḥ] Ms.: vāmchitāḥ Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): vāmchitāḥ A' N.
- 17b sakauśalaḥ] Ms. N: kauśalaḥ Ed.
- 17d tīrthika°] N Ed.: tīthika° Ms.
- 19b vanāt] N Ed.: vanāta Ms.
- 20c] pāda b is hypermetric.
- 20d prārthayat] Ms. Ed.: prārthaya N.
- 21a bho mālinn] Here metrically one syllable is lacking.
- 21c mūlyam] Ms. Ed.: mulyam N.
- 22c yadīcchati] Ms. Ed.: yadīcchasi N.
- 23c samupāyāto] Ms. Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): samupāyātā A' N.
- 24a bho mālinn] Ms. Ed. (one syllable short): bho mānn N.
- 24b icchasi] Ms.: icchati N Ed.
- 27b °mānitaḥ] Ms.: °māninaḥ N Ed.
- 27c °guṇena mūlyena] Ms.: °guṇamulyena N: °guṇamūlyena Ed.
- 27d grahītuṃ] Ms. N: gr̥hītuṃ Ed.
- 28ab gr̥hastheśo 'nātha°] Ms.: gr̥hastheśānātha° N: gr̥hastheñānātha° Ed.
- 28b piṇḍada utsahī] Ms. N: piṇḍadotsahī Ed.
- 28d taṃ cābhyayācata] Ms.: tam abhyayācata Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): taṃ nābhyayācata A' N.
- 29a] pāda b is hypermetric.
- 29a gr̥hapatī sādḥū] Ms.: gr̥hapatī so tha Ed.: gr̥hapati so tha N.
- 29c mūlyais taṃ] Ms.: mūlyas taṃ Ed.: mūlyas taṃ N || ādātuṃ] Ms.: ādāya N Ed.
- 31a gr̥hapatīśreṣṭho] Ms. N A': gr̥hapatiḥ śreṣṭho Ed.(i.e. Takahata's corr. for A').
- 31d sthīrasattvo] Ms. Ed.: bodhisattvo N.
- 32a] pāda a lacks one syllable.
- 32a padmam] Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): padmad A' N: padma[m] Ms.(post corr.): padmād Ms.(ante corr.).
- 32e pariṛcchyaiva] Ms.: pariṛcchāva N Ed.
- 33a svacittena] Ms. Ed.: svacitena N.

- 34b °asyārtha] Ms.: asyārthe N Ed.
- 36b nārāyaṇo] Ms. N: nārāyano Ed.
- 37b so 'nubodhitaḥ] Ms.: sānubodhitaḥ N Ed.
- 38c bahumūlyaiḥ] Ms.: bahumūlyaiva N Ed.
- 40b idaṃ] Ms. Ed.: itaṃ N.
- 42d *°dharṃe] ex con: °dharma Ms. N Ed. || pravartite] N: pravartite Ms.: pravarttate Ed.
- 43c sarvarājyaṃ] Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): sarvarājya A' N Ms.
- 43d sarvāṃś] Ms. Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): sarvās A' N.
- 44b niḥspṛhaḥ] Ms.: nisṛḥaḥ N Ed.
- 45d dhyāna°] Ms. Ed.: dhyātvā N.
- 49c dvātriṃśal°] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): dvātriśal A'.
- 51c °ārthaprado dātā] Ms.: °ārthapradā dātā N: °ārthapradātāraś Ed.
- 52d niḥkleśaḥ] N Ed.: niḥkle Ms.
- 53d viśāradaḥ] N Ed.: viśāladaḥ Ms.
- 54c vīraḥ] Ms. Ed.: virāḥ N.
- 56d samupācaran] Ms. Ed.: samupācarat N.
- 57d kartuṃ] Ms. Ed.: kartu N.
- 59d yācāmīdaṃ] Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): yāṃvāmīdaṃ A': yāṃcāmīdaṃ Ms. N.
- 60b ma idaṃ] Ms.: me idaṃ N Ed.
- 60d pramāṇayan] N: pramā(?sā?)ṇayan Ms.: prasāṇayan Ed.
- 61a pradattaṃ] Ms. Ed.: pradattaṃ N.
- 61d bodhicittam] Ms. Ed.: bodhicitam N.
- 64c gṛhastham] Ms. Ed.: gṛhasthaṃm N.
- 65d śrūyate] Ms. N: śrūyate Ed.
- 70b °ṣvaivaṃ] Ms. N: °ṣvevaṃ Ed.
- 70d pūjaya] Ms.: pūjaye N Ed.
- 71d samupācarat] Ms.: samudācarat N Ed.
- 72a sahopetya] Ms.: sahāyebhyaḥ N: sahāyebhya Ed.
- 74d vyāma°] Ms.: vyoma° N Ed.
- 76a kṣiptvā] Ms. Ed.: kṣiptā N.
- 76b kṛtāñjalipuṭo] Ms. N: kṛtāñjaliḥ puro Ed.
- 76d °āśrayat] Ms. Ed.: °āśrayan N.
- 77b : sahasākāśa] Ms. N A': sahasākāśaṃ Ed.(i.e. Takahata's corr. for A') || °saṃsaran] Ms. Ed.: °saṃsarat N.
- 77c muner] Ms. N: mune Ed. || mūrdhna] corr.: mūrdhnaḥ Ms. N Ed.

- 78b 'tivismayā°] Ms. N: te vismayā° Ed.
- 79a so] Ms. N: sa Ed.
- 79c śāstuḥ] Ms. N: śastuḥ Ed.
- 79d pādayor] Ms.: pādayon N: pādayo Ed.
- 80a tathā] Ms. N: tataḥ Ed.
- 80b pādābjayor] Ms. N: pādābjavor Ed.
- 80d dhṛdā] Ms.: dhṛdo N Ed.
- 82b °odadhiṃ] Ms. Ed.: °odadhiḥ N.
- 82c kleśābdhi°] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): kleśobdhi° A'.
- 82d °bhimocakaḥ] Ms.: vimocakaḥ N: vimocākāḥ Ed.
- 83a dharme 'nāśva°] Ms. Ed.: dharmeṇaśva° N.
- 83b sadā°] Ms. N: sādā° Ed. || °yitāpi] Ms. Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): °yitāyi A' N.
- 84b sa sarvavit] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): sarvavit A'.
- 84d °kāṛṣīt su°] Ms.: °kāṛṣīt sa N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): °kāṛṣīt sa A'.
- 85c] pāda c is ra-vipulā.
- 85d prasasrus] Ms. N: prasesrus Ed.
- 86b sarvanarakeṣv] Ms.(post corr.) N Ed.: sarvatra narakeṣv Ms.(ante corr.).
- 86d pracakrur] Ms.: pracakru N Ed.
- 87a parisprṣtāḥ] Ms. N: parisprṣtvā Ed.
- 89b citta°] Ms. Ed.: cita° N.
- 89d praiṣayat] Ms.: preṣayat N Ed.
- 91c narakasthāḥ smaḥ] Ms.: narake sthā syaḥ N: narake sthāḥ sma Ed.
- 91d calitā] Ms. Ed.: calinā N.
- 92a samupāyāto] Ms.: samupāyātā N Ed.
- 93a mahāsattvo] = mahāsatvo Ms. Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): mahāsatva A' N.
- 96b narakāsthītāḥ] Ms.: narakotthītāḥ N Ed.
- 97b tān] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): tāṃn A'.
- 98a yā vāpy] Ms.: yā cāpy N Ed. || ūrddhvaṃ gatā bhāsas] Ms. Ed.: ūrddhagatā bhāsa N.
- 98b *te 'vabhāsyā] ex conī: tāvabhāsyā Ms. N Ed.
- 98c paryantam] N Ed.: payantam Ms.
- 99a surān] Ms. Ed.: turān N.
- 99cd °chabdair uccair] Ms.: °chabdaṃ ruccair N Ed.
- 100b śūnyam] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): śūnyaṃn A'.
- 100c dharme] Ms.: dharmaṃ N Ed.
- 101a tad] Ms. Ed.: ta N.

- 104a tā] Ms. N: tāḥ Ed. || raśmayāḥ] N Ed.: rasmayaḥ Ms. || pañca] Ms.: pañcaḥ N Ed.
- 104b sarvāṃ] Ms. Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): sarvāllon A': sarvāl N.
- 105b ekībhūtāś] corr.: ekībhūtā Ms. N Ed.
- 105d 'viśat] ≙ viśat Ms. N: viśet Ed.
- 106a sabhālokāḥ] Ms. Ed.: samālokāḥ N.
- 106b 'tivismayāhatāḥ] Ms. N: te vismayānvitāḥ Ed.
- 106c ādiśen] Ms. N: ādeśen Ed.
- 107a athāyu°] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): āthāyu° A'.
- 107d bhagavantam] Ms. Ed.: bhagavanta N.
- 109a yadarthe hetunā] Ms. Ed.: yadartham hetunā N.
- 109a smitam] metre!
- 110a bhavān] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): bhavāt A'.
- 110a smitam] metre!
- 110d sarvāṃ] Ms.: sarvāl N: sarvān Ed.
- 111c sarvāṃ] Ms.: sarvāl N: sarvān Ed.
- 111d cābravīt] Ms. Ed.: sābravīt N. Metrically one syllable is lacking.
- 112a etat *sadānanda] etat saḥānanda Ms.: etan mahānanda N Ed.
- 112c sarve buddhāḥ] Ms.: sarvabuddhāḥ N Ed.
- 113b sādhu ārāmikaḥ] Ms.: sādhu ārāmikaḥ Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): sādhu rāmikaḥ A': sādhu rāmikaḥ sa N.
- 113d śuddhayā mudā] Ms.: śraddhayā mudā N Ed.
- 114c bodhicittam] Ms. Ed.: bodhicittam N.
- 115a sarvāḥ] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): sarpāḥ A' || mārān vinirjayan] Ms. N: mārāgaṇān vinijayan Ed.
- 116b ārthabhṛt] N Ed.: ārthabhṛḥ Ms.
- 124c sa mālikaś] Ms.: sabhāṃtikaś N: sabhāntikaś Ed.
- 126a so 'nātha°] ≙ sonātha° Ms.: sānātha° Ed.
- 126b] By mistake N repeats the text of 125cd between 126b and 126c.
- 126d svanilayam] Ms.: sve nilayam N: sve nilaye Ed.
- 128c ruṣṭa] Ms.: ruṣṭo Ed.: suṣṭo N.
- 129a pāpin] Ms. Ed.: pāpīn N.
- 130b °bhāṣiṇi] Ms.: °bhāṣiṇī N: °bhāṣiṇī Ed.
- 130d cinoṣi] Ms.: vinoṣi N Ed.
- 131a bhajanti] Ms. N: bhajante Ed.
- 131c yātāś] Ed.: yātāḥ Ms.(post corr.): yātā Ms.(ante corr.) N.

- 131d *caranta *aśubhe] ex conī: carantyaśubhe Ms. (metre!); caranty aśubhe N Ed.
- 132a kadā cid] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): kadā nid A'.
- 132d dharmo] Ms. Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): dharmā A' N.
- 133b yateḥ] Ms. N: 'yateḥ Ed.
- 134c adharmam api] Ms.: adharṃ ye api N Ed.
- 135d nindanīyo] Ms. Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): nindanīyā A' N || durmatih] Ms.: durgatih N Ed.
- 136c dharme] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): dharmo A'.
- 137b brahmāṇaṃ] Ms. N: brahmaṇaṃ Ed.
- 138a brahmāṇaṃ] Ms. N: brāhmaṇaṃ Ed.
- 138d saṃprayānti] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): saṃprayāṃnti A'.
- 141a matvātra] Ms. Ed.: matvā ca N.
- 141c etāṃs] corr.: etāt Ms. N: etāṇ Ed.
- 142b tān sadgurūn] Ms. Ed.: tā sadgurun N.
- 146d 'lpadhiyā] ≅ lpadhiyā Ms.: lpaśiyā N: 'lpaśiyā Ed.
- 147a 'lpatvāt] Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): lpamvāt A': lpatvāt N: lpambātra Ms.
- 147b tavābhi°] Ms. Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): tavobhi° A' N.

The whole text of stanzas 148-167 of the Mālikāvādāna is the same as the Devātīśayastotra (= Devatāvimarśastuti) 1-20.
I have described variant readings for the Mālikāvādāna 148-167 above.
See I - 4 , apparatus criticus of the Devātīśayastotra 1-20.

- 168a yo dṛṣṭvā karuṇādrṣṭyā] Ms.: yo smin sudṛṣṭyā nirayān N: yo 'smin sudṛṣṭyāt Ed.
- 168b saṃrakṣati] Ms. N: saṃrakṣyati Ed.
- 169b nirmalāśayāḥ] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): nirmalāśayā A'.
- 170d gataḥ] Ms.: tataḥ N Ed.
- 172cd] After tam eva, succeeding words of cd (dharmabhartāraṃ bhajāmi samupāśrayan) are lacking in Ed. and N.
- 173] the whole text of this anuṣṭubh is lacking in Ed. and N.
- 174a] the pāda a is lacking in Ed. and N.
- 174b santi sarve 'pi sadguṇāḥ] Ms.: saṃti sarve 'pi duḥkhachedanasadguṇāḥ Ed.: sarve 'pi sadguṇāḥ śaraṇe sthitāḥ N.
- 177a buddhe] Ms.: buddha N: buddhaṃ Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): buddhaḥ A'.
- 177b gacchanti: Ms. Ed.: gacchati N.

178d sukhāvātīm] = sukhāvātīm Ms.: sukhāvātīm N Ed.
 179c pāpamuktāḥ] Ms. Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): pāpamuktā A' N.
 180a loka] corr.: loke Ms. N. Ed.
 181a °ārthataḥ] Ms. N. °ārthakaḥ Ed.
 181c bodhicarīḥ] Ms.: bodhicarāḥ N Ed.
 181d āpnuyām] corr.: āpnuyān Ms.: āpnuyāt Ed.: āpnuyāḥ N.
 182d samavāpnuyām] Ms. N: samavāpnuyāt Ed.
 183d sadādarāt] Ms. N: samādarāt Ed.
 186c samupāsṛtya] Ms. N: samupāsṛitya Ed. || prābhajat] Ms. Ed.: prābhajaṃ N.
 187b maṅgalaṃ] N. Ed.: maṅgale Ms.
 187c bodhicarīḥ] Ms. N Ed.(i.e. Takahata's corr. for A'): bodhiṃ carīḥ A'.
 189c nāthās] Ms.(post corr.) Ed.: nāthāḥ Ms.(ante corr.) N || °kalijito] Ms. N A': °kalijitā Ed.(i.e. Takahata's corr. for A').
 Colophon: iti mālikāvādānaṃ samāptam // 20 //] Ms.: iti mālikāvādānaṃ samāptam // 27 //: iti ratnāvādānatatve mālikāvādānaṃ Ed.

II-2. SMRAM 第20章の全訳

その時大地の守護者アショーカは欣然と合掌して、阿羅漢であるかのウパグプタを拝礼し、再び次の様に懇請しました。[1]

— 尊師よ、さらに別の善説を私は聞きたいと思います。それ故、師が [あなたに] 語られたとおりに、それを私をご教示ください。[2]

このように王から懇請された、行者たちの王（聖者）であるかのウパグプタは、かの王を見つめながら話しかけて、次の様に教示しました。[3]

— よろしい、聞きなさい、大王よ。師が私に語られたそのとおりに、私は語りましょう、あなたの福德の増大のために。[4]

それは次のとおりです。— 世尊・仏・釈迦族の獅子・生類の師父（グル）・一切智・善逝・教師・法王・牟尼の王は、[5](#1) 或る時、シュラーヴァステイー（舎衛城）の近くにある偉大な園林・寺院、ジェータ園（祇園）において、弟子たちを伴い、[6] また僧である比丘たち、比丘尼たち、優婆塞たち、優婆夷たち、また他の者たちと菩薩たちを伴って、[7] 一切の生類の益のために菩提行を明らかにし、正法を説き示しつつ、照耀しながら、滞在されていました。[8]

その正法という不死の甘露を飲まんとして、すべての衆が集まりました。[すなわち] シャクラ（インドラ神）をはじめとする神々の王たち、梵天をはじめとする世界の守護者たち、[9] ダイティヤ（阿修羅）の王たち、ガルダたち、龍たち、ヤクシャた

ち、ガンダルヴァたち、キンナラたち、シツダたち、ヴィドゥヤーダラ（持明者）たち、羅刹たち、大通力者たち、[10] 仙人たち、婆羅門たち、クシャトリヤたる諸王、またヴァイシャたち、王子たち、大臣たち、輔臣たち、家来たち、[11] 家長たち、隊商主たち、商人たち、工芸の匠たち、都民たち、地方の者たち、村の者たち、また他の者たち、山村の長たち（あるいは：巡礼たち）、[12] — その場に集まり来た彼らすべては、かの光輝に充ちた方（仏）、牟尼（聖者）を見て、右適し、拝礼してから、近づきました。[13]

作法どおりに敬意を示して、欣然としてお辞儀し、合掌した彼らは皆、[仏の]まわりを取り囲んで、それぞれ[仏を]前に見ながら、近坐しました。[14]

近坐した彼らすべての者を見ながら、かの世尊・牟尼は[四]聖諦からはじまる最高の教えを説きました。[15]

その法を聞いて彼らは皆、[教えに]覚醒させられ、[仏の]教えの勝れていることを理解し、悟りを欲しました。[16]

その都城ではプラセーナジット王がコーサラの国民たちと[住んで]いましたが、其処に善逝（仏）がいない時期には、[王は]異教徒を信奉していました。[17](#2)しかし善逝が僧伽の人々を伴って、其処にやって来られると、かの光輝に充ちた方（仏）をかのお王はいつも常に信奉しました。[18]

さて[仏が滞在されていた]その時、その地に或る一人の園丁（園林で働く庭師）がおり、林から新鮮な一本の蓮を取って、王に与えるため都城に入りました。[19](#3)

其処の或る路上で、異教徒の在家信者が彼を嬉しげに見つけて、ただちに彼の前に行って、その一本の蓮を求めました。[20]

「おお、園丁さん、もしあなたにこの蓮を売ろうという気があるなら、あなたは通常の値段を受け取って[それを]私にくれますか。」[21]

そのように彼が求めるのを聞くと、[園丁は]心が欲にそそられて、「もしあなたが欲しいのなら、与えてもよいですよ」と、その[蓮]を与えようと欲しました。[22]

まさにその刹那に、その場に、家長アナータピンダダ（給孤独長者）が花を求めてやって来て、その園丁に尋ねました。[23](#4)

「おお、園丁さん、もしこの蓮をあなたが売ろうと望むなら、あなたは二倍の値段を受け取って、[それを]私に与えてくれませんか。」[24]

彼がそう言うのを聞いて、その異教徒の在家信者も、その[言い値]より更に二倍の値段で、その蓮を求めました。[25]

そう、その者が求めたのを聞いて、かのアナータピンダダも、それより更に二倍の値段でその睡蓮を求めました。[26]

それを聞いて、高慢と矜持によって傲る心をもつその異教徒も、その三倍の値段でそれを得ようと欲しました。[27]

それを見て、家長たちの長であるかのアナータピンダダは [強く] 意欲して、 [更に] 四倍の値段でその蓮を求めました。[28]

そのようにして、立派な人物である二人の家長は、十万 [金] に達する値段をもって、 [互いに] その蓮を手に入れようと、かの園丁に求めました。[29]

その [二人の有様] を見て、 [値を] 相互に増大させたかの園丁は、その両者に与えることをしないまま、心で次の様に考えました。[30](#5)

「この家長・長者・善慧者アナータピンダダは、軽率な方ではなく、とても心がしつかりした人で、堅実な性格をもち、聡明なお方である。[31] [この方が] いったい誰のために、この蓮をこれほどまでの値段で求めるのか。—きつとここには大きな理由があるに違いない。それゆえ、それを尋ねて、善い徳性を求めている [ほうの] 人に与えることにしよう」[32]

このようにその園丁は自分の心で熟考してから、 [そう] 意欲して、その異教徒をみつめると、丁重に次の様に尋ねました。[33](#6)

「さあ、そこなるお方よ。あなたは、何の目的で、この睡蓮をこれほどまでの値段で買おうと欲されるのか。それをお話し下さい。」[34]

そう彼が尋ねるのを聞いて、その異教徒は悦び、その園丁を見つめて、よく納得させるために語りました。[35]

「シュリーの夫であり生類の主であり人々を悩ませしめる者である、ナーラーヤナ (ヴィシュヌ) に私は礼拝供養 (プージャー) をするのです。そのために、この蓮を私に与えてください。」[36]

このように彼が語ったのを聞くと、その園丁は納得し、 [次に] かのアナータピンダダを見て、目的を尋ねました。[37]

「おお、有徳のお方よ、あなたは何の目的のためにこの蓮を多大な価格をもって得ようとするのですか。それを私に話してください。」[38]

その言葉を聞いて、かの善慧者アナータピンダダはその園丁を見つめて、よく納得させようと、語りました。[39]

「善い哉、善い哉、大きな福分をお持ちの方よ、あなたのこの蓮を多大な価格で私が欲する、その目的を語りましょう。お聞きなさい。[40]

この世界でシュッドーダナの子 (釈尊) ・転輪王・人民の王は、あらゆる有情を利益するため、悟りを成就せんと意欲されました。[41]

世界のあらゆる場所で、煩惱にかき乱されて心定まらぬ人々の中において、菩提行を欠いた、野蛮な者たちの教えが現れて [広まった] 時、[42] [そのお方は] 自ら菩提行を堅持して、 [正法を] 明示せんと努力し、王国すべてとあらゆる所有物を捨てて、[43] 離欲の [生活] 法に依って、輪廻における享樂を欲することなく、ガヤーシールシャ山に赴かれて、極めてなしがたい苦行を行い、[44] その後、人々を益せんがた

め、[苦行をやめて]立ち上がり、心を集中して、菩提樹の根元に坐ったまま、禪定に専念され、[45] その場所であらゆるマーラ（魔）の群と煩惱の群に勝利して、悟りの知に達して、今やブッダとされています。[46]

そのお方は、ブッダ・生類の教師・生類の庇護者・生類の師父（グル）・生類の主・生類の救済者・法王・牟尼の王、[47] 一切智・善逝・光輝ある方・六神通を持つ者・教導者・真実を語る方であり、大勇健者であり、真実の法と幸福を目的として持つ方であり、[48] [全身] 遍くすばらしい姿かたちの体と、見目麗しい容姿を持ち、制御された感官をそなえ、三十二相・八十種好に飾られている方であり、[49] 世尊・光輝に充ちた方・梵住者・徳性の蔵であり、一切の三界の支配者、あらゆる罪を滅除する方であり、[50] すべてのマーラ（魔）たちに打ち勝った方、阿羅漢、悟りへの道を示す方であり、欲する物を与える方、施与者、如意宝珠の如き勝れた徳性の方であり、[51] 清らかな戒を持つ方、浄行をなす方、忍辱の誓戒を保つ方、善慧者であり、あらゆる有情の益のために努力する方、煩惱無き方、一切智、善巧者であり、[52] 定と三昧を愛好する方、悟りの法を輝かせる太陽であり、智恵の蔵、大賢者、あらゆる学問に精通した方であり、[53] あらゆる方便と手段を知る方、誓願によって他者を救う方であり、三界の勝利者、英雄、悟りの目標を完遂した者であり、[54] 識の水波（vijñānormi）の三昧に居る方、悟りの知という宝を持つ方であり、あらゆる有情を幸せにする方、あらゆる相貌をもって自分の姿とする者です。[55]

釈迦族の聖者（釈迦牟尼）、偉大なブッダ（mahābuddha）、最勝者たちの王（jineśvara）、如来は、あらゆる有情を益する目的で、あらゆる場所にやってこられ、[56] あらゆる人々を照らしながら、至る処で幸福を作って、この地にも、あらゆる有情に幸せを作り出すためにやって来られたのです。[57]

今、ジェータカ園の寺院においてサンガの者たちと共に、正法を教示しつつ、常に照耀しつつ、滞在されています。[58]

今、その方への礼拝供養（プージャー）を私はしたいと望むので、その目的のため、多大な価格をもってこの蓮を求めているのです。[59]

それ故、あなたは代金を受け取って、この蓮を私に下さい。欲するとおりの財を、あなたに[値を]まかせて、お与えしましょう。[60]

もしも[仏への]浄信により、あなたがこれを与えてくれるのであれば、私はとても喜ばされます。この福德の異熟によって、あなたは菩提心を得ることでしょう。[61]

どんな時でも善い世界に赴き、決して悪い世界に[生まれる]ことはないでしょう。次第に菩提行を満たして（完成させて）、悟りすらあなたは得ることでしょう。[62]

善き人よ、そのように考えて、もしあなたが悟りを願うなら、[あなたが]欲しいだけの財を受け取って、この[蓮]を私に与えてください。」[63]

— このように彼が請うのを聞いて、その園丁は喜悦して、寄る辺のない者たちの庇護者たるその家長に、次の様に答えました。[64](#7)

「ああ、ブツダという偉大な通慧者を、かつて見たことがありません。かくのごとき[彼の]偉大な徳性も、私は聞いたことがありません。[65] そのため、私はかの生類の庇護主に会うことを欲します。彼の正法という不死の甘露を飲みたいという望みが私に生じました。[66] それ故[私は]自ら、其処に行つて、かの仏・牟尼の王に対して、この白蓮をもって丁重に礼拝供養をしたいのです。[67] それ故、善き人よ、あなたは同情心により、生類の師父(グル)であるブツダのその隠棲処に私を連れていって、正しい教えに[私を]繋げてください。」[68]

そう彼が求めるのを聞いて、かのアナータピンダダは欣然とその園丁を見つめ、再び次の様に語りました。[69]

「善い哉、善い哉、大きな福分をお持ちの方よ、もしあなたが欲するなら、そのようにしなさい。あなたは私と一緒に来なさい。かの牟尼の王に礼拝供養しなさい。」[70]

そのように答えて、園丁を嬉しい気持ちにさせながら、かの家長は彼を連れて、ジェータカ園の寺院に赴きました。[71]

其処に彼と一緒にやって来ると、かの家長アナータピンダダは合掌し、かの生類の庇護主(仏)にお辞儀をして、一隅に坐りました。[72]

そこでかの園丁は、集会場の真ん中にお坐りになっている—比丘サンガに囲まれて手前におられる—かの光輝に充ちた方・牟尼の王を眺めました。[73](#8)

三十二相八十種好に飾られ、宝石の山のように輝き、[常光]一尋の光線に飾られている[お姿]、[74] [全身]遍くすばらしいかたちの肢体、見目麗しい容姿、澄んで輝かしい感官をそなえた[仏]を見て、彼は喜悦してお辞儀し、三度の右邊を行つてから、[75] その蓮を前方に投ずると、欣然と合掌し、かの牟尼の両足に[跪いて]拝礼し、其処で一隅に坐りました。[76](#9)

[園丁に]投じられるや否や、その蓮はたちまち虚空に拡がり、一つの傘になって、牟尼の頭上で[空中に]停まり、光り輝きました。[77]

それを見て、その集会場の人々は皆非常に驚愕して、「ああ、ブツダの偉大さよ」と語って、浄信を得ました。[78]

それを見て、かの園丁は大変な驚愕と歓喜の心をいだき、ただちに立ち上がり、師の両足にひれ伏してお辞儀しました。[79](#10)

そのように、彼は合掌しながら生類の師父(仏)の両足の蓮にお辞儀すると、[自らも]仏の境地を得ることが出来るように、心で[次の]誓願を立てました。[80]

「この福德の異熟によって、煩惱に満ちて墮落した、導き手のいない闇黒の世界において、善逝・勝者(仏)に私かなれますように。[81] 生存の海を自ら越えることが出

来ない者たちを越えさせる者、煩惱の海に沈んでいる者たちを救い上げる者、解脱させる者に、[82] 教えによって安息を得ていない者たちに絶えず安息を与える者に、悟りへの道が見えない者たちに〔道を〕示す者に、私はなれますように。」[83]

彼はそう思念し、誓願を立てました。するとその時かの一切智・世尊は悦んで、美しい微笑を浮かべました。[84](#11)

その微笑がなされた時、蓮のごとき牟尼の王（仏）の顔から、五色の美しい光線が三界に〔遍く〕流れ出ました。[85](#12)

下の方に行った光明は、地獄の全域をも照らし出して、浄福を作り、苦痛を消滅させました。[86]

その光明によって触れられたその地獄の住民たちは皆、苦から解放され、安楽を感じて、次の様に驚いて語りました。[87]

「ああ、何という大きな安楽が今われわれに生じたことだろう。いったい、われわれはこの〔地獄〕から死没し〔転生して〕、どこか他の世界に生まれたのだろうか。」[88]

このような思いに包まれた彼らの心に、理解を生じさせるため、世尊は化身の仏を地獄に向かって発出しました。[89]

それを見ると、彼ら地獄に居る者たちは皆、非常に驚愕し、互いに見合って、再び次の様に語りました。[90]

「おいみんな、われわれはここから死没したのでもなければ、他の世界に行ったわけでもない。まさしくこの地獄に居るままであり、どこにも移動していないのだ。[91] この曾て見たことがない人物がやって来られたので、きっと彼の威力によって、今〔われわれに〕浄福が生じているのだ。[92] この偉大な有情はきっとわれわれが苦痛に悩まされているのをご覧になって、憐れみにより、遍く救済するために、この地獄に来られたのだ。[93] それ故、われわれはこのお方に頼って、絶えず帰依をなし、いつも信心をもって拝み、熱心に信奉しようではないか。」[94]

このように話し合って、そのすべての地獄の者たちは納得するを得て、かの仏に帰依をなし、嬉しい心で拝み、信奉しました。[95]

その〔仏を〕信奉することから生じた福德によって、そのすべての地獄に住する者たちはただちに善趣（善い諸世界）に去って、教えを〔受ける〕器量の者となりました。[96]

このようにして、その総ての光線は、地獄に居る者たち全員を救済してから、再び生類の教師（仏）がおられるその地に戻りました。[97]

また上の方に行ったその諸光線は八つの方角を輝き照らし、有頂天のきわまで輝き照らしながら拡がりました。[98](#13) そして幾つかの偈頌をもって、神の身体の快樂

を楽しんでいるすべての神々に対し、遍く高らかに大音声をもって、次の様に勸言をなしました。[99]

「一切輪廻は無常、苦、空、無我である。このことを思い、いつも善き教法を熱心に実行しなさい。[100] さあ出離しなさい。取りかかりなさい。仏の教えに専念しなさい。三宝に帰依して、絶えず熱心に信奉しなさい。[101] この善逝の法をいっしんに行う者は、輪廻における生を捨てて、苦を終わらせるであろう。」[102]

この〔偈頌の〕音声を聞くと、すべての神々はよく理解するを得て、三宝に帰依して、ひたすら心をこめて信奉しました。[103]

このようにして、その五つの光線はあらゆる人々と神々をも三宝に帰依せしめて、再び牟尼のもとに戻りました。[104](#14)

其処でそれらのすべての光線は一つに合して、一かたまりになり、勝者（仏）を右邊してから、彼の頂髻に再び入りました。[105]

それを見て、かれら集会場の衆すべては甚だ驚きに打たれて、「この牟尼の王は〔これから〕何を御教示になられるのだろうか」と深く考えこみながら、坐っていました。[106](#15)

その時、かの具壽アーナンダは彼らが考えていることを思考して、立ち上がって合掌し、お辞儀すると、かの世尊に語りました。[107]

「世尊、あなた様はいかなる理由で微笑を發出されたのですか。あらゆる善逝（仏）は原因なくして、決してお笑いになることはありません。[108] いかなる理由・原因により、あなた様がいま微笑を寄せられたのか、その理由をこれらすべての衆は聞きたいと望んでいます。[109] 生類の師父よ、何の理由によってあなた様が微笑まれたのか、どうかその理由をすべての衆にご教示くださり、理解させてください。」[110]

このようにアーナンダが語ったのを聞いて、かの世尊・牟尼の王は、すべての衆を見つめて、かのアーナンダに答えました。[111](#16)

「アーナンダよ、それはその通りです。常にすべての仏・牟尼の王は、因と縁なくして、どこでもいつでも、決して微笑を發出することはありません。[112]

さあ、あなたはこのことを見なさい。この善良な、浄信ある園丁は、淨い信仰心から欣然として私に礼拝供養を行いました。[113](#17)

この福德の異熟により、この賢い園丁は菩提心を達成して、菩提行を行じながら、順次に、[114] あらゆる波羅蜜を満たして（完成させて）、あらゆるマーラたちに勝利し、正等覚を達成して、無煩惱者・阿羅漢・牟尼の王・[115] 十力・生類の庇護主・あらゆる有情を益する目的をもつ者たる、パドモッターラという名の仏・如来になるでしょう。[116]

この者は、私の正法の遂行において浄信を得た者として、悟りへの誓願を堅持して、信仰心により供養をしています。[117]

同じ様に、信仰心により常に三宝に帰依し、信奉する人々は、皆、善逝の息子たち（仏弟子）になることが出来るでしょう。[118]

そしてその者たちはあらゆる有情を益する目的で努力する、徳性の蔵である菩薩・大士となることでしょう。[119]

その後、すべての波羅蜜を順次に完全に満たし、悟りに達して、善逝（仏）にさえなることでしょう。[120]

このように思惟して、輪廻において悟りの知を欲する者たちは、三宝への信奉をなし、絶えず浄行を行うべきです。」[121]

— 以上のように牟尼の王（仏）が教示されたのを聞いて、アーナンダをはじめとする彼ら比丘たち、サンガに属するすべての者たちは、気づきを得て、歓喜しました。[122](#18)

あらゆる人々、その全員が、このように光輝に充ちた方（仏）が語られたことを聞いて、三宝に帰依をなし、喜悦をいただき、信奉しました。[123]

かの園丁は、このように師・牟尼の王が自ら、彼自身の授記をなさったのを聞いて、歓喜し、非常に悦びました。[124]

それ以降、かの園丁はいつも常に喜悦をいだいて、三宝への奉事をなし、菩提行を実行した。[125]

その〔説法の〕後、かのアナータピンダも、彼と一緒に歓喜して、かの生類の庇護主（仏）にお辞儀して、自分の家に帰りました。[126]

かの園丁は彼の家で妻と共に喜び、三宝に帰依して、絶えず浄行をなしました。[127]

その後、彼が善逝の教え（仏教）を実践していることを聞くと、かの異教徒の在家信者は激怒して、〔彼のもとに〕やって来て、非難しました。[128]

「おい、愚か者、悪人よ、どうしてこんな不善行をお前さんはしているのだ。完全に前さんは墮落した。地獄で苦しみを得るだろう。[129]

なぜなら、〔釈尊という〕器ならざる者・邪行者・誤った教えを説く者に、お前さんは親近して信奉することで、大きな罪を積んでいる。[130]

仏を尊崇する人々は、〔死後に〕善趣に行くことはない。彼らは悪趣（三悪道）だけに行き、たえず不善行をなすのだ。[131]

いつでもどこでも、決してそれら〔仏教徒〕の家庭に幸せが生じることは無い。ラクシュミー（繁栄の女神）は〔そこに〕住むことがない。なぜなら法が滅び去っているからだ。[132]

あの乞食で食っている出家どもには全く善行が存在しない。どうしてお前さんは〔釈迦が〕まるで正しい導師であるかのように、信仰心から絶えず敬っているのだ。[133]

この世で自ら破滅し、他の者たちも破滅させている、あの哀れな者は、非法を正法だと言いながら、欺している。[134]

あの者（釈尊）がどうして教師・善慧者・智者・法王・牟尼の王であるものか。あの者は善人たちによって供養されるべきではない。悪見ある者として非難されるべきだ。[135]

このように、私は真実を告げているのだ、善行を欲するお前さんを益するために。もしお前さんに法を欲する心があるならば、私たちの言葉を聞いて、実行しなさい。[136]

あの仏との交際を捨て、いっしんに聖地で沐浴してから、ブラフマー神・ヴィシュヌ神・イーシャーナ（シヴァ）神を、作法どおりにいつも信奉しなさい。[137]

この世でブラフマー神を尊崇するところのすべての梵行者たちは、清らかな心をもつ幸せな者たちとして、神々の世界に赴く。[138]

ヴィシュヌ神を常に尊崇する者たちは、悪趣に赴くことがない。必ず善趣に行き、人間の王となる。[139]

偉大なルドラ（シヴァ）神を尊崇する者たちは、地獄に赴くことはありません。あらゆる幸せを味わいながら、死後にシヴァの住まいに行く。[140]

このように考えて、もしこの輪廻界において、お前さんが常に幸せを欲するならば、これらの三世界主たちを常に供養しながら、信奉しなさい。[141]

この私の言葉を聞いて、彼ら本当の導師（グル）である行者たちを信奉しなさい。彼らの正しい教えを聞いて、絶えず淨い誓戒を行いなさい。[142]

そのようであれば、この世できっとお前さんに常に幸せがある。死後に罪惡から解放されて、神々の住まいに赴くことだろう。」[143]

— 以上のように彼が語ったのを聞いて、かの園丁は怒り、その異教徒に対して憤激し、非難して、次の様に語りました。[144]

「ああ、このように何を前さんは語るのか。私に二度とこの様に語ってはいけない。前さんこそ地獄に行くことだろう、牟尼の王を非難するなんて。[145]

聞きなさい、今ここで、私は仏の徳性を少し語ってあげよう。わずかな知性をもつ私に、詳しく語ることがどうして出来るでしょう。[146]

それでも、前さんの理解のために、私はわずかな〔知性〕で語りましょう。聞いてから、前さんは熟考し、正しいか正しくないかを判断しなさい。[147]

*

[以下の第148～167詩節は、Devātīśayastotra (= Devatāvimarśastuti) の第1～第20詩節の梵文テキストの借用である]

仏・世尊のみが善い徳性を持ち、ヴィシュヌは讃えられず、ハラ（シヴァ神）も、黄金の胎（ブラフマー神）も〔讃えられ〕ない。しかるに彼らの麗しい行いの卓越した輝

かしさを耳にして、どの者が徳性があり、[どの者が] そうでないかに[人は] 考えをめぐらせる。[148]

振り上げたガダー（棍棒）をもつヴィシュヌは、非情の者たちを伴って、騙す者である。ルドラは灰と不生者（ブラフマー神）の髑髏をもち、狂酔した者である。しかるにブッダは完全に寂靜なる行為という卓越をもつ。我々は誰を供養しようか——とても寂靜なる者か、それとも寂靜ならざる姿をもつ者か。[149]

戦輪をもつかの<ヴィシュヌ>はドゥルヨーダナなどの王たちを滅亡させた者であった。ピナーカ（棍棒の名）をもつハラ（シヴァ神）はトリプラの破壊者であった。グハ（スカンダ神）はクラウンチャを固い槍で刺し殺した。このブッダのみが純粹に、生類に益することを願った。[150]

「私にとって、こいつは苦しめられるべきであり、こいつは護られるべきであり、こいつは殺されるべきだ」——これが神々の最高者の行動のしかたである。至福（解脱）と増進（繁栄）の幸せに益することを、ただ一つの思いとしてもつブッダにとって、敵である者たちもおらず、好もしい者たちもない。[151]

ヴィシュヌの言葉は情欲などの悪徳から生まれ出たものである。またシャンブ（シヴァ神）のそれ（言葉）は狂った振舞いをさせる。如来のそれはあらゆる悪徳を鎮める。ここであなた方は熟考すべきである、[それらのうちの] 誰が、拝礼されるに価する者なのかを。[152]

一方の者は憐愍を捨てて、他者を殺すために努力するが、他方の者は救済のために、生類への憐れみにより、活動する。また一方の者は情欲を有するが、他方の者は情欲から解き放たれている。その両者のどちらが供養に価するか、ここでよく考えて、彼[の名]を言ってみなさい。[153]

金剛を手にするシャクラ（インドラ神）、すきを手にするバラ（バララーマ神）、また、戦輪の武器をもつクリシュナ、槍を手にするスカンダ、墓場を住所にして三叉戟の武器をもつルドラ、——これらの、苦しみと恐怖によって特徴づけられた、憐愍無く、子供っぽい、様々な武器をもつ、常に生き物を殺すために武器を振り上げる彼らを、いかなる賢者が礼拝しようか。[154]

[三叉] 戟を持っておらず、とても快樂を楽しむ美貌の女を膝の上に載せておらず、戦輪あるいは槍を、あるいは恐ろしい金剛を、あるいはすきを持っておらず、煩惱から解放されており、利他の行為に熱心な思いをもつ、生類が依るべき処（帰依処）であるかの聖者（仏）に、私は依り処として近づいた（帰依をなした）。[155]

ルドラは情欲のゆえに女を[膝に] のせ、残忍であり、羞恥心を欠いている。ヴィシュヌはより一層残酷であり、恩知らずな行為をし、スカンダは自ら親族を殺した。残酷な顔をもつ女パールヴァティーはマヒシャを殺し、人間の脂肪と肉を食べる。ヴィ

ナーヤカは飲むことを好む。〔それにひきかえ〕十力はくつろいでいても、欠点のない親友である。[156]

私にとってかの世尊は親族ではないし、他の者たち（外道の徒）は敵ではない。或る一人の賢者であっても、教師・三界の師父であって、言葉と善き行為における卓越した偉大さを持つお方であることを聞いて、徳性の卓越を貪求するが故に、ブッダに私たちは帰依する。[157]

善逝（仏）は私たちの父ではないし、外道の徒は敵ではない。かの如来から施しが私たちに与えられたわけでもないし、カナダなどの〔外道の徒〕から〔私たちは〕何一つ奪われたわけでもない。しかしながら、かの世尊・ブッダは専一に生類の益をなす者である故に、また〔彼の〕汚れなき言葉はすべての汚れ（煩惱）を取り去るものである故に、私たちは彼に篤い信仰を捧げる。[158]

絶えず〔他者を〕益することを願う者、いつも生類を助ける者であり、様々なかたちの病に苦しむ生類を健康に戻す者、〔おのが〕掌のように隠されたあらゆる知の対象を理解している者である、—その無比なる聖者に対して、善良なる篤い信心をもつ者として、あなた方は帰依をなすがよい。[159]

〔礼拝を〕真心をこめて〔したわけ〕ではなく、あるいはたまたま偶然に〔行っただけ〕であるか、あるいは他人に従った〔だけ〕であるか、あるいは疑念をもちながら〔行っただけ〕場合であっても、月のような『牟尼たちの王』（仏）に礼拝をするならば、そのような者たちであっても、神々の完全な幸福の達成を得る。[160]

これはプラーナの聖典伝承であるが、生類から尊崇されるこのブッダとは、ハリ（ヴィシュヌ神）であるようだ。〔彼は〕生類が生と老と災い（死）に支配されているのを見て、憐れみから昇り出た釈迦族の月として、不屈の思いをもつ、人類の救済者ガウタマとして、誕生なさった。かのお方が有益な教師であることを、今日いかなる愚かな人々が理解しないのか。[161]

貪りと瞋りの故に、大地を奪うことに執着した思いをもつ者（ヴィシュヌ神）によって、アスラとスラ（神々）の妻の掠奪〔の行為〕が、〔彼の〕欺詐ある性質として（詐欺ある性質において）なされた時、非賢者性（愚者性）のゆえに解脱していない者であるハリ（ヴィシュヌ神）は〔多くの者により〕供養されるべき・礼拝されるべき者とされた。〔しかるに〕愚かな迷妄に満ちた人々は、解脱している方であるブッダを礼拝しない。[162]

四海という腰帯を〔はちきれんばかりに〕満たす臀部の重荷（重さ）によって動きの鈍い〔女である〕偉大な大地を、かのバリはハリ（ヴィシュヌ神）に贈って、〔その結果バリは〕悲惨な〔状態〕を得た。〔一方〕しかしアショーカ王は牟尼（仏）にわずかな塵を与えたので、満ちた月の輪を超える〔すべての〕大地を得た。[163]

私は〔意図的に〕ブッダに味方するわけではなく、カピラなどの〔異教徒〕を憎んでいるわけでもない。解脱をそなえた言葉をもつところのその者を受け入れるべきである。[164]

これらの者たちの中で、いずれかの者が確かに一切智であって、生類の利益のために純一に広大な教えを説いた者であれば、その者こそが、甚だ思考の鋭い精神をもつ人々によって探し求められるべき者である。残りの、無益な事柄を知る学者たちに何の用があらう。[165]

どんなわずかな悪徳も無く、生類の利益のため、あらゆる徳性が有る者であれば、——〔たとえ〕ブラフマーであれ、ヴィシュヌであれ、ギリシャ（シヴァ神）であれ、ハリであれ、——そのお方が私の師であり、幸せをもたらす友である。[166]

その方には悪徳が無く、あらゆる徳性が有り、一切智であり、生類の師であるから、私はそのお方に帰依する。[167] (文の借用が終わる)

*

憐れみの眼差しでごらんになって浄福の中に生類をお護りになる方、私はその方に帰依して、喜んで絶えず信奉します。[168]

その方を見れば、清らかな心性をもつ彼らがとても清澄な気持ちになる、その善逝にこそ、私は帰依して信奉します。[169]

三界の生類を息子のように見守っておられる、三界の庇護主であるその方にのみ、私は帰依して信奉します。[170]

深い信仰によってその方に与えた〔布施の〕、その果が〔私の〕悟りの達成となるであろう、かの光輝に充ちた方（仏）にこそ、誠信（バクティ）をもって私は帰依して信奉します。[171]

その方から〔いただく〕教えという不死の甘露を飲んで、すべての有情が歓喜を得ます。法の保持者であられるその方のみ、私は頼って、信奉します。[172]

その方への福德の威力によって三界においてとても幸せなることができる、その善き徳性をお持ちの方にこそ、私はかはずぎ、信奉します。[173]

その方には煩惱が無く、あらゆる善き徳性がお有りになります。その、幸福の光を与える方（仏）にこそ、私は信仰心をもって篤く信奉します。[174]

仏こそ生類の教師、仏こそ生類の導師、仏こそ生類の庇護主、仏こそ牟尼の王です。[175]

それ故、私は全身全霊をもって仏に帰依します。信仰心によって法を得て、〔やがて〕悟りを達成するために、信奉します。[176]

仏に帰依をする者たちは、悪趣に赴くことはありません。罪悪から解放されて、幸せを味わいながら、仏の住まいに赴きます。[177]

善逝の言葉を聞く者たちは、悪趣に赴くことはありません。あらゆる点ですばらしい幸福を味わいながら、スカーヴァティー（極樂）に赴きます。[178]

ローカナータ（菩薩）を信奉する者も、悪趣に赴くことはありません。罪惡から解放されて、安樂を味わいながら、神々の住まいに赴きます。[179]

この三宝（仏・法・僧）は世界に生じた、善き徳性の源です。それに私は帰依して、在家信者として信奉します。[180]

この〔行為〕の福德の異熟により、あらゆる有情を益することを目指す故に、順次に菩提行を満たして、仏の位を私は得たいのです。[181]

その時私は善逝となって、あらゆる有情の幸せを目的とする者として、有情たちを悟りへと安立せしめてから、涅槃を得たいのです。[182]

このように認識して、もしあなたも正法を欲するならば、三宝に帰依をなし、絶えず熱心に信奉しなさい。[183]

その福德の異熟により、常に善趣に〔赴き〕、そして悟りに到達して、仏の位を得ることでしょう。」[184]

— 以上のように〔園丁が〕語ったのを聞くと、その〔異教徒の在家信者〕は十全な気づきを得て、異教徒の教えを捨てて、仏の弟子（声聞）になりました。[185]

その時以来、いつも絶えず正法の聴聞を願う〔彼〕は、寺にやって来て、かの牟尼の王（仏）を信奉しました。[186]

— 以上、師がお教えになったことを私が聴聞したとおりに、そのままお話ししました。王よ、あなたも同様に、絶えず三宝を信奉しなさい。[187]

大王よ、努力して民衆にも同じ様に覚知を得させて、悟りへの道に安立させ、一心に〔彼らを〕護りなさい。[188]

そのことの福德の異熟により、あなたにはいつも至る処で幸せがあるでしょう。次に菩提行を完成させて、仏の位を得ることでしょう。 [189]

— 以上のようにかの阿羅漢が説かれたのを聞いて、かの王は「そういたします」と同意し、同座の者たちと共に、〔その教えを〕喜んで受け入れました。[190]

もし最高の勝者（仏）が説かれたこの『園丁のアヴァダーナ』を聞いて、喜悅の心をもち、信心により、幸せを願って、〔他の人々にそれを〕聞かせてあげるならば、彼らすべてはローカナータ・三垢の穢惡に打ち勝った者・菩薩・大自在（maheśa）として、安樂を味わった後、必ず最後に、浄明の心で最高の勝者の住まい（極樂）に至るであろう。[191]

『園丁アヴァダーナ』（Mālikāvadāna）終わる。第20章。

II-3. Avadānaśataka 第7話 Padmaḥ と SMRAM 第20章の比較

上に梵文テキストと訳を示した SMRAM 第20章 Mālikāvadāna の原話にあたる Avadānaśataka (略号 Avś) 第7話の全訳を次に示したい。そしてその後に、それら二つの梵文テキストを比較し、SMRAM 第20章の作者がどのように Avś 第7話の資料を膨らませて、再話したのかを見てみたい。

アヴァダーナ・シャタカ第7話『蓮』 (Padmaḥ) 和訳

SPEYER, ed., i.36.1-40.16

#1 仏・世尊は、王や大臣や財産家や市民や長者（富商）や隊長や神や龍や夜叉や阿修羅やガルダやキンナラやマホーラガに敬意をもって遇され、重んじられ、尊ばれ、供養されておりました。このように神や龍や夜叉や阿修羅やガルダやキンナラやマホーラガに崇められる仏・世尊は、有名な大福德者であり、衣服・施食・臥具坐具・病氣治療薬という〔四種の〕日常の必要な品を得ており、弟子たちの僧伽と共に、シュラーヴァスティー（舎衛城）にあるジェータ林（祇園）・アナータピンダダ（給孤独長者）の園林に滞在しておりました。

#2 世尊がまだ世に現れていない時、プラセーナジット王は花・焼香・薫香・花環・香油をもって異教徒たちの神格（tīrthikadevatā）に敬意を示しました。しかし世尊が世に現れて、『ダハラ経』⁽³⁶⁾の会話によってプラセーナジット王が教導され、世尊の教えに対して信心を獲得した時、喜悦と満足を生じた〔王〕は、世尊の許に三度来詣して、花・焼香・薫香・花環・香油をもって敬意を示しました。

#3 ある時、或る一人の園丁が一本の新鮮な蓮を手を持って、プラセーナジット王の〔用に資する〕ため、シュラーヴァスティーに入りました。異教徒の在家信者（tīrthikopāsaka）が〔彼を〕見て、尋ねました。「この蓮を売らないか？」— 彼は答えました。「よろしいですよ。」

#4 その者が買おうとすると、ちょうどその時、その場所に家長アナータピンダダがやって来ました。その〔家長〕は彼よりも二倍の値段に上げました。すると相互に値を競り上げていった二人は十万〔金〕にまで値を上げました。

36. この Dahara 経はパーリ聖典では Saṃyuttanikāya の I Sagāthavagga, 3 kosalasamṃyutta, (1) Dahara 経にあたる (PTS edition, SN, I, pp. 68-70)。この経は恐らくコーサラ国王 Pasenaji が釈尊と初めて会見した時の会話を語るものであり、その釈尊との問答の結果、王は仏教の優婆塞になった。この経の蔵訳とその研究については Léon Feer (1891), *Avadānaśataka, Cent légendes (boudhiques), traduites du sanskrit*, Annales du Musée Guimet XVIII, Paris, pp. 42-43 を参照。

#5 その時園丁は考えました。「この家長アナータピンダダは軽はずみなことをする方ではない。堅実な性格をお持ちの方だ。ここで（この購入にあたって）、きつと〔このように行動する〕原因がおありになるに違いない。」

#6 〔こう〕疑念を生じた彼は、異教徒を信仰するその男に尋ねました。「何のためにあなたはこのように値を上げるのですか。」— 彼は答えました。「私は世尊ナーラーヤナ（ヴィシュヌ神）のためです。」— 〔次に〕アナータピンダダは答えました。「私は世尊ブツダのためです。」 園丁は尋ねました。「そのブツダと称する方は何者ですか。」— そこでアナータピンダダは詳しく彼にブツダの徳性を語りました。

#7 すると園丁はアナータピンダダに言いました。「家長よ、私はまさに自ら、かの世尊に敬意を払うことにいたします。」— そこで家長アナータピンダダは園丁を連れて世尊の許に行きました。

#8 園丁がブツダ・世尊にまみえると、偉大な人物がもつ三十二相に飾られ、八十の副次的な特徴（種好）で身体が輝き、〔全身から発する〕一尋の光で飾られており、千個の太陽にまさる光輝をもち、動く宝石の山のように、どこから見ても美しい〔姿〕でした。

#9 〔その姿を〕見てただちに園丁はその蓮を世尊の上に投げました。すると投げられた途端、〔それは〕荷車の車輪の大きさになり、世尊の頭上で〔空中に〕停まりました。

#10 その時かの園丁はその神変を見て、一本の根元を切られた木のように世尊の足下にひれ伏すと、合掌し、思念を強めて、誓願〔の言葉〕を語り始めました。「この善根により、発心により、施物を喜捨することにより、導師のいない、導き手のいない、闇の世界において、ブツダに——救われていない有情たちを救う者、解脱していない者たちを解脱させる者、安息を得ていない者たちに安息を与える者、般涅槃していない者たちを般涅槃させる者に、私はなれますように。」

#11 その時世尊はその園丁がもつ原因の相続の流れと業の相続の流れを知って、微笑みを浮かべました。

#12 これは法性（常法）なのですが、仏・世尊たちが微笑を表す時は、〔必ず〕青・黄・赤・白の光線が口から発せられ、ある光線は下方に行き、ある光線は上方に行きます。下方に行った〔光線たち〕は、等活・黒繩・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・阿鼻（無間）、アルブダ・ニラルブダ・アタタ・ハハヴァ・フフヴァ・青蓮華・紅蓮華・大紅蓮華の諸地獄に行きますが、〔その光線たちは〕熱地獄では冷たいものになって落ち、寒地獄では暖かいものになって落ちます。そのことによってそれらの有情たちの格別な苦しみが和らげられます。彼らは考えます、「君たちよ、いったい私たちはこの〔地獄の〕世界から死没したのだろうか、ああひょっとすると別の世界に生まれたのではないだろうか」と。〔その時〕世尊は彼らに浄信を生じさせるために、化

身（化仏）を發出して派遣します。その化身を見て、彼らは考えます。「君たちよ、私たちはこの〔地獄の〕世界から死没したのでもなく、別の世界に生まれたのでもない。そうではなく、この未だかつて見たことがない一人の有情がおられるが、このお方の威神力のおかげで、私たちがもつ格別な苦しみが鎮められたのだ」と。— 彼らは化身〔の仏〕に対して浄信を得た故に、地獄で苦を受けなければならないその業を滅ぼして、天や人間に再生を得て、そこで真理を受けとる器量がある者となります。

#13 上方に行ったその〔光線たち〕は、四大王・三十三・ヤーマ・兜率・化樂・他化自在へ、梵衆・梵輔・大梵へ、少光・無量光・極光淨へ、少淨・無量淨・遍淨へ、無雲・福生・広果・無煩・無熱・善現・善見・色究竟の諸天へと行き、「無常なり、苦なり、空なり、無我なり」と音声を響かせます。そして〔光線たちにより次の〕二偈が説かれます。

「始めなさい。出離しなさい。仏の教えに専心しなさい。

象が蘆の小屋をなぎ倒すように、死魔の軍隊をなぎ倒しなさい。(7.1)

この〔仏の〕教法と律において怠ることなく行ずる者は、

再生と輪廻を捨てて、苦を終結させることであろう」と。(7.2)

#14 それらの光線は三千大千世界を経巡ってから、世尊へと、次々に背後から追隨します。もし世尊が過去の業を記別しようと欲する場合は、〔光線は〕世尊の背後で消えます。未来の業を記別（予言）しようと欲する場合は、世尊の前で消えます。地獄への誕生を記別しようと欲する場合は、足の裏で消えます。畜生への誕生を記別しようと欲する場合は、踵で消えます。餓鬼への誕生を記別しようと欲する場合は、足の親指で消えます。人間に生まれることを記別しようと欲する場合は、両膝で消えます。〔軍事〕力の転輪王（下級の転輪王）としての王位〔に就くこと〕を記別しようと欲する場合は、左の掌で消えます。転輪王としての王位〔に就くこと〕を記別しようと欲する場合は、右の掌で消えます。天への誕生を記別しようと欲する場合は、臍で消えます。声聞の悟りを記別しようと欲する場合は、口で消えます。独覚の悟りを記別しようと欲する場合は、白毫で消えます。無上正等覚を記別しようと欲する場合は、頂髻で消えます。その時、その光線たちは世尊を三度右遶してから、世尊の頂髻で消えました。

#15 するとその時、具壽アーナンダは合掌して〔仏に次の一詩節をもって〕尋ねました。

「多様で千の色合いがある色とりどりの〔光の〕帯が、御口から輝き出て、

それによってあらゆる方角が遍く照らされました、

あたかも昇りつつある太陽によるかのように。」(7.3)

〔さらに次の〕偈頌を語りました：

「傲慢さをもたず、意気消沈も傲りもない方たち、

世界で最高の原因であられている、[死魔という] 敵を滅ぼした勝者である
仏たちは、原因理由なくして、法螺貝や蓮の繊維のように真っ白である微笑を
お示しになることはありません。(7.4)

英雄よ、知性によってその時機 [の到来] を自ら理解して、
望んでいる聴衆のために、沙門よ、勝者たちの王よ、
堅固で浄らかな最高の言葉によって、聖者中の最勝者よ、
[聴衆に] 生じた疑いを取り除いて下さい。(7.5)

海や山王のように心が不動である、覚者たち、救い主たちは、
理由なく微笑をお示しになることはありません。
なにゆえに心堅固な者たちが微笑を示されたのか、
それをかの大勢の人々が聞きたいと願っております」と。(7.6)

#16 世尊は答えました。「その通り、アーナンダよ、その通りです。無因・無縁の微笑を如来・阿羅漢・正等覚が表すことはありません。

#17 見なさい、アーナンダよ、この園丁は私にこのような供養をしたのです。」
「おっしゃる通りです、大徳よ。」— 「この園丁は、この善根により、発心により、
施物を喜捨することによって、三阿僧祇劫かかって達成される [仏の] 悟りを獲得して、
大悲が染み込んだ六波羅蜜を完成させて、パドモッタラという名の正等覚者になること
でしよう、[仏としての] 十力をそなえ、四無所畏（四種の説法の自信）、三不共念住（三種の特別な『専念の確立』）、大悲をそなえた者として。私に対する浄信の心、それが彼の施物なのです。」

#18 このように世尊は説かれました。感激した彼ら比丘たちは世尊のお説きになった [教え] を喜んで受け入れました。

*

以上がAvś 第7話『蓮』の全訳である。訳にある#番号は、SPEYER校訂のAvśのテキストを私が切り分けて付けた paragraph number であり、対照の便宜のためにテキストを細かく分割して付けた番号である。SMRAM 第20章 Mālikāvādāna (略号 S20) は上述の如く Avś 第7話に基づいているので、Avś に付したその#番号を使って、以下のような Avś 第7話と S20の内容的対応を示す対照表を作成した。

Avś の#番号の後に、その箇所 SPEYER 本の巻・頁・行と段落冒頭の語を（例えば i.36.2-6 buddho bhagavān のように）示し、その次に = を挟んでその段落に内容的に関係する S20 の該当箇所を verse number で挙げる（例えば = S20 vv.5-16 のように）。また記号の○は Avś 7 の内容が S20 の詩形改稿において膨張している箇所を示す。◎は異常に膨張している箇所を示す。

Avadānaśataka (SPEYER)	Mālikāvadāna
#1 i.36.2-6 buddho bhagavān [...]	= S20 vv.5-16 ○
#2 i.36.6-9 yadā bhagavāṃl [...]	= S20 vv.17-18
#3 i.36.10-11 athānyatama [...]	= S20 vv.19-22
#4 i.36.11-13 sa kretukāmo [...]	= S20 vv.23-29 ○
#5 i.36.13-37.2 athārāmikasyaitad [...]	= S20 vv.30-32
#6 i.37.2-5 tena saṃśayajātena [...]	= S20 vv.33-63 ○
#7 i.37.5-7 tata ārāmiko [...]	= S20 vv.64-72
#8 i.37.7-10 dadarśārāmiko [...]	= S20 vv.73-75
#9 i.37.10-11 sahadarśanāc ca [...]	= S20 vv.76-78
#10 i.37.12-16 atha sārāmikas [...]	= S20 vv.79-83
#11 i.37.17-18 atha bhagavāṃs [...]	= S20 v.84
#12 i.37.18-38.10 dharmatā khalu [...]	= S20 vv.85-97
#13 i.38.10-39.4 yā upariṣṭād [...]	= S20 vv.98-103
#14 i.39.5-15 atha tā arcīṣas [...]	= S20 vv.104-105
#15 i.39.15-40.8 athāyūṣmān [...]	= S20 vv.106-110
#16 i.40.9-10 bhagavān āha [...]	= S20 v.111-112
#17 i.40.10-15 paśyasi tvam [...]	= S20 vv.113-121
#18 i.40.16 idam avocad [...]	= S20 vv.122-186 ◎

以上の両者の対照から、S20は、その最初と末尾にある『杵』物語の部分 (vv.1-4と vv.187-191) を除いて、全体的に Avś 第7話『蓮』の原話を種本として再話していることが確認される。

ここで、上記の表において○ (小膨張) と◎ (大膨張) の印をつけた五つの膨張箇所について、説明しよう。

Avś の#1にあたる、S20の小膨張箇所 vv.5-16： Avś の#1は釈尊が或る時舎衛城の祇園精舎に滞在されていたことを語るが、S20では釈尊が祇園精舎で説法をされたその時、聴衆として集まって来た生類の多種多様さが述べられ、説法を聞いた全員が悟りを願う者になったことを語る。これは形式的な章の出だしであり、他の章の冒頭部分と類似する。

Avś の#4にあたる、S20の小膨張箇所 vv.23-29： Avś の#4は、園丁が持つ1本の蓮を手に入れようと、異教徒の在家信者とアナータピンダダ (給孤独長者) が相互に競いあって買値を上げていって、十万まで値が上がったことを簡潔に記す。それに対してS20は、その値を上げる二人の有様をもっと具体的に生き生きと語る。

Avs の#6にあたる、S20の小膨張箇所 vv.33-63： Avs の#6では、異教徒の在家信者とアナータピンダダに対して、なぜ蓮に対してこれほどの値でも買おうとするのかを園丁がそれぞれに、その理由を尋ねる。S20では同じその二人への質疑応答について、特にアナータピンダダが答えた言葉の内容を、大きく膨張させている。すなわち、その蓮の供養の対象であるブツダという人物がいかに偉大な人物であるかを、アナータピンダダは園丁に熱意をこめて詳しく語る。ブツダに関するこのアナータピンダダの熱心な語りは、園丁が自ら釈尊に蓮を供養するように決意することに導く原因となるため、園丁が蓮を売のをやめて自ら釈尊に会ってその蓮を捧げて説法を聞きたいと決意するに至ったことの、話の流れの説得力を増すために、この箇所をS20は膨らませたのであろう。

Avs の#18にあたる、S20の大膨張箇所 vv.122-186： Avs では#17で園丁が釈尊から授記を得たことを語り、それで話は完結する。最後の#18は、定型文の「このように世尊は説かれました。感激したそれらの比丘たちは世尊のお説きになった [教え] を喜んで受け入れました」という文をもって、この話を締め括るにすぎない。それに対して、S20はそのようなかたちで話を終えずに、Avs には無かった新たな話の展開を付け加える。園丁が仏教徒になった後、園丁のもとに異教徒の在家信者がやって来て、園丁を非難する。このようにS20では異教徒の在家信者が再登場し、その信者と園丁の間に長い会話がなされる。園丁は異教徒の信者に対して、いかに仏・釈尊のほうがヒन्दウー教の神々よりも勝れているかを説法するが、その説法の中において、Śaṅkarasvāmin の Devātīśayastotra (= Devatāvimarśastuti) の20の詩節が利用されている。園丁のその説法の結果、その異教徒が仏教に改宗したことを物語って、S20は終わる。このように、釈尊の説法の後起こった別の出来事によって話の最後が大きく膨らんだかたちになっている。

第二部

ネパールの梵文仏伝の研究：

Tathāgatajanmāvadānamālā 第14章

『[菩薩が] 技芸と一切の学問を示しヤショーダラー 女宝と夫婦になる品』 後半部分

昨年に発行された『南アジア古典学』14号にネパールの仏伝アヴァダーナマーラーである TJAM 第14章の前半部分（第1～244偈）の校訂・翻訳を発表したので、今回はその続きとして、第14章の後半部分（第245～383偈）の校訂・翻訳を示したい。

1. Tathāgatajanmāvadānamālā 第14章後半の校訂

略号 A = NGMPP A 123/5 [a ms of TJAM, = BauDV 51(87)]
B = NGMPP B100/2 [a ms of TJAM, = BSP ca266(3-14)]
D = NGMPP D43/4-44/1 (rephotograph = E 1321/2)
H = HOKAZONO's Lalitavistara edition, 1994
L = LEFMANN's Lalitavistara edition, 1902
TJAM = Tathāgatajanmāvadānamālā (= Padya-Lalitavistara)

Tathāgatajanmāvadānamālā 14

Śilpakalāsarvavidyāsaṃdarśanayaśodharāstrīratnasamāgamaparivarta

A 82a1-93b4; B 122a3-139b4; D 111b6-128a9⁽³⁷⁾

以下のテキスト中の [] の数字は A 写本の葉を示し、例えば [82b] は A 写本の第82葉の裏面であることを示す。また TJAM テキストが Lalitavistara の内容と密接に関係する箇所では、その詩節の右側に ~ という「類似」を意味する記号を使って、Lefmann (略号 L) と外蘭幸一 (略号

37. 本章のテキスト校訂においては主に A 写本と B 写本を用いたが、A 写本 (Jayamuni 筆写写本) が底本となる。B 写本は A 写本から派生した粗悪な伝承本であると思われる。また B 写本以外に、必要に応じて D 写本 (系統的に B と同じであるがもっと粗悪な伝本) も参照した。

H) の両方の Lalitavistara 出版本³⁸⁾の参照すべき箇所を示した。例えば H 552(vs.)1 とあるのは外蘭本の 552頁の第1詩節をさす。(vs.) は詩節を意味する。また H 550.3-4 とある場合は、散文の箇所であり、外蘭本の550頁3-4行を意味する。

(The second half of the chapter 14)

[89b1]{133a8} tato 'pi taiḥ kumāraiḥ sa kumāro laṅghanādiṣu /
krīdāsu plavite vāpi javite 'pi jayaṃ yayau // 245 ≈ L 151.17-18; H 582.9-10.
etatsarvān samālokya sarve devāḥ pramoditāḥ /
gagaṇasthāḥ praṇatvainaṃ punar evaṃ babhāṣire // 246
dānaśīlakṣamāvīryadhyānaprajñāntapāragah /
caturbrahmasamācāro bhadrāśrīsadguṇākaraḥ // 247
bodhisattvo mahābhijñāḥ sarvasattvahitārthabhṛt /
nirmalapariśuddhātmā suviśuddhatrimaṇḍalaḥ // 248
etān eva guṇān asya grhāśritasya sanmateḥ /
yūyaṃ sarve samālokya vismayaṃ samupāgatāḥ // 249
ayaṃ hi kṣaṇamātreṇa daśadikṣu samāsthitān /
sarvān buddhān samabhyarcya praṇatvā ca samāvrajat // 250
buddhakṣetreṣu sarveṣu sarvadravayābhivarṣaṇaiḥ /
sarvāṃl lokān yathākāmaṃ saṃtoṣyāśu samāsarat // 251
asyāgatim gatim cāpi na yūyaṃ hi prajānatha /
evam ayaṃ mahāsattvo bodhisattvaḥ samṛddhimān // 252
asyātra sadṛśaḥ ko 'sti tad bhajadhvaṃ sadā mudā /
ye bhajanti mudā hy asya na te gacchanti durgatim // 253
ayaṃ duṣṭān hi nirjitya sarvān sattvān prabodhayan /
bodhimārge pratiṣṭhāpya prācārayet susaṃvare // 254
ity evaṃ gaditaṃ devair niśamya te nṛpādayaḥ /
sarvalokā mudā tasya bhajanotsāhino 'bhavan // 255
evaṃ sarvārthasiddho 'sau bodhisattvo maharddhikaḥ /
krīdaneṣv api sarvatra viśiṣṭo jayitā babhau // 256
tataḥ sarve 'pi śākyās te madamānātigarvitāḥ /

38. S. Lefmann (1902, 1908): *Lalita Vistara. Leben und Lehre des Śākya-buddha, erster Teil: Text, 1902; zweiter Teil: Varianten-, Metren- und Wörterverzeichnis, 1908, Halle.* 外蘭幸一 (1994): 『ラリタヴィスタラの研究 上巻』、大東出版社。

īrṣyāhatāśayās tatra sabhāyām evam abruvan // 257	
yad viśiṣṭaḥ kumāro 'yaṃ śāstraśilpakalāsv api /	
yuddhe 'sya balavīryāni draṣṭum icchāmahe 'dhunā // 258	≈ L 152.8-9; H 584.2-3.
iti taduktam ākarṇya bodhisattvaḥ sa sanmatih /	
sarvāñ chākyakumārān tān saṃpaśyann evam abravīt // 259	
yūyaṃ sarve mayā sārddham yuddham kartuṃ yadīcchatha /	
tad yuṣmābhiḥ sahaiko 'haṃ sarvair yoddhuṃ samutsahe // 260	
iti taduktam ākarṇya sarve śākyakumā[90a]rakāḥ /	
tenaikena kumāreṇa saha yoddhuṃ samutthitāḥ // 261	
tatraikānte suvīro 'sau bodhisattvaḥ samāsthitaḥ /	
sarve śākyakumārās ta ekatra samupāśrayan // 262	≈ L 152.9-11; H 584.3-5.
tatrādau nanda ānanda ubhāv abhigatau yudhi /	
pāṇinā bodhisattvena *sprṣṭāv eva nipetatuḥ // 263	≈ L 152.11-14; H 584.5-8.
tad dṛṣṭvā sa mahāmānī devadatto 'tigarvitaḥ /	
tridhā pradakṣiṇīkṛtya sarvaṃ tadrāṅgamaṇḍalam // 264	≈ L 152.14-16; H 584.8-11.
niśītāsīm *samuddhārya bodhisattvasya saṃmukham /	
vegenābhyapatann agre bhrūbhaṅgavikṛtānanaḥ // 265	≈ L 152.16-17; H 584.11.
taṃ dṛṣṭvā sa mahāsattvaḥ kumāraḥ saṃsmitānanaḥ /	
atrānta eva saṃpaśyan ḡhītvā dakṣapāṇinā // 266	≈ L 152.17-19; H 584.11-13.
salīlaṃ gagaṇe traidham parivartya mahītale /	
nikṣīpya maitracittena nirmānavadanaṃ vyadhāt // 267	≈ L 152.17-19; H 584.11-13.
na tasya māninaḥ kāye kiñcid bādham ajāyata /	
bodhisattvānubhāvena sukhataivābhyajāyata // 268	≈ L 152.19-20; H 584.13-15.
tataḥ sa bodhisattvas tān sarvāñ chākyakumārakān /	
saṃvīkṣyābhimukhaṃ sthītvā vihasann evam abravīt // 269	≈ L 152.21; H 584.16.
alam evaṃvivādena yadi yoddhuṃ samicchatha /	
sarva ekībhavanto 'tra yūyam āgacchata drutam // 270	≈ L 152.21-22; H 584.16-17.
iti tenoditaṃ śrutvā sarve te śastrapāṇayaḥ /	
saṃmukhaṃ bodhisattvasya prābhyapatan pragarvitāḥ // 271	≈ L 153.1; H 584.16.
tān sarvān sa mahāsattvo samīkṣya dakṣapāṇinā /	
ḡhītvā maitracittena nirmānān amitān (?) vyadhāt // 272	
evaṃ sarve kumārās te bodhisattvena pāṇinā /	
*sprṣṭā evātimohāndhā nipetur bhūtale kramāt // 273	≈ L 153.1-3; H 584.18-20.
tat samīkṣya surāḥ sarve gagaṇasthāḥ pramoditāḥ /	

hīhīkāraṃ pramuñcanto taṃ praṇatvaivam abruvan // 274	≈ L 153.4-6; H 584.21-23.
yāvanto 'tra mahāmāllā mahāvīryabalotkaṭāḥ /	
te sarve 'nena saṃsprṣṭā nīpateyuḥ pramohitāḥ // 275	≈ L 153.7-10; H 585-586(vs.)29.
mervādīn parvatān sarvān kumāro vīryavān ayam /	
gṛhītvā pāṇināmardya kuryād rajomayān drutam // 276	≈ L 153.12-14; H 586(vs.)30.
eṣa maitrabalenaiva jītvā sarvān kutīrthikān /	
sarvān sattvān chube dharme pracārayet prabodhayan // 277	
sarvajagaddhitārthena [90b] jītvā mārān sudurjanān /	
arhan saṃbodhim āsādyā saṃbuddho 'pi bhaviṣyati // 278	≈ L 153.15-18; H 586(vs.)31.
ity uktvā te surāḥ sarve divyapuṣpaparavaṣṇaiḥ /	
bodhisattvaṃ tam arcītvā divi gatvaivam ūcīre // 279	
tad dṛṣṭvā manujāḥ sarve śuddhodanādayo nṛpāḥ /	
samantriṇanapurāś ca prābhyanandan savismayāḥ // 280	
atha śākyamaheśākhyo daṇḍapāṇī vicakṣaṇaḥ /	
sarvān chākyakumārāṃs tān samāmantryaivam abravīt // 281	≈ L 153.20; H 586.12.
dṛṣṭam asya kumārasya balavīryaparākramam /	
tāvad yūyam iṣukṣepe darśayata parākramam // 282	≈ L 153.20-21; H 586.12-13.
iti tenoditam śrutvā sarve te śākyanandanāḥ /	
evaṃ khalv ity agarjanta madamānātigarvitāḥ // 283	
tatra dvikrośayor bherī lohamayī mahattarī /	
ānandasya mahābuddher iṣulakṣā nidhāpitā // 284	≈ L 153.21-154.1; H 586.14.
tathā ca devadattasya yojane sthāpitābhavat /	
tathā sundaranandasya ṣaṭṣu krośeṣu ropitā // 285	≈ L 154.1-3; H 586.15-16.
tathā saṃsthāpitā bherī daṇḍapāṇer dviyojane /	
tathā ca bodhisattvasya daśakrośeṣu ropitā // 286	≈ L 154.3-5; H 586.16-18.
tadante saptatālā ca saṃsthāpitā mahattarī /	
ayomayā varāhasya pratimā yantrasaṃyutā // 287	≈ L 154.5-6; H 586.18-19.
tatrānando dhanur dhṛtvā prathamam bāṇam akṣīpat /	
tena prabheditā bherī dvikrośasthaiva nāparā // 288	≈ L 154.6-7; H 586.20-21.
tato dhanuḥ samādāya devadatto 'kṣīpac charam /	
tena prabheditā bherī yojanasthaiva nāparā // 289	≈ L 154.7-8; H 586.21-22.
tataḥ sundaranando 'pi dhanur dhṛtvākṣīpac charam /	
tena prabheditā bherī ṣaṭkrośasthaiva nāparā // 290	≈ L 154.8-9; H 586.22-23.
tato dhanuḥ samādāya daṇḍabhṛd akṣīpac charam /	

tena dviyojanasthaiva bherī bhinnā na cāparā // 291	≈ L 154.9-10; H 586.23-24.
tataḥ sarvārthasiddho 'sau kumāraḥ saṁsmitānaḥ / taddhanuḥ svayam ādāya prāropayitum ārabhat // 292	≈ L 154.10-11; H 586.24-25.
tad gṛhītvā kumāreṇa bodhisattvena nāmitam / saśabdham abhavaḥ chinnaṁ tato 'nyac *ca tathābhavat // 293	≈ L 154.10-11; H 586.24-25.
evaṁ yad yad dhanus tasya kumārasyoṇāmitam / tat tat tena kumāreṇa nāmite 'bhūt trikhaṇḍitam // 294	≈ L 154.10-11; H 586.24-25.
tataḥ sa[91a]rvārthasiddho 'sau bodhisattvo nṛpādhipam / janakam taṁ samālokyā vihasann evam abravīt // 295	≈ L 154.12; H 586.25.
astīha nagare tāta dhanur anyan mahattaram / dṛḍhataṁ mahāsāraṁ yan mayāropitaṁ sahet // 296	≈ L 154.12-13; H 586.25-588.1.
iti tenoditaṁ śrutvā śuddhodano narādhipaḥ / tam ātmajaṁ mahāsattvaṁ saṁpaśyann evam ādiśat // 297	≈ L 154.13; H 588.1-2.
asti putra kumārātra pitāmahasya te dhanuḥ / devakule pratiṣṭhāpya gandhamālyaiḥ sadārcitam // 298	≈ L 154.13-16; H 588.2-5.
iti pitroditaṁ śrutvā kumāraḥ sasmitānaḥ / pitaraṁ taṁ mahārājaṁ saṁpaśyann evam abravīt // 299	≈ L 154.17; H 588.6.
ānīyatāṁ mamāgre tad dhanuḥ siṁhahanor iha / aham āroṇaṁ kṛtvā pūrayiṣyāmi bhūpate // 300	≈ L 154.17; H 588.6.
iti taduktam ākarṇya śuddhodano narādhipaḥ / sahasā balino lokān samāmantryaivam ādiśat // 301	
bhavantaḥ sahasā gatvā devakule 'rcitaṁ dhanuḥ / ānīyāsyā kumārasya samupānayatāgrataḥ // 302	
iti rājñā samupādiṣṭaṁ śrutvā te balino janāḥ / sahasā devakule gatvā taddhanuḥ samupānayan // 303	≈ L 154.18; H 588.7.
tad dṛṣṭvā samupānītaṁ sarve te śākyanandanāḥ / samutthāya samādāya prāropayitum udyataḥ // 304	≈ L 154.18-20; H 588.7-9.
pareṇāpi prayatnena vyāyacchantaś cirād api / āropitum na śekus te tat saṁpūrayitum kutaḥ // 305	≈ L 154.18-20; H 588.7-9.
tato dṛṣṭvā mahāmānī daṇḍapāṇiḥ samutthitaḥ / tad dhanuḥ sahasotthāpya prāropayitum udyataḥ // 306	≈ L 154.20-22; H 588.9-11.
pareṇāpi prayatnena vyāyacchann api tad dhanuḥ / utthāpyāropitum naiva śeke pūrayitum kutaḥ // 307	≈ L 154.22; H 588.11.
tataḥ sarvārthasiddho 'sau bodhisattvaḥ samīkṣya tat /	

āsanāsīna evāśu grhītvā vāmapāninā /	
dakṣaikāṅgulināropya saśabdāṃ samapūrayat // 308	≈ L 154.22-155.2; H 588.12-14.
tadāropanirghoṣaṃ śrutvā sarve vikampitāḥ /	
kasyaiśa ghoṣa udbhūta ity aprcchan parasparam // 309	≈ L 155.3-5; H 588.14-16.
siddhārthena kumāreṇa nūnam āropitaṃ dhanuḥ /	
tasyāyaṃ śabda ity uktvā te tad draṣṭuṃ mudācāran // 310	≈ L 155.5-6; H 588.16-18.
tad dr̥ṣṭvā gagaṇāsīnā devāḥ sarve pra[91b]vismayāḥ /	
hīhīkāraṃ mahānādaṃ muñcanta evaṃ abruvan // 311	≈ L 155.6-9; H 588.18-20.
yathānena suvīryeṇa dhanuḥ saṃpūritaṃ laghu /	
tathā mārān vijitvābhiprāyaṃ saṃpūrayiṣyate // 312	≈ L 155.10-13; H 588(vs)32.
tat samīkṣya nīśamyāpi sarve lokā nṛpādayaḥ /	
sacitraharṣitasvāntāḥ prābhyanandan prasādītāḥ // 313	
tataḥ sarvārthasiddho 'sau kumāra āsanotthitaḥ /	
dhr̥tvā dhanur iṣukṣepaṃ cakāra mānasaṃ yathā // 314	≈ L 155.14-15; H 590.1-2.
tatprakṣipta iṣur bhittvā sarvā bherīr api drutam /	
daśakrośasthitāṃ bherīm̄ saptatālāṃ nirantaram // 315	≈ L 155.15-17; H 590.2-4.
varāhapratimāṃ cāpi yantrayuktāṃ ayomayīm /	
bhittvā bhūmipraviṣṭo 'bhūt tatra kūpaḥ pravartitaḥ // 316	≈ L 155.17-19; H 590.4-6.
adyāpi suprasiddho 'sti śarakūpa iti smṛtaḥ /	
parisuddhāmbusampūrṇo mahātīrtho virājitaḥ // 317	≈ L 155.19-20; H 590.6-8.
tat samīkṣya nīśamyāpi śuddhodanādayo nṛpāḥ /	
lokā śākyakumārās te sarve 'tivismayaṃ yayuḥ // 318	
tataḥ sarve 'pi te śākyā vismayākṛāntamānasāḥ /	
hīhīkāraṃ pramuñcanto mitho vīkṣyaivam abruvan // 319	≈ L 155.20-22; H 590.8-10.
āścaryaṃ yad anenaiva na nāma yogyatā kṛtā /	
īdṛkṣīlpakalāpaś ca sarvā vidyāḥ pradarsītāḥ // 320	≈ L 155.22-156.1; H 590.10-11.
tac chrutvā gagaṇasthās te devāḥ śuddhodanaṃ nṛpam /	
saśākyajanakāyaṃ taṃ samāmantryaivam abruvan // 321	≈ L 156.1-2; H 590.11-12.
kim atra vismayaṃ rājan yad eṣa bodhimaṇḍape /	
pūrvabuddhāsanāsīno grhītvā śamathaṃ dhanuḥ // 322	≈ L 156.2-5; H 590(vs)33ab.
śūnyanairātmyabāṇena hatvā kleśān mahadripūn /	
dr̥ṣṭijālaṃ ca vicchīdyā jitvā mārāgaṇān api // 323	≈ L 156.5-6; H 590(vs)33bc.
aśokāṃ virajāṃ bhadraṃ saddharmaśṛṅguṇākaraṃ /	
sambodhim api saṃprāpya saugataṃ padam āpsyate // 324	≈ L 156.7; H 590(vs)33d.

ity uktvā te 'marāḥ sarve bodhisattvaṃ tam ādarāt /
 divyapuṣpaiḥ samabhyarcya prākraman svālayaṃ mudā // 325 ≈ L 156.8-9; H 590.19-20.
 tac chrutvātiprasannās te sarve lokā nṛpādayaḥ /
 bodhisattvaṃ tam abhyarcya praṇatvā prābhyanandayan // 326
 evaṃ sarvārthasiddho 'sau kumāraḥ sadguṇāśrayaḥ /
 bo[92a]dhisattvo mahāsattvaḥ pratisaṃvit kṛtī sudhīḥ // 327
 sarvalipīmahābhijñāḥ sarvaśāstravicakṣaṇaḥ /
 sarvaśilpakalāvidyāvidhivijñānanasamatīḥ // 328
 sarvāstraśastravidyāsu sarvayuddheṣu vikramī /
 sarvalakṣaṇavid vijñāḥ sarvarutārthakovidāḥ // 329
 sarvasaṃgītivādyeṣu nṛtyeṣv api viśāradaḥ /
 dhātulakṣaṇavid vijñāḥ sarvaratnaviśeṣavit // 330
 dūṣyapaṭṭādivastrānām viśeṣavin mahāsudhīḥ /
 sarvacitravidhānajñāḥ sarvaraṅgavidhānavit // 331
 mālāgranthanavid vijñāḥ sarvasaurabhyayuktivit /
 reṇusaṃkhyāpramāṇādigaṇaṇāsu vicakṣaṇaḥ // 332
 svapnādhyāyavicārajñāḥ sarvavedāntapāragaḥ /
 jyotirbhātikavaidyādihitavidyāvidhānavit // 333
 tripiṭakamahāyānasūtrāvadānavit sudhīḥ /
 pratisaṃvidguṇaśrīmāñ caturbrahmavihārikaḥ // 334
 smṛtimān sanmatir dhīraḥ saddharmasādhanodyataḥ /
 dānaśilakṣamāvīryadhyānaprajñābhipāragaḥ // 335
 evaṃ sarvāsu vidyāsu devamānuṣyakāsv api /
 lokottarāsu saṃbodhisamāsiddhisādhanāsv api // 336 ≈ L 157.1-2; H 592.14-15.
 viśiṣṭo nirjayan sarvān kalāvidyābhimāninaḥ /
 vijayaśrīsamāśliṣṭo mañjuśrīvad vyarājata // 337 ≈ L 157.1-2; H 592.14-15.
 taṃ sarvajayinaṃ vīkṣya daṇḍapāṇiḥ prasāditaḥ /
 kanyāṃ svātmañam gopāṃ upanāmyaivam abravīt // 338 ≈ L 157.3-4; H 592.16-17.
 dhanyo 'si tvam mahāsattva sarvavidyāntapāragaḥ /
 bhadrāśrīsadguṇādhānaḥ sarvasattvahitārthabhṛt // 339
 tvam eva hi mahābhijñāḥ sarvavidyāvicakṣaṇaḥ /
 tat kaścit tvatsamo nāsti kuto 'dhiko bhavālaye // 340
 mamāpi duhitā kanyā sarvavidyāvicakṣaṇā /
 bhadrāśrīsadguṇārāmā satyasaddharmasaṃratā // 341

tad iyaṃ me sutā yogyā bhavatsaddharmasādhane /
 subhadrāṅgī samācārā satī dharmānucāriṇī // 342
 tad bhavate prayacchāmi kanyāṃ gopāṃ imāṃ aham /
 bhavān enāṃ samādāya saṃmānayatū māṃ prabho // 343
 iti saṃ[92b]prārthya śākya 'sau daṇḍapāṇir yaśodharāṃ /
 tasmai sarvārthasiddhāya saṃkalpya pradadau sutām // 344
 tena saṃkalpitāṃ kanyāṃ tāṃ gopāṃ śrīnibhāṃ varāṃ /
 dṛṣtvā śuddhodano rājā prasāditaḥ samagrahīt // 345 ≈ L 157.4-5; H 592.17-18.
 tataḥ sarvārthasiddho 'sau kumāraḥ kanyayā tayā /
 saha rathe samāruhya mahotsāhaiḥ pure yayau // 346
 tatra saṃvīkṣyamāṇo 'sau sarvair lokaiḥ pramoditaiḥ /
 krameṇa prākraman rājakulāntikam upāyayau // 347
 avatīrya rathāt tatra praviśya gopayā saha /
 nijālaye samāśritya tasthau saṃbodhimānasah // 348
 anujñayā tato rājñāḥ purohito yathāvidhi /
 abhiśiñcyākarot tau dvau kuladharmānusādhakau // 349
 tataḥ sarve 'pi śākyaś ca svāṃ svāṃ putrīṃ subhadrikāṃ /
 kanyāṃ tasmai kumārāya saṃkalpya pradadur mudā // 350
 evam anye 'pi rājānaḥ svasvātmajāṃ kumārikāṃ /
 tasmai sarvārthasiddhāya saṃkalpya pradadur mudā // 351
 tāḥ sarvā api kanyāḥ sa purohito yathāvidhi /
 abhiśiñcyā vyadhāt tasya bhartur dharmānucārikāḥ // 352
 tā api sakalāḥ kanyā antaḥpure praveśitāḥ /
 tāsāṃ pradhānikā gopā bodhisattvasya supriyā // 353 ≈ L 157.8-9; H 594.1-2.
 tatra sā mahiṣī tasya kumārasya satī priyā /
 anācchādya mukhaṃ sarvān samīkṣya sarvato 'carat // 354 ≈ L 157.10-11; H 594.3-4.
 dṛṣtvaiyaṃ saṃcarantīṃ tām anāvṛtānanāṃ satīm /
 nṛpādāyā janāḥ sarve vismitā evam ūcire // 355 ≈ L 157.11-12; H 594.4-5.
 navā hi vadhukā nāma pratilīnā vṛtānanā /
 iyaṃ tu vivṛtāsyai va paśyantī prācaraj janān // 356 ≈ L 157.12-13; H 594.5-6.
 evaṃ tatkathitaṃ śrutvā kanyakā sā yaśodharā /
 sarvasyāntarjanasyāgre sthitvaivaṃ samupālapat // 357 ≈ L 157.13-14; H 594.6-7.
 pariśuddhāśayā hy āryā vivṛtāsyāpi śobhate /
 maṇiratnaṃ dhvajāgre vā pratiṣṭhitam praśobhitam // 358 ≈ L 157.15-16; H 594(vs)34.

gacchan vai śobhate hy ārya āgacchann api śobhate / sthito vāpi niṣaṅṅo 'pi sarvatrāryātiśobhate // 359	≈ L 157.17-18; H 594(vs)35.
kathayan śobhate cāryas tūṣṇībhū[93a]to 'pi śobhate / kalavīṅko yathā pakṣī darśanena svareṇa vā // 360	≈ L 157.19-20; H 594(vs)36.
kuśacīranivasto vā mandacailaḥ kṛśāśrayaḥ / śobhate svānubhāvena guṇavān guṇabhūṣitaḥ // 361	≈ L 157.21-22; H 594(vs)37.
sarveṇa śobhate hy āryo yasya pāpaṃ na vidyate / kiyaḍ vibhūṣito bālaḥ pāpakārī na śobhate // 362	≈ L 158.1-2; H 594(vs)38.
yeṣāṃ ca hṛdaye pāpaṃ mukhe 'timadhurā giraḥ / viṣakumbho 'mṛtotsikto duḥspṛśyās te tathā narāḥ // 363	≈ L 158.3-6; H 594(vs)39.
yeṣāṃ ca hṛdayaṃ śuddhaṃ saumyaṃ tīrthāmbunirmalam / teṣāṃ eva sumāṅgalyaṃ darśanaṃ sparśanaṃ sadā // 364	≈ L 158.7-10; H 596(vs)40.
yais tyaktvā pāpamitrāṇi sanmitraṃ sevyaḥ sadā / tyaktvā pāparatiṃ ye ca ramanti sadvṛṣe sadā // 365	≈ L 158.11-13; H 596(vs)41abc.
teṣāṃ eva sadā bhadrāṃ darśane sparśane khalu / śrutvāpi vacanaṃ teṣāṃ sāphalyaṃ bhavacāraṇe // 366	≈ L 158.14; H 596(vs)41d.
yeṣu saṃvṛtakāyās ca saṃyamabhūṣaṅśrayāḥ / yeṣu saṃvṛtavākyaś ca satyadharmārthasaṃyātāḥ // 367	≈ L 158.15-16; H 596(vs)42ab.
guptendriyāḥ subhadrāṃśā suprasannāśayāḥ sadā / teṣāṃ śuddhātmanāṃ vaktraṃ praticchādyā kim eva hi // 368	≈ L 158.17-18; H 596(vs)42cd.
yeṣāṃ na śuddhyate cittaṃ lajjāpi vidyate na hi / teṣāṃ vastrasaḥsair vā praticchādyāpi kiṃ mukham // 369	≈ L 158.19-22; H 596(vs)43.
yā viśuddhāśayāḥ sādhyo guptendriyāḥ pativratāḥ / ravīndusadrśās tāsāṃ kim eva mukhachādanam // 370	≈ L 159.1-4; H 596(vs)44.
jānanti munayaḥ sarve pañcābhijñāḥ surā api / mama cittaṃ suśīlāmbuprakṣālanasunirmalam // 371	≈ L 159.6-9; H 596(vs)45.
yato me na vidyate rāgo' niasmin puruṣe kila / ato 'haṃ vāsasā vaktraṃ anācchādyā mudā care // 372	
iti gopāsamākhyātaṃ śrutvā śuddhodano nṛpaḥ / sajanaḥ suprasannātmā prānvamodat prabodhitaḥ // 373	≈ L 159.10-11; H 598.1-2.
tataḥ sa pṛthivīnāthaḥ saṃpāśyaṃs tāṃ vadhūṃ mudā / dūṣyavastraiḥ samācchādyā sarvālaṃkaraṇair api // 374	≈ L 159.11-14; H 598.2-5.
maṇḍayitvā subhadrāṅgīm tāṃ gopāṃ śrīguṇāśrayām / suprabuddhamukhāmbhojaḥ saṃpāśyann evam abravīt // 375	≈ L 159.14; H 598.5-6.

yathātmajāḥ kumāro me bhadrāśrīsadguṇāśrayaḥ /
 tatheyaṃ me vadhūkanyā satyaśīlaguṇāśrayā // 376 ≈ L 159.15; H 598(vs)46ab.
 nūnaṃ me daivayogena śuddhasattvāv imāv ubhau /
 samāgatau yathā [93b] sarpisarpimaṇḍau rasottamau // 377 ≈ L 159.16; H 598(vs)46cd.
 ity ānuśaṃsanaṃ kṛtvā tayor vadhūkumārayoḥ /
 pitā śuddhosano rājā prānvamodat sabāndhavaḥ // 378
 evaṃ strīratnasampanno bhadrāśrīsadguṇodadhiḥ /
 bodhisattvo mahāsattvaḥ kumāraḥ so 'bhyarājata // 379
 iti me guruṇādiṣṭaṃ mayedānīm tathocyate /
 śrutvāśoka tvayāpy etat kartavyābhyanumodanā // 380
 śrutvedaṃ ye 'numodanti bodhisattvasubhāṣitam /
 te sarve vimalātmāno bhaveyur bodhicāriṇaḥ // 381
 bodhisattvā mahāsattvā bhadrāśrīsadguṇāśrayāḥ /
 sarvasattvahiṭaṃ kṛtvā prānte yāyur jinālayam // 382
 iti tenārhanādiṣṭaṃ śrutvāśoko mahīpatiḥ /
 tatheti prativijñāpya prābhyanandat sapārśadaḥ // 383

// iti śīlpakalāsarvavidyāsaṃdarśanayaśodharāstrīratnasamāgamaparivarto nāma catur-
 daśo 'dhyāyaḥ samāptaḥ //

Apparatus criticus

- 245c jayaṃ] A: jaya B.
 246b sarve] A: sarva B.
 247c °samācāro] A: °samācārā B.
 251c sarvāṃ] corr.: sarvāl AB.
 253a sadṛśaḥ ko] A: sadṛśa kā B.
 253c hy asya] A: kṣyasya B.
 253d gacchanti] A: vāṃchanti B.
 254a duṣṭān] A: duṣṭā B.
 254b satvān prabodhayan] A: satvā prabodhan B.
 254d susaṃvare] A: susaṃvaraṃ B.
 256d jayitā] corr.: jayito A: jayano B.
 257b °ātigarvitāḥ] corr.: °ābhigarvitāḥ A: °ābhigarbhitāḥ.
 259c sarvāñ chākyakumārān] A: sarvās cākyakumārās B.

- 260c tad yuṣmābhiḥ sahaiko] A: tada yuṣmābhi sahaikā B.
- 260d sarvair yoddhuṃ] A: sarver yoddhaṃ B.
- 261ab ākarṇya sarve] A: ākarṇā B.
- 261b °kumārakāḥ] A: °kumārakā B.
- 261c tenaikenā] A: tanekena B.
- 262b bodhisatvaḥ] A: bodhisatvāḥ B.
- 263d *sprṣṭāv] ex conī (cf. Lalitavistara): prṣṭāv A B.
- 264b tigarvitaḥ] A: bhigarvitaḥ B.
- 265a *samuddhārya] ex conī: samuddhāmya (?samudvāmya?) A: samudvāsya B.
- 265c °ābhyapatann] A: °ātyapatant B.
- 266b saṃsmitā°] A: sasmitā° B.
- 266c atrān[t]a eva] A: atrāntar eva B D.
- 267b parivarttya] A: parivarttā B.
- 267d °vadanam] A: °vedanam B.
- 268b kiñcid] A: kiñci B || ajāyata] A: ajāyate B.
- 268d °ābhyajāyata] A: °ābhyamjāyate B.
- 269b sarvāñ chākya°] A: sarvās cākya° B.
- 270b yoddhuṃ samicchatha] A: yoddhu samicchathaṃ.
- 270c ekībhavanto] A: ekībhavantro B.
- 271a tenoditaṃ] A: tenodita B.
- 272d nirmānān amitān] A(post corr. int. lin.)⁽³⁹⁾: nirmānān ami A(ante corr.): nirmāṇān amitān B.
- 273c *sprṣṭā] ex conī: prṣṭā A B || evātimo°] A(post.corr.): evābhimo° A(post.ante): evāsimo° B.
- 274a surāḥ] A: surā B.
- 274b gagaṇasthāḥ] A: gagaṇāsthāḥ B.
- 274cd pramuñcanto taṃ] A: om. B.
- 275a mahāmallā] A: mahāsatvo B.
- 276a parvatān] A: pavaṃtān B.
- 276d rajomayān] A: rajomayā B.
- 277c satvāñ chube] A: satvās chube B.
- 278b mārān] A: mānān B.
- 279c tam arcitvā] A: nam abhyarcya B.
- 279d ūcīre] A: ucīre B.

39. 記号の説明として、A(ante corr.)は「A写本において写経生が書き直す前に書いた読み」、A(post corr.)は「A写本において写経生が書き直した後の読み」、A(post corr. marg.)は「A写本の余白に修正として記された読み」、A(post corr. int. lin.)は「A写本の行間に修正として記された読み」を意味する。

- 280b śuddhodanādayo] A: śuddhodanodayā B.
- 281c chākyakumārāṃs] A: chākyakumārās B.
- 282c yūyam] A: yuyam B.
- 283c ity agarjanta] A: itāgarjante B.
- 284a dvikrośayor] A: dvikrośeyā B.
- 284b lohamayī maha°] A: lohamaha B.
- 284d iṣulakṣā] A: iṣulakṣā B.
- 285b yojane] A: yojana B.
- 286b daṇḍapāṇer] A: daṇḍapāṇe B.
- 287a saptatālā] A: saptatālo B.
- 287c ayomayā] A: ayomayyā B.
- 289b charaṃ] A: charāṃ B.
- 290a sundara°] A: sundaraṃ B.
- 290d ṣaṭkrośa°] A: ṣakrośa B.
- 291b charaṃ] A: kṣaraṃ B.
- 291d na cāparā] A: na vāparā B.
- 292d ārabhat] A: ārateta B.
- 293b nāmitaṃ] A: nāmite B.
- 293d tato 'nyac *ca] ex conī: tato nya[dg]a A: tato nyadyat B: tato nyadya D.
- 294b °panāmitaṃ] A: °pamāmitaṃ B.
- 294c tat tat] A: tatas B.
- 294d bhūt trikha°] A: bhūtrikha° B.
- 296d mayāropitaṃ sahet] A: mamāropitaṃ mahat B.
- 298a kumārātra] A: kumārātre B.
- 298d sadārcitaṃ] A: samarcitaṃ B.
- 300a ānīyatāṃ] A: ānīyaitāṃ B.
- 300b °hanor iha] A: °hanor ihariha B.
- 301a ākarṇṇya] A: ākarṇā B.
- 302a bhavantaḥ] A: bhavantaṃ B.
- 302b devakule] A: devakula B.
- 302d °ānayatāgrataḥ] A: °ānīyatāgrataḥ B.
- 303b te] A: re B.
- 303c devakule] A: devakūlaṃ B.
- 303d taddhanuḥ] A: teddhanuḥ B || °upānayan] A: °upārayat B.
- 305] pāda cd are lacking in B and D.
- 306] the whole verse 306 is lacking in B and D.
- 307] the pādas ab are lacking in B and D.
- 308b bodhisattvaḥ] A: bodhisattva B.

- 308d °pāṇinā] A: °poṇinā B.
- 308e °gulināropya] A: °gulitāropya B.
- 309b sarve] A(post corr.) B: sarvapaurā A(ante corr.) || vikampitāḥ] A: vikalpitāḥ B.
- 310b dhanuḥ] A: dhanu B.
- 310d te tad draṣṭum] A: taṃ bhaṃ draṣṭaṃ B.
- 311b pravismayāḥ] A: vismayāḥ B.
- 312a yathānena] A: yathānera B.
- 312b laghu] A: laghuḥ B.
- 312c vijitvābhi°] A: vijitobhi° B.
- 312d °yiṣyate] A: °yiṣyata B.
- 313c °svāntāḥ] A: °svātāḥ B.
- 313d prābhyanandan] A: prātyanaṃdan B || prasādītāḥ] A: prasādito B.
- 316b yantra°] A: paṃtra° B.
- 316d kūpaḥ] A: rupaḥ B.
- 317a suprasiddho] A: saprasiddho B.
- 317c saṃpūrṇo] A: saṃpūrṇā B.
- 319c pramuñcanto] A: pramuñcaṃsā B.
- 320c īdṛkśilpakalāpaś] corr.: īdṛcchilpakalāpaś A: īdṛcchilpakalādyas B.
- 323b mahadripūn] A: mahāripūn B.
- 323c vicchidya] A: vicchi B.
- 324b śrīguṇākaraṃ] B: śrīsugūṇākaraṃ A (metre!).
- 324d āpsyate] A: āpanyate B.
- 325c divyapuṣpaiḥ] A: divyaipuṣpaiḥ B.
- 325d prākraman] A: prākaman B.
- 326b sarve] A: sarva B.
- 326c tam abhyarcya] A: samabhyarcya B.
- 327b °āśrayaḥ] A: °āśrayeḥ B.
- 329a sarvāstraśastra°] A: sarvāśastra° B.
- 331cd °jñāḥ sarvaraṅga°] A: °jño raṅga° B.
- 332b °yuktivit] A: °muktivit B.
- 333a svapnādhyāya°] A: svapnāṃ dhyāya° B.
- 333c jyotirbhātika°] A: jyotirbhotika° B: jyotirbhautika° D.
- 335a sanmatir] A: sanmati B.
- 335b saddharmasā°] A: saddharmāsā° B.
- 336a vidyāsu] A D: om. B.
- 336d saṃsiddhi°] A (post corr.): saṃddhisi° A(ante corr.): sasiddhi° D.
- 336] the pādas bcd are lacking in B.
- 337] the pāda a is lacking in B.

- 337b kalā°] A D: om. B.
- 337c °āśliṣṭo] A D: °āśriṣṭo B.
- 337d °vad vyarājata] A: °vad vyarājataḥ D: vad dhārājata B.
- 338c svātmajām] A: svātmajā B.
- 339a mahāsatva] A: mahāsatvā B.
- 339c °guṇādhānaḥ] A: °guṇādhāra B.
- 341b sarva°] A: sarve B || °vicakṣaṇā] A: vicakṣaṇaḥ B.
- 343c enām] A: anām B.
- 344a śākyo] A: śākyā B.
- 346a tataḥ] A: tata B.
- 347a saṃvīkṣya°] A: saṃvīkṣa° B.
- 347b sarvair lokaiḥ] A: sarvalokaiḥ B.
- 348c nijālaye] A: nijālaya B.
- 349c °ṣiṃcyākarot] A: °ṣiṃcyokarot B.
- 350b svām svām] A: śvā spām B.
- 350d saṃkalpya] corr. (cf. 351d): saṃkalpa A B.
- 351d saṃkalpya] A: saṃkalpa B.
- 351] after this verse 351, A (seconda manu) adds in the margin the following 2 verses: tataḥ paṃcaśatāḥ śākyāḥ svām svām duhitaraṃ mudā / sālaṃkāraṃ dadus tasmai catuṣṣaṣṭikalāvide // (1); evaṃ sarvārthasiddhasya caturaśītisahasrikā / kanyā kāntā priyā āsan pitṛdattā pativrata // (2). — B has only the added verse of (2) after 351. However D has only the added verse of (1) in that place.
- 353c gopā] A: gprepā B.
- 354d carat] A: catarana B.
- 355a saṃcarantīm] A: saṃcarantī B.
- 355b satīm] A: satī B.
- 356a navā hi vadhukā] A: naivā hi vandhukā B.
- 356b pratilīnā] A: pravilīnā B.
- 356d prācaraj] A: prācara B
- 357c °āntarjanasyāgre] A: °āntajamrasyāgre B.
- 358a āśayā hy āryā] A: āśayārsvāryā B.
- 359a gacchan vai śobhate] A: gacchasya śyobhate B.
- 359c niṣaṇṇo] A: niṣeṇṇo B.
- 359d °ātīśobhate] corr.: °ābhiśobhate A B.
- 360c kalaviṅko] corr.: karaviṅko A: karaviṅkā B.
- 362a āryo] A: āryā B.
- 362c bālaḥ] A: bālā B.
- 363c °otsikto] A: °otsakto B.

- 363d duḥsprśyās] corr.: dussprśyās A: dusprśyās B || tathā] A: nathā B.
- 364d sparśanaṃ] A: om. B.
- 366b darśane] A: darśana B.
- 367a yeṣu] corr.: yesu A B.
- 367c yeṣu] A(post corr.): yesu A(ante corr.) B.
- 367d °saṃyatāḥ] A: °saṃyutāḥ B.
- 368a guptendriyāḥ] A: guptendriyā B.
- 368c vaktraṃ] A: vaktam B.
- 369c lajjāpi] A: lajjāni B.
- 370a °āśayāḥ] corr.: °āśayā A B || sādhyo] corr.: sādhyā A: sādhyo B.
- 371b °bhijñāḥ] A: °bhijñā B.
- 372ab na vidyate rāgo 'nyasmin] corr.: na vidyate rāgama(!)nyasmin A (the letter ma has a amendatory mark!): vidyate rāgo nānyasmin B.
- 372c vaktraṃ] B: vaktraṃm A.
- 373d prānvamodat] A: prānvabodhat B.
- 374b vadhūṃ] A: vadhuṃ B.
- 374c dūṣyava°] A: duṣmava° B.
- 376c vadhū°] A: vadhu° B.
- 377d °maṇḍau] A: °maṇḍe B.
- 378a ānuśaṃsanaṃ] A: ānuśasanaṃ B.
- 378b vadhū°] A: vadhu° B.
- 379d °rājata] A: °rājate B.
- 380a iti me guruṇādiṣṭaṃ] A(post corr.) B(post corr. marg.): iti me guruṇādrṣṭa D: iti mama purākṛtyaṃ A(ante corr.) B(ante corr.).
- 380b mayedānīm] A(ante corr.): mucyedānīm A(post corr.?) B D.
- 380c °āsoka] B(post corr. marg.) D: °ānanda A B(ante corr.).
- 381a śrutvedaṃ ye 'numodanti] A: śrutvevaṃm anumodanti B.
- 381b subhāṣitaṃ] A: subhāṣite B.
- 383b °āsoko] A(post corr.) B D: °ānando A(ante corr.) || mahīpatiḥ] A(post corr.): mahāmatiḥ A(ante corr.) B D.
- 383d prābhyanandat]A: prātyanandana B: prātyananda D.
- Colophon: iti śilpakalā°] A(ante corr.) B: iti śrīlalitavistare śilpakalā° A(post corr. marg.) D || samāptaḥ] A: om. B D.

2. Tathāgatajanmāvadānamālā 第14章後半の翻訳

その後もそれらの王族の青年たちと、かの王子は跳躍などにおいても、また遊戯や遊泳やランニングにおいても〔競争し〕、勝利を得ました。[245]

それらすべてを眺めて、あらゆる神々は大喜びし、虚空に立って彼にお辞儀して、再び次の様に語りかけました。[246]

「布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧を極限に至るまで通達し、四梵住を行じ、すばらしい光輝の善き徳性を無尽蔵にもつ者、[247] 菩薩・大通智者・あらゆる有情を益する目的をもつ者、無垢の清らかな精神をもつ者、極清浄の三輪をもつ者である、[248] [まだ出家しないで] 家に住む、気高い心のそのお方（菩薩）が有する、これらの徳性（卓越した能力）をあなたたち皆が目撃して、驚くに至りました。[249]

この方は瞬時に十方に居られるあらゆる仏たちに敬意を示し、稽首して、〔地上に〕戻られたのです。[250]

あらゆる仏国土においてあらゆる財を雨降らせることによって、あらゆる生類を欲するままに満足させると、たちまち帰ったのです。[251]

この方の〔他の仏国土との〕往来を、あなたたちは知りません。このように、この方は大通力をもつ菩薩・大士なのです。[252]

この地上でこの方に似たいかなる者がいるのでしょうか。それ故、喜心をもっていつも信奉しなさい。この方を喜んで信奉する者たちは、悪趣に赴くことはありません。[253]

この方は〔今後〕邪悪な者たちに打ち勝ち、あらゆる有情を目覚めさせながら、菩提の道に安立させて、すぐれた禁戒を行わせることでしょう。」[254]

神々がこのように語ったのを聞いて、王をはじめとするそれらの人々は皆、欣然と彼を奉事する意欲をもつ者になりました。[255]

このように、大威神力を有するかのサルヴァールタ・シッダ（一切義）菩薩は、あらゆる遊戯（競技）においても最勝者・勝利者として輝きました。[256]

その後、驕り高ぶって甚だ傲慢であるすべての彼ら釈迦族の者たちは、嫉妬に傷ついた心をいだいて、その集会において次の様に主張しました。[257]

「この王子は論書（学術）と技芸においても最勝者であったが、しかし格闘〔技〕において、彼の力と剛勇を我々はいま見てみたいものだ。」[258]

そう彼らが語ったのを聞いて、かの気高い心の菩薩はかのすべての釈迦族の者たちを見つめながら、次の様に言いました。[259]

「あなたたちすべてがもし私と格闘〔技〕をしたいと望むのであれば、私は一人であなたたち全員と戦うことを希望します。」[260]

そう彼が語ったのを聞くと、すべての釈迦族の王族の若者たちは、かの王子一人と戦おうと、立ち上がりました。[261]

その場所の一方の隅にはなはだ勇敢なかの菩薩が立ち、[他の]一隅にはすべてのかの釈迦族の王族の若者たちが集まりました。[262]

其処で最初にナンダとアーナンダの両者が格闘の場に進み出ましたが、菩薩が片手で触ると、両人は倒れてしまいました。[263]

それを見ると、大驕慢をいだく甚だ高慢なデーヴァダッタが、その円形闘技場全体を三回、右回りに廻ると、[264] 鋭い剣を抜いて、菩薩に向かって勢いよく襲いかかりながら、目の前で両眉を逆立てた醜い顔を[示しました]。[265]

彼を見て、大士であるかの王子は顔に微笑みを湛え、間際のところで[彼を]見つめながら、右手で掴んで、[266] 軽々と空中で三度回すと、地面に投げて、[彼に]慢心を失った表情をさせました。[267]

[投げられた]かの高慢者の体に全く傷は生じませんでした。菩薩の威神力によって[逆に]快さが生じました。[268]

それからかの菩薩はそのすべての釈迦族の王族の青年たちを見ながら、正面に立って、笑いつつ次の様に言いました。[269]

「このような[やり方の]対戦はやめましょう。もしあなたたちが戦いたいのなら、あなたたち全員が束になって、ここですぐにかかってくるなさい。」[270]

彼がそう言うのを聞いて、高慢な彼ら全員は、武器を手にして、菩薩に向かって飛びかかりました。[271]

かの大士はそのすべての者たちを見て、右手で掴むと、憐れみの心をもって、無数の者を慢心を失った者にしました。[272]

そのようにして、その王族の青年たち全員は、菩薩に手で触れると、とても惑乱した意識に盲いてしまい、次々に地面に倒れました。[273]

それを見て、虚空に居たすべての神々たちは歓喜して、呵呵と[笑い]声を発し、彼にお辞儀して、次の様に言いました。[274]

「この世界にいる限りの、[どんな]偉大な力・力能に充ち満ちた大力士たちのすべても、この方に触れると、目を回して倒れることでしょう。[275]

メールなどのあらゆる山々を、力の強いこの王子は掴んでただちに手で粉碎し、塵から出来たものに変えてしまうことでしょう。[276]

この方は友愛の力によってあらゆる外道に勝利し、あらゆる有情に覚知を得させて、善き法のもとで活動させることでしょう。[277]

すべての生き物の益を願って、マーラ（魔）たち・邪悪なる者たちを打ち負かし、阿羅漢として悟りを得て、仏陀にまでも、なられるでしょう。」[278]

このように語って、かの神々は皆、天の花々を雨降らすことによってかの菩薩を敬うと、天に行って、同様に語りました。[279]

シュッドーナをはじめとする王たち、大臣や家臣や市民たち、あらゆる人々がそれを見て驚嘆し、歓喜しました。[280]

その時、釈迦族の有力者である賢者ダンダパーニは釈迦族の王族の青年たち全員に話しかけて、次の様に言いました。[281]

「かの王子の力・力能・武芸の力は見終わりました。今や、射弓術における武芸の力をあなた方は見せてください。」[282]

このように彼が語ったのを聞いて、驕り高ぶって甚だ傲慢であるかのすべての釈迦族の息子たちは「そうしよう」と叫び声をあげました。[283]

其の地に、偉大な知性をもつアーナンダのため、弓の的として鉄製の大きな鼓が2クロージャの所に置かれました。[284]

同様にデーヴァダッタのため、1ヨーjanya（4クロージャ）の所に〔鼓が〕設置され、同様にスンドラナンダのため、6クロージャの所に立てられました。[285]

同様に、ダンダパーニのため、2ヨーjanya（8クロージャ）の所に鼓が設置され、同様に菩薩のために、10クロージャの所に〔それが〕立てられました。[286]

その最後に、ターラー樹7本をそなえ、柵を伴った大きな猪の鉄製の像が置かれました。[287]

其処で最初にアーナンダが弓を握り、矢を放ちました。彼は2クロージャの位置に立つ鼓を破りましたが、それ以上は出来ませんでした。[288]

その後デーヴァダッタが弓を取って、矢を放ちました。彼は1ヨーjanya（4クロージャ）の位置に立つ鼓を破りましたが、それ以上は出来ませんでした。[289]

その後スンドラナンダが弓を持ち、矢を放ちました。彼は6クロージャの位置に立つ鼓を破りましたが、それ以上は出来ませんでした。[290]

その後ダンダパーニが弓を取って、矢を放ちました。彼は2ヨーjanyaの位置に立つ鼓を破りましたが、それ以上は出来ませんでした。[291]

その後に顔に微笑みを湛えたかのサルヴァールタ・シッダ王子が自らその弓をつかむと、弓の弦を引き絞ってみました。[292]

その〔弓〕は菩薩である王子によって握られて、撓められましたが、音を立てて割れてしまいました。その後、別の〔弓〕も同様でした。[293]

同じ様に、かの王子のために運ばれてきたあらゆる弓が、かの王子に撓められると、三つに折れてしまいました。[294]

そこでかの菩薩サルヴァールタ・シッダは、王たちの王であるかの父親を見つめて、微笑んで次の様に言いました。[295]

「父上、この都城に、私が弦を引き絞るのに耐えられる、より堅固で大いなる固さがある、別のもっと強い弓がありませんか。」[296]

そう彼が言うのを聞いて、シュッドーダナ王はその息子である大士を見つめながら次の様に教示しました。[297]

「息子、王子よ、[そのような弓が] 存在する。この地でお前の祖父の弓が神殿に安置されて、常に香と花環をもって供養されている。」[298]

そう父が語ったのを聞いて、王子は顔に微笑みを浮かべて、父であるかの大王を見つめて、次の様に語りました。[299]

「どうか[祖父] シンハハヌのその弓を私の前にお持ち下さい。王よ、私は弦を引き絞って、いっぱい[弓を] 張るでしょう。」[300]

そう彼が語ったのを聞いて、シュッドーダナ王はただちに力ある者たちを呼んで、次のように命じました。[301]

「お前たちはすぐに行って、神殿で供養されている弓を運んで、王子の前まで持ってきなさい。」[302]

そう王に命じたのを聞いて、その力ある人々はすぐに神殿に行き、その弓を持ってきました。[303]

その持ってこられた[弓を] 見て、すべてのその釈迦族の息子たちは立ち上がって手に取ると、弦を引こうと試みました。[304]

長くかかって最大の努力で苦闘しても、彼らは弦を引くことが出来ませんでした。ましてそれをいっぱい張ることなど、どうして出来ましょうか。[305]

それを見て大きな慢心をいだくダндаパーニは立ち上がり、すぐにその弓を構えると、弦を引こうとしました。[306]

彼は長くかかって最大の努力で苦闘しましたが、その弓を構えてから、弦を引くことが出来ませんでした。ましていっぱい張ることなどどうして出来ましょうか。[307]

その後、かの菩薩サルヴァールタ・シッダはその[弓]を眺め、座席に坐ったまま、ただちに左手で掴み、右手の指で弦を引いて、音を響かせながら、十分に張りました。[308]

その時、張弦の響きを聞いて、すべての[都民たち]は身を震わせました。「何の響きが生じたのか」と互いに尋ね合いました。[309]

「きっとシッダールタ王子が弓の弦を引かれたのだ。これはその音だ」と、彼らは語って、それを見ようと、嬉々として[集まり] 来ました。[310]

それを見て虚空に居る神々は皆驚嘆し、呵呵と[歓呼の] 大音声を発しながら、次のように語りました。[311]

「この方は軽々と、すごい力によって弓を十分に張られたが、まさに同様に、マールたちを打ち破って、目的を十分に満たすであります。」[312]

それを見、また聞いて、王をはじめとするすべての人々は、驚きと歓喜の心をいだき、満悦した気持ちで、称賛しました。[313]

その後、かの王子サルヴァールタ・シッダは座から立ち上がり、弓を持って、まるで心を動かすように〔軽々と〕矢を放ちました。[314]

彼に射られた矢はたちまち速やかに全部の鼓を貫通し、10クローシャの所に置かれているターラ樹7本をもつ鼓を、[315] そして柵柱がつけられた猪の鉄製の像を貫通して、地中に入りました。其処に井戸を生じさせました。[316]

〔それは〕今日でも『矢の井戸』と呼ばれて、世に知られています。とても清らかな水に溢れた大沐浴場として有名です。[317]

それを見、また聞いて、シュッドーダナをはじめとする王たちと人々、かの釈迦族の王族の若者たちが皆、とても驚嘆しました。[318]

そして心が驚きに襲われた彼ら釈迦族は皆、呵々と〔歓呼の〕声を発しながら、互いに見合って、次の様に語りました。[319]

「不思議なことだ、練習したことは無かったあの方が、このような技芸の総てとあらゆる学問が示されるとは！」[320]

それを聞いて虚空にいるかの神々は、釈迦族の人々の群に囲まれているかのシュッドーダナ王に話しかけて、次のように言いました。[321]

「王よ、ここにどんな不思議さがあるのでしょうか。このお方は菩提道場で過去の諸仏の座に坐って、『寂止』の弓を執り、[322] 『空』と『無我』という矢により、『煩惱』という大敵を滅ぼし、『邪見』の網を破って、マーラの群に打ち勝って、[323] 憂いの無い、塵を離れた、すばらしい正法の光輝とよき徳性を無尽蔵にもつ、全き悟りに達して、仏の位を得られるでしょう。」[324]

そう言うと、かの神々は皆、かの菩薩に丁重に天の花々をもって敬意を示すと、喜悅して自らの住まいに去りました。

それを聞いて、甚だ満悦した気持ちになった、王をはじめとするすべての人々は、かの菩薩に敬意を示し、お辞儀をして、称賛しました。[326]

〔あらゆる〕善き徳性を一身に集めた者、かのサルヴァールタ・シッダ王子——菩薩・大士・無礙解の者・善巧者・聡明者、[327] あらゆる文字に関する偉大な知者、あらゆる論書に通達した者、あらゆる技術と芸能と学問と儀軌を解する善き知性を持つ者、[328] あらゆる投げる武器・切る武器に関する学において、戦争の学において闊歩する者、あらゆる相好を知る智者、あらゆる〔鳥獣の〕鳴き声の意味に詳しい者、[329] あらゆる合唱や器楽について、舞踏について精通する者、鉦物の相を知る智者、あらゆる宝石の違いを知る者、[330] 綿布や絹などの衣の違いをよく知る大聡明者、あらゆる絵画の手法を知る者、あらゆる染色の方法を知る者、[331] 花環を編

む〔手法〕を知る智者、あらゆる香料の混合を知る者、微塵の〔数の〕計算や量などの計算に通達した者、[332] 夢の学習・判断を知る者、あらゆるヴェーダーンタを究めた者、天体観察者や医者などの〔社会に〕有益な学問と方法を知る者、[333] 三蔵・大乘經典・アヴァダーナを知る聡明者、〔四〕無礙解の徳性の光輝をもつ者、四梵住の者、[334] 憶念を保つ者、善き知性をもつ者、心堅固な者、正法の達成に努力する者、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智恵を究めた者——、[335] このように人界・天界のあらゆる学問についても、また〔現象の〕世界を超えた（出世間の）悟りの達成のための成就法についても、[336] 最も卓越している者、技芸や学問に慢心をいなくあらゆる人々に打ち勝ち、勝利の栄光の女神によって抱擁された者（王子）は、マンジュシュリー（文殊）のように光り輝いて見えました。[337]

そのすべてに勝利した〔王子〕を見て、ダングパーニは満悦した気持ちになって、自分の娘であるゴーパーを与えて、次のように言いました。[338]

「あなたは幸に恵まれた人です、大士よ、あらゆる学問の奥義に通達した者、すばらしい光輝の善き徳性の保持者、あらゆる有情を益することを目的とする者です。[339]

あなたこそは偉大な知者、あらゆる学問に精通した者です。それ故、あなたに匹敵する者は誰も存在しません。どうして生存の住まい（輪廻界）において〔あなたを〕超える者がいるのでしょうか。[340]

私のこの娘もあらゆる学問に精通しています。すばらしい光輝の善き徳性を楽しむ者であり、真実の正法を喜ぶ者です。[341]

それ故、この私の娘はあなたの正法の達成に適しています。美しい肢体をもち、有徳の振舞いをなし、法に従って行動する善女です。[342]

そこで、私はあなたにこの娘ゴーパーを差し上げます。あなたはこの子を受け取って、主上よ、私に誇りを与えて下さい。」[343]

このように求めて、かの釈迦族ダングパーニはかのサルヴァールタ・シッダに娘であるヤショードラー（「榮譽ある女」）を、〔自ら〕願って、与えました。[344]

彼によって〔自ら〕希望された、その女神シュリーに似た最上の娘ゴーパーを見て、シュッドーダナ王は満悦した気持ちになって、受け入れました。[345]

その後、かのサルヴァールタ・シッダ王子はその娘と一緒に車に乗って、大歓声を伴って都城に行きました。[346]

その〔道〕において彼はすべての大喜びする人々に見つめられながら次第に進んでゆき、王宮の近くに着きました。[347]

彼はゴーパーを伴って車から降りると、その〔宮殿〕に入って、自分の住居に滞在し、悟りに心を向けながら過ごしました。[348]

その後、王の命令により、プローヒタ（宮廷祭官）は儀軌に従い、その二人に灌頂を行って、一族の伝統法に随って生活する者となりました。[349]

その後すべての釈迦族たちはそれぞれ自らがもつ美しい娘を、欣然とかの王子に〔自ら〕願って、与えました。[350]

同様に他の王たちもそれぞれ王女たる自らの娘をかかサルヴァールタ・シッダに喜んで〔自ら〕願って与えました。[351]

プローヒタはそれらの娘たちを皆儀軌に随い灌頂して、かの〔王子〕を夫とする、〔家の〕伝統法に随い生活する者となりました。[352]

それらすべての女たちは後宮に入れられました。菩薩にとっての最もお気に入りの女性であるゴーパーが彼女たちの最上位の者でした。[353]

その〔王宮〕で、王子のお気に入りの妻であるかの第一妃は、顔を隠さないで、すべての人を眺めながら、至る所を歩き回りました。[354]

そのように顔を覆わないで歩きまわっているその善女を見て、王をはじめとする人々は皆驚いて、次のように言いました。[355]

「新妻なるものは顔を覆い、隠蔽するものだ。しかしあの女は顔を覆わず、人々を見ながら歩き回った。」[356]

そのように彼らに語られているのを聞いて、その娘ヤショーダラーはすべての家人の前に立って、次の様に語りかけました。[357]

「清らかな心をもつ聖者たちは顔を隠すことなく、〔そのまま〕美しいです。はたばこ（幢）の先端に付けられた大宝石が美しく輝くように。[358]

聖者は行きつつあるのも美しく、戻り来るのも美しいです。立っているのも、坐っているのも、あらゆる〔所作〕において聖者は美しいです。[359]

聖者は話していても美しく、黙っていても美しい。まるでカラヴィンカ鳥が、姿を見ても、声を聴いても、美しいように。[360]

クシャ草の衣を着た人や、襤褸の衣を着けた、瘠せた体の人であっても、〔内面に〕徳性をもつ人であるなら、徳性という飾りに飾られて、自らの威厳によって美しいものです。[361]

罪悪の無い聖者は、あらゆる点で美しい。他方、悪をなす愚者は、どれほど飾られていても、美しくありません。[362]

もし心に悪があつて、口にはとても甘美な言葉があるような者なら、そんな人々に接するべきではありません。甘露が注がれた毒壺〔に接するべきではない〕ように。[363]

まるで沐浴場の水のように無垢である、清らかな心をもつ、やさしい者であるなら、そのような人々はいつも幸いをもたらす拝見と接触とを与えてくれます。[364]

悪友を捨てて常に善友に仕える者たち、また悪の悦びを捨てて善い徳行を常に愉しむ者たちであるなら、[365] そのような人々を拝見することも接することも、常にすばらしく、またそのような人々の言葉を聞くことも、種々の生存を彷徨うこと（輪廻）の中で善い果をもたらします。[366]

身体を制御していて、[感官の] 制御という装飾で身体を[飾る]者たちであれば、また言葉を制御していて、真実の法のために抑制をなす者たちであれば、[367] また常に感官を守護し、美しい[澄んだ]身体をもち、とても清澄な心をもつ者たちであれば、そのような清らかな心の人々の顔を覆う必要が一体あるでしょうか。[368]

また心が清められておらず、羞恥心も無いならば、そのような者たちの顔が千枚の衣で覆われていたとしても、何になるでしょう。[369]

清らかな心をもち、感官を護り、太陽と月に似た[光輝をもつ]、夫に忠実な貞女たちであるならば、そのような女たちの顔を覆う必要が一体あるでしょうか。[370]

五神通をもつあらゆる聖者たちや神々も、よき戒徳という水に洗われて清浄無垢である、私の心をお知りになっています。[371]

私に他の男性への情欲は無く、それ故、私は衣で顔を覆わないで欣然と歩き回っているのです。」[372]

このようにゴーパーが説いたのを聞いて、家来たちと一緒にシュッドーダナ王は気づきを得て、とても清澄な心になり、感激しました。[373]

そして、かの王（大地の守護者）は嬉しげにその嫁を見つめて、上等の布地の服やあらゆる装飾品を山ほど贈って、[374] 輝かしい徳性の依処であり、すばらしい身体をもつ、かのゴーパーを飾らせて、満開の蓮の花のような顔をもつ[王]は、[彼女を]見つめながら次の様に言いました。[375]

「私の息子である王子がすばらしい光輝と善き徳性の依処であるように、私の[息子の]嫁である娘も、本当の戒と徳性の依処である。[376]

最上の味をもつものである酥と醍醐が⁴⁰⁾合するように、きっと私のこれら二人の清らかな有情は、運命のつなぐ力によって結合したのであろう。」[377]

このようにかの王子とその妻に対して称賛をなし、シュッドーダナ王は親族たちと一緒に喜びました。[378]

このように[ゴーパーという]『女宝』を具えて、すばらしい光輝の善き徳性の海であるかの王子、菩薩・大士は輝きました。[379]

40. 原文の sarpi-sarpimaṇḍau 「酥と醍醐」は、源泉資料の Lalitavistara にも sarpi-sarpimaṇḍa という語形があるため、*sarpiḥ-sarpimaṇḍau と修正しない。

—— 以上のように、私の師が私に教示された通りに、今私はお話しました。アショーカよ、あなたもこれを聞いてから、[人々に聴聞の] 喜びを与えてください。

[380]

この菩薩の善説を聞いて、喜んだ人々は、皆清らかな心で菩提行をなすであります。[381]

すばらしい光輝の善き徳性の依処である菩薩・大士たちは、あらゆる有情に益をなし、[生の] 終わりに仏の住まいに行かれました。[382]

—— 以上のように阿羅漢が教示されたのを聞いて、アショーカ王は「そういたします」と同意して、周囲の聴衆と共に歓喜しました。[383]

第14章 [菩薩が] 技芸と一切の学問 [の通達] を示しヤショーダラー女宝と夫婦になる品

第三部

APPENDIX

「梵文 *Ṣaḍgatikārikāḥ* はアシュヴァゴーシャ作か」

この第三部で、アペンディクス（付録）として付けるものは、2019年9月8日の日本印度学仏教学会第70回学術大会パネル「アシュヴァゴーシャ研究の展開」（代表：松田和信）において、筆者（岡野）が「梵文 *Ṣaḍgatikārikāḥ* はアシュヴァゴーシャ作か」という題目で発表を行った時に、学会会場で配付したハンドアウトの原稿である。

その発表後にしばらく経って、幾人かの方からその原稿を見たいという要望が筆者のもとに寄せられたので、ここに少し修正を加えてその原稿を提示する次第である⁽⁴¹⁾。

この発表原稿は筆者が『南アジア古典学』13号、2018年、1-164頁に載せた「六道頌 (*Ṣaḍgatikārikāḥ*) の研究 — 梵蔵漢巴 対照テキスト —」と題する論文と密接に関連しており、その論文にあるやや複雑な議論を理解しやすくするために、著者の問題（馬鳴と *Dharmasubhūti* の関係など）や、作品の成立をめぐる問題など、いくつかの問題に焦点を絞るかたちで書いたものである。その論文とほとんど同じ表現になっている箇所がこの原稿の中に多々あるが、その点は寛恕されたい。この原稿はその2018年の論文から1年後の私の意見を述べているものであるから、説明の仕方にも多少の変化が入り込んでいるところがあるが、大きく意見を変えた箇所は無い。

* * *

日本印度学仏教学会第70回（於 佛教大学）2019年9月8日

[パネル発表B アシュヴァゴーシャ研究の展開（代表 松田和信）2番]

梵文 *Ṣaḍgatikārikāḥ* はアシュヴァゴーシャ作か

発表者：岡野 潔（九州大学）

41. 特に注において文を変えた。また冒頭に発表要旨を付けた。

〔発表要旨〕 六道頌 *Ṣaḍgatikārikāḥ* (略号 SGK) の梵文と漢訳『六趣輪廻経』とパーリ語訳 *Chagatidīpanī* (= *Pañcagatidīpanī*) は作者を馬鳴とするが、しかしそのチベット語訳は、梵文と作品の内容が全く同じにもかかわらず、作者を Chos ldan rab 'byor dbyangs (**Dhārmikasubhūti*ghoṣa) とする。また世親の俱舍論は SGK の第36偈にあたる偈を引用して、それを *Dharmasubhūti* の作とする。これまでの議論はほぼそれらの資料に限られていたため、その作品が本当に馬鳴の時代にまで遡れるのかが疑わしかったが、筆者は SGK の姉妹的な作品として、『分別業報略経』と『仏説分別善惡所起経』という有部での伝承本があることを指摘し、また『大智度論』における連続的な引用箇所も指摘した。それらによって、SGK に似た作品が遅くとも3～4世紀には有部で伝承されていたことが証明できる。

『六道頌』 *Ṣaḍgatikārikāḥ* (以下 SGK) は105偈から成るが、内容に大乘的な要素はなく、小乗仏教に属する文献である。三蔵に属さない、個人の著作である。梵文と2本の漢訳(日称等訳『六趣輪廻経』大正 No. 726と法天訳『佛説六道伽陀経』No. 725)とパーリ語訳とチベット語訳がある。そのうち梵文と漢訳『六趣輪廻経』(馬鳴菩薩集)とパーリ語訳は、作者が馬鳴であると伝える。発表者は2018年に『六道頌』に関する2論文⁴²⁾を書いたが、その研究で得られた幾つかの発見に基づき、馬鳴の作である可能性があるのか、という問いを立てて、この著者の問題を再度吟味してみたい。

馬鳴は有部——経量部を含む広義の有部——の出身であろう。馬鳴が SGK を作ったなら、SGK という作品は有部で生まれたことになる。しかし現存する梵文 SGK はタイトルそのものが示すように、五道説でなく六道説をとるので、それは恐らく有部で伝承された本ではない。しかし私は本来この作品の原テキスト (*Ur-Text*) は有部で作られたのであろうと考えている。

『六道頌』というタイトルで六道の業報を記す、現存する梵文 SGK には、阿修羅道を扱った偈は1偈しかない。それは第94偈であるが、その偈の後に「阿修羅の節終わる」(*asurakāṇḍam samāptam*) という文があり、そのたった1偈で「阿修羅の節」が終わる。これは実に不自然であり、本来はこの作品の構成は五道の分け方による五つの節から成っていたのではないかと疑うのが自然である。或る時代に編集者が「阿修羅の節終わる」という短い文を書き入れて、阿修羅についての1偈を無理に節として独立させただけで、作品の構成を五道から六道という分け方に変えることが出来たので

42. 岡野潔(2018a) : 「六道頌(*Ṣaḍgatikārikāḥ*)の研究 — 梵蔵漢巴対照テキスト —」、『南アジア古典学』13号、1-164頁； 岡野(2018b) : 「*Ṣaḍgatikārikāḥ* と分別業報略経」、『印佛研』第67巻1号、458-450頁。

あり、『六道頌』というタイトルはその再編集の時に編集者によって付けられたもので、本来の作品名ではないであろう。

またこの現存する梵文 SGK と似たテキストが有部に伝承されていたことを考慮する必要がある。

梵文 SGK にかなり近い内容をもち、五道説に基づく作品構成をしており、しかも有部が伝持したことがほぼ確かな作品が、漢訳の現存する仏典として有る。それが『分別業報略経』（大正 No. 723）である。この漢訳経と SGK の、両作品の内容の比較については岡野 (2018b) を参照してほしい。両作品は恐らく同一の Ur-Text から派生して、生じたものである。もし SGK という作品のタイトルが後の時代の編集者に付けられたもので、本来のものでないなら、SGK の本来のタイトルは、この「分別業報略」**Kar-mavibhaṅga-saṃkṣepaḥ* のようなものではなかったであろうか。

漢訳『分別業報略経』の作者は大勇菩薩であると漢訳者に記される（残念ながら馬鳴ではない）。その訳者が僧伽跋摩であること⁽⁴³⁾から判断して、これは有部に属する文献であると見て問題ない。『分別業報略経』は量的に梵文 SGK より 1.5 倍ほど大きい作品である。梵文 SGK と比較すると、『分別業報略経』は梵文 SGK とほぼ同じ構造を保ちつつ、両者の共通の土台的伝承の上にあちこちで偈を増やし、作品を拡大したと思われる。『分別業報略経』は梵文 SGK よりも発達した形を示しており、決して SGK に相当する有部における最古形のテキスト (Ur-SGK) を示すものではない。有部の Ur-SGK のテキストがある時代に大勇によって増広され再編集されて出来た作品が、この 5 世紀前半に漢訳された『分別業報略経』ではないかと私は推測する。

安世高訳『仏説分別善惡所起経』（大正 No. 729）という別の漢訳の作品にも注意を払う必要がある。その経は前半が散文、後半が韻文から成るが、前半の散文部分については敦煌本『提謂経』（提謂波利経）巻下との文面上の合致が指摘され、中国で製作された偽経と思われる⁽⁴⁴⁾。しかしその経の後半を占める韻文部分は、大勇菩薩の『分別業報略経』の梵文原典とほぼ同じ内容をもつ梵文原典から、別の時代に（もっと古い時代に）別の訳者によって漢訳された 1 作品であるとみなすことができる。つまり『分別善惡所起経』の後半・韻文部分は『分別業報略経』より古い時代になされた、その異訳であるとしてよい。その梵文の原本を推測すると、それは『分別業報略経』と大して違いがない有部の伝承本であったと考えられ、決して『分別業報略経』よりも古い段階の作品のあり方を示すテキストではない。

43. 僧伽跋摩は他に『雜阿毘曇心論』（大正 No. 1552）や『薩婆多部毘尼摩得勒伽』（No. 1441）や『勦發諸王要偈』（No. 1673）を訳している。慧皎の高僧伝によれば彼は『雜阿毘曇心論』に精通していたという。有部の人であることがわかる。岡野 (2018a), 16 頁注 20。

44. 牧田諦亮 (2014), 170-238 頁（提謂経と仏説分別善惡所起経 — 真経と偽経 —）を参照。

また有部系統で伝持された SGK にあたる別の古い資料が、『大智度論』に引用される文である。『大智度論』巻十二には、明らかにその作者（龍樹）が SGK に極めて近い文献を利用して書いたと思われる 1 節がある（T 25 152c11-153a14）⁽⁴⁵⁾。

『大智度論』のその一連の文は、作品名や作者名を出さずに引用され、また散文で記されているが、文が実に梵文 SGK ならびに『分別業報略経』と似ている。内容も、出てくる順序も、ほぼ同じである。『大智度論』の作者は梵文 SGK のテキストか、或いは『分別業報略経』（≒『分別善惡所起経』韻文）の梵語の原本テキストかの、どちらかを依用しながらこの文を作ったものと思われるが、細かく比較して見ることで、『大智度論』の引用した文は、梵文 SGK よりも、有部系の『分別業報略経』（≒『分別善惡所起経』韻文）に近い様な偈の配置をもつテキストと判断できる⁽⁴⁶⁾。従って『大智度論』に利用されたのは『分別業報略経』と合う、有部が伝持するテキストであると思われるが、私は、そのテキストは現存する漢訳の『分別業報略経』とほとんど同じテキストではなく、それよりもっと偈数が少ない、梵文 SGK に近い短さをもつような、1 段階古いテキスト（つまり有部が伝持した Ur-SGK）であったのではないかと推測する。そう推測するわけは、『大智度論』の作者はこの箇所ですべて 15 の文のそのテキストから適当に選び出したわけであるが、15 の文のうち 14 の文は梵文 SGK にもある偈である。これほどの高確率で、SGK にも対応する偈が見つかる偈ばかりが利用の際に選ばれたのは、『大智度論』の作者が利用したテキストは、まだ SGK に近い偈の量をもつにすぎない古い段階に留まっている古いテキストだったからであろう。もし漢訳『分別業報略経』と同じくらい多くの偈の量をもつテキストから適当に 15 の文を選び出したなら、15 分の 14 という高確率で、SGK とも合致する偈ばかりが選ばれることはありえない。漢訳『分別業報略経』は大勇によって再編集を受けた拡大版と考えるなら、『大智度論』が利用したのはその拡大がなされる前の段階の、有部の Ur-SGK に近いテキストなのではないか⁽⁴⁷⁾。

45. そこでは (1) 象馬牛等の畜生の業、(2) 龍の業、(3) 金翅鳥の業、(4) 鳩槃荼鬼の業、(5) 地の夜叉鬼の業、(6) 虚空の夜叉の業、(7) 宮觀飛行夜叉の業、(8) 飲食を施した業、(9) 衣服を施した業、(10) 房舎を施した業、(11) 井池・泉水等を施した業、(12) 橋船・履屣を施した業、(13) 園林を施した業、(14) 四天王に生まれる業、(15) 他の六欲天に生まれる業が説かれる。

46. 例えば、『大智度論』の (10) (11) (12) (13) の四つの文に相当する梵文 SGK の偈は、それぞれ第 69 偈、71 偈、第 70 偈、第 72 偈である。ここで SGK は相当する偈の順番が少し狂うのに対して、『分別業報略経』と『分別善惡所起経』の相当箇所では、『大智度論』のその四つの文と全く同じ順番で文が出てくる。岡野 (2018), 31 頁。

47. 『大智度論』の (15) の文は天界の六欲天で記述を終えている点に注意される。漢訳『分別業報略経』（≒『分別善惡所起経』韻文）では天界の記述は六欲天で終わらずに、更に色界・無色界の諸天まで偈が増広されているのに対し、SGK は六欲天だけで天界の記述を終える。もし『大

さて現存する梵文 SGK は、有部でなければどの部派に伝持されたものであろうか。内容的に確実に小乗の作品であるから、インドではどこかの小乗部派の教団の中で伝持されていたはずである。現存する SGK が六道説の立場に立つ点を考慮すると、六道説に立つパーリ上座部と有部は、その候補から自然に除外されることになる。六道説に立つ部派としては、大衆部のアンダカ派と北道派ならびに犢子・正量部がある。その中から候補を選ぶならば、大衆部系の部派よりも犢子・正量部である可能性が高いと私は考える。大衆部よりは、上座部系の部派である犢子・正量部のほうが、同じ上座部系の有部のように、業報の威力の強調に熱心であったと思われるからである。

私は SGK の原形テキスト (Ur-SGK) は本来有部系の部派で作られたものであると推測するが、その作品は個人の著作であるため、部派を超えて、犢子・正量部を含めた上座部系の諸部派で共有されていた時代があったと考える。有部において Ur-SGK が作られ、人気があるその個人の作品はやがて有部から他の上座部系部派に流出して、現存する非-有部の梵文 SGK の作品（犢子・正量部において六道説に合うように再編集されたもの）が出来たのではないか⁴⁸⁾。そして Ur-SGK から、他部派に流れた梵文 SGK とは別に、有部の内部で、更に偈数を追加した（また偈によっては韻律を長いものに変えた）再編集された作品として、『分別業報略経』（≒『分別善惡所起経』韻文）の梵語原本たる、大勇菩薩に帰せられる作品が生じたのではないだろうか。私はこのように、西北インドで有部の創造的な生産活動が最も盛んであった時期の 2～4 世紀頃に、作品の源泉である原テキスト (Ur-SGK)、そこから派生した漢訳『仏説分別善惡所起経』韻文や『分別業報略経』の原典たる大勇菩薩作の梵文テキストや、またそれに内容が近似する現存の梵文 SGK のテキストが、成立したのではないかと考える。

有部： Ur-SGK → 大智度論に引用された SGK → 分別業報略経（≒分別善惡所起経）
非-有部： \ 現存する梵文 SGK

馬鳴が著者であるかどうかを議論する場合は、この『大智度論』以前に成立していた Ur-SGK のテキストも含めて、SGK 関連のこれらの作品が馬鳴によって作られた可能性を検討するものになる。

『大智度論』の作者が漢訳『分別業報略経』と同じ程度に発達したテキストを用いたならば、『大智度論』の(15)の文は六欲天で終わることなく、無色界までを簡略に紹介したのではないか。このことから、『大智度論』の作者が利用したテキストは、まださほど増広されていない段階にある有部の SGK の原形テキスト (Ur-SGK) ではなかったかと考えられる。岡野 (2018a), 32頁。

48. 現存する SGK が犢子・正量部に属すると考えた理由については、岡野 (2018a)、33-35頁を参照されたい。

さてUr-SGK や SGK が馬鳴の作かを考える時に、議論されるべき論点が以下の様に二つある。

論点1：「SGK という作品が正法念処経から抜粋して作られたものであるか」

Sylvain Lévi が1928年に発見した梵文 SGK のネパール写本の巻末のコロフォンには、この作品が「聖なる『正法念処』大乘経からの抜粋である」と記されている：
āryasaddharmasmṛtyupasthāna-mahāyānasūtrāntāt samākṛṣṭā mahāpaṇḍitāśvagoṣena ṣaḍ-gatikārikāḥ samāptāḥ // (聖なる『正法念処』大乘経からの抜粋である、偉大な学者 Aśvagoṣaによる、『六道頌』終わる。) また SGK の蔵訳テキストの末尾のコロフォンにある蔵訳タイトルは Dam pa'i chos dran pa nye bar gzhag pa'i 'gro ba drug gi tshig le'ur byas pa であり、この蔵訳により梵語の作品名は *Saddharmasmṛtyupasthāna-ṣaḍgati-kārikā (正法念処・六道頌) と還梵される。ただし蔵訳に大乘経という表現は無いことに注意する必要がある⁽⁴⁹⁾。

この SGK のコロフォンの文をそのまま受けとめるなら、SGK の作者の馬鳴は、ソースである経典から単に偈頌を抜き出して編集を行ったにすぎないことになる。

もしそのコロフォンの文が正しいなら、ここで言及される『正法念処』(Saddharmasmṛtyupasthāna) というテキストは、我々がパーリ聖典やチベット訳 (東北 No. 287) や漢訳 (大正 No. 721, 722) で知る『正法念処経』とは全く違う、謎のテキストである。現存の『正法念処経』には SGK の偈が見出せないからである⁽⁵⁰⁾。

49. 「聖なる『正法念処』大乘経からの抜粋である……」と記した SGK 梵文写本のコロフォンの文について、それに相当する文の訳が、SGK の蔵訳には存在しないので、その「大乘経からの抜粋」という表現は或る時代にネパールで写本に付け加えられた可能性もある。なお Sylvain Lévi がネパールで梵文 SGK と同じ写本の中にあるのを発見した馬鳴の作らしい梵文テキスト『十不善業道 [説示]』Daśakuśalakarmapathāḥ に次の文が記されている：uktam ca bhavagatā āryasaddharmasmṛtyupasthāna-mahāyānasūtre ime daśakuśalāḥ karmapathāḥ mahānarakahetavaḥ [...]. Lévi (1929), p. 269. つまり、この馬鳴の『十不善業道 [説示]』テキストも「聖なる『正法念処』大乘経」に由来する、と記すわけである。岡野 (2018a), 37頁注47。

50. Lévi がネパールで貝葉写本を発見した、2684頌 (実際は2680頌) から成る *Dharmasamuccaya* 梵文テキスト — これは宋の日称等が漢訳した観無畏尊者集の『諸法集要経』(大正 No. 728) にあたる — も、『正法念処経』こそが作品の偈頌のソースであるとコロフォンで自ら語る。すなわちその *Dharmasamuccaya* の写本のコロフォンには、「私は『正法念処経』の広大な大海から偈頌を抜き出そう」と記されている。その作品の場合は、SGK と違って、実際に『正法念処経』(No. 721) の中の多数の偈と密接な関係があることが確認できるので、『正法念処経』(Saddharmasmṛtyupasthānasūtra) から偈を抜粋して作られたという文は正しいものと見なして差し支えない。岡野 (2018a), 38-39頁。

また現存する梵文 SGK の作品そのものの内容から推測すると、その作品は一人の著者がよく作品全体の構成を考えた上で1偈ずつ創作した作品であると思われる。決して『正法念処経』というような他文献の「抜粋」で作れる作品ではない。SGK には業因と業果の説明において言葉遊びがあちこちに見られる⁵¹⁾。作品のあちこちに言葉遊びが散在していることによって、SGK という作品が一人の詩人の手によって創造された作品であり、決して別の聖典から偈が抜粋され寄り集められて出来たような性格の作品ではないことがわかる。

論点2：「SGK の著者としての馬鳴と Dharmasubhūti / Dhārmikasubhūtiḥoṣa の関係」

SGKの作者の名は、梵文・漢文（日称等訳の『六趣輪廻経』）・パーリ語訳のコロフォンでは *Aśvaghōṣa*, 馬鳴, *Assaghosa* であるが、蔵訳のコロフォンは **Dhārmikasubhūtiḥoṣa* もしくは **Dharmasubhūtiḥoṣa* (*Chos ldan rab 'byor dbyangs*) とする。梵文 SGK と蔵訳はテキストとして完全に一致するものの、こうして蔵訳はこの SGK の作者を馬鳴とは記さないために、どちらの作者名が正しいのか、という問題が生じる。

さて5世紀の世親は『俱舍論』世間品の第59頌釈において、地獄の獄卒は有情かどうかという議論のために、*bhadanta Dharmasubhūti* (大徳・法善現) が説いたものとして、1偈を引用している。その世親に引用された1偈のテキストを見ると、それは現存する梵文 SGK の第36偈にあたるものと判断できる。従って、SGK 蔵訳が伝える **Dhārmikasubhūtiḥoṣa* と、世親が伝える *Dharmasubhūti* とは同一人物と見て良いであろう。

しかし両者の偈を比較すると、単純に同一の偈と見なすわけにはゆかない。議論が細くなるが、原文を確認すると、まず『俱舍論』*Abhidharmakośa* で世親に引用された1偈は次のとおり。(この偈を仮にAと呼ぶ)

krodhanāḥ krūrakarmāṇaḥ pāpābhirucayaś ca ye /

duḥkhiṭeṣu ca nandanti jāyante yamarākṣasāḥ // (Pradhan ed., p. 164, ll. 15-16)

(和訳：怒りっぽく、残酷な行為(業 *karman*) を有するものであり、悪を愉しむ者、もろもろの苦しみを喜ぶ者は、ヤマ(閻魔)の[獄卒たる]ラークシャサ(羅刹)たちとして生まれる。)

梵文 SGK の第36偈は次のとおり。(この偈を仮にBと呼ぶ)

51. 例えば SGK 55偈の *gandhamālā-* と *gandharva* の語や、56偈の *piśuna* と *piśāca* の語や、69の *prasāda* と *prasanna* の語や、95偈の *parigraha* と *graha* の語のように。岡野(2018a), 113頁。

atyantakrodhanāh krūrāh śāthāh pāpābhikānksīṇāh /
paravyasanahrṣṭās ca jāyante yamarākṣasāh //

(和訳：とても怒りっぽく、残忍であり、欺く者、悪を欲する者、他人の不幸を喜ぶ者は、ヤマ(閻魔)の[獄卒たる]ラクシャサ(羅刹)たちとして生まれる。)

世親が引用する前者の偈をA、それによく似た後者の梵文SGKの偈をBとして、この両方の偈を比較してみると、BよりもAの方が明らかに表現が素朴であり、Bの方がより洗練された表現になっている。つまりAを推敲して書き直したものがBである、と推測することが出来る。

AとBの偈を比較して、特に次の点に注意してもらいたい。世親のAの偈には pāda a で karman 「行為・業」という語があるが、その語はSGKのBの偈にはない。そのAとBの違いを踏まえた上で、別の文献を見てみよう。

『俱舍論』で世親に引用された上述の偈は、『大毘婆沙論』巻172でも、大徳・法善現の頌として⁵²⁾、同様の議論の中で引用される。

心常懷忿毒 好集諸惡業 見他苦生悦 死作琰魔卒 (T 27 866b16-17)

この『大毘婆沙論』の偈には、「業」という語があるから、世親のAの偈の方に合致するといえる。

次の大勇の作とされる漢訳『分別業報略経』は、その漢訳者から判断して有部に属するものと思われるが、やはり作品中に相当する1偈をもつ。それは次のとおり。

恚憎不善行 心常樂惡法 見他苦隨喜 死作閻羅卒 (T 17 447b26-27)

この偈には「行」という、karman にあたる語があるから、世親のAの偈の方に近い。

52. 『俱舍論』の Dharmasubhūti と、『大毘婆沙論』の「大徳・法善現」とは、同一人物と見なしてよいが、その人物は『大毘婆沙論』の議論の中で、相当の尊敬をこめた扱いをされている有部の師である。『大毘婆沙論』の編纂の時期には、法善現が作った韻文作品が有部で尊ばれていたようだ。俱舍論世間品や大毘婆沙論巻七十に見られる、法善現による菩薩入胎時の六牙白象を表現した Rathoddhatā 韻律で作られた1詩節 (Abhidharmakośa, Pradhan ed., p. 124, ll. 11-12) をめぐり有部での議論では、法善現 (Dharmasubhūti) が作ったその詩節を「これは kāvya (美文体詩) である」といい、単なる文学作品として片付けようとする意見が見られる。つまり法善現がカーヴィヤの作者であると人々に認識されていることがその意見からわかる。法善現が有部系で尊ばれた著名な詩人であったとすれば、それは馬鳴の別名である可能性は確かに無いわけではない。彼は長い複雑な韻律を用いつつ洗練された梵語で作品を作る、カーヴィヤの歴史の最初期の仏教詩人だったのではないか。岡野 (2018a), 24頁注32。

次に漢訳『分別善惡所起經』の韻文部分は、『分別業報略經』とほぼ同じ梵語原典からの異訳と見なしうる作品であるが、やはりそれに相当する偈を有する。それは次のとおり。

懷恨意忿怒 果敢爲非法 見人窮苦喜 死爲閻獄鬼 (T 17 521a6-7)

この偈には「爲」という、karman にあたる語があるから、たぶん世親のAの偈の方に近い。

世親や『大毘婆沙論』が引用する Dharmasubhūti (法善現) の偈に相当する偈が、このように『分別業報略經』と『分別善惡所起經』にもあり、どの偈も恐らく原文ではAであり、ほぼ同じテキストであったと思われるが、すると世親や毘婆沙師は偈の引用にあたって、同じ有部に属する『分別業報略經』——その作品は当時すでに存在していたであろう——の作者である大勇の名をあげることもできたはずであるが、その名をあげないで、Dharmasubhūti の名をあげているのは、大勇より前の、真の作者(偈の内容に責任をもつ作者)が Dharmasubhūti であると世親や毘婆沙師が見なしていた故に、その『分別業報略經』より古い、有部の伝承(Ur-SGK)の原作者として Dharmasubhūti の名をあげたのではないか⁵³⁾。つまり有部においては、二つのバージョンが存在し、古い Dharmasubhūti の作品を増広したものが、大勇の新しい作品であったのではないか。Dharmasubhūti が古い作者で、大勇が新しい作者なのではないか。

有部の Dharmasubhūti の Ur-SGK → 大勇の分別業報略經 (=分別善惡所起經)

また梵文 SGK の蔵訳のように、SGK の作者を馬鳴 Āśvaghōṣa ではなく、Dhārmikasubhūtiḥgoṣa という作者に帰する伝承が有るのは、現存する梵文 SGK が Dharmasubhūti という有部に属する作者が作った原作品から派生した作品であるという認識があったからであろう。

しかしその有部の Dharmasubhūti と、梵文 SGK の作者が必ずしも同一人物であると考えする必要はないかもしれない。それは上記のように、世親の引用したAの偈は、梵文

53. つまり世親や大毘婆沙論が引用する Dharmasubhūti (法善現) の偈に相当する偈が、このように『分別業報略經』と『仏説分別善惡所起經』にもある以上、両漢訳經のその梵語の原本から世親がその偈を引用することもできたはずであるが、世親はそうしなかった。『分別業報略經』の作者は大勇菩薩とされており、法善現ではないから、世親が1偈を引用したのは、その大勇の作品からではなく、その大勇が増広を行う前の段階にある法善現の作である Ur-SGK からであったと考えられる。大勇の『分別業報略經』にも世親が引用した同じその偈が見つかるわけは、大勇の作品が有部の古い師である法善現の作品をベースにして増広し再編集した作品であるからではないか。

SGKのBの偈とやや表現が違っていた点から判断されるように、両方の作品は完全に同一ではなく、梵文SGKの作者によって、古い Dharmasubhūti の作品は推敲されて「書き直し」をされた作品である可能性があるからである。

梵文SGKは、ある時期に有部から非-有部に流出して六道に再編集された作品であると私は推測しているが、前述の「書き直し」（偈の文面の変更）が施されたのは、非-有部に流出する前なのか後なのかはわからない。もし流出前に、有部の内部で「書き直し」がなされていたとすれば、同じ有部の別の詩人（それは馬鳴の可能性もある）によって推敲され、より洗練された表現になるように書き直しをされた可能性がある。

つまり現存する梵文SGKは、別の人による「書き直し」という製作過程を経ていると考えられるため、二重の著者性を帯びている作品といえるから、第1段階の作者が馬鳴とは別人としての Dharmasubhūti であるとしても、第2段階の洗練された「書き直し」をした作者が馬鳴ではないか、という主張も成り立つであろう。その場合は梵文SGKの作者は、Dharmasubhūti としても、あるいは馬鳴としても、間違いとはいえないことになる。もし原作者 Dharmasubhūti の作品と、別人によって書き直し・再編集を受けた作品とを、当時の人が区別する必要があった場合、後者の作品には原作者ではない名が記されるであろう。Dharmasubhūti の後に増広した作品を作った大勇菩薩こそ馬鳴の別名ではないのか、という主張もありうるであろう。また Dharmasubhūti → 馬鳴 → 大勇 という3段階の発展があるのでは、という見方もありうる。

Sylvain Lévi が主張したように、Dharmasubhūti とは馬鳴の別名である、という主張も完全に否定することはできない。これは Tāranātha の1文（彼の『仏教史』18章）を根拠にする。それは馬鳴と Dhārmika-subhūti (Chos ldan rab 'byor) と Mātṛceṭa と Śūra 等の詩人を全部同一人物と見なす説である。16世紀後半のチベット僧が書いた脆弱な根拠ではあるが、恐らくインドにそのような Dharmasubhūti と馬鳴を関連づける伝承があって、チベットに伝わったのであろう。

SGKの蔵訳は梵文とテキストとしては完全に一致するものの、蔵訳はコロフォンでこのSGKの作者を Chos ldan rab 'byor dbyangs = *Dhārmikasubhūtiḡhoṣa もしくは *Dharmasubhūtiḡhoṣa と伝えることは、先に記した。なぜ -ḡhoṣa が付いているのであろうか（-*ḡhoṣa でなく、-*nirḡhoṣa, -*svara である可能性も無いわけではないが）。-*ḡhoṣa の語が付いているのは、Aśvaghōṣa と関連づける意図があったのではないだろうか。この Dharmasubhūti という人物は Aśvaghōṣa であることを暗示するため、狐が化けた時のように、-ḡhoṣa という尻尾が付いているのだろうか。もしかしたら *Dhārmikasubhūtiḡhoṣa という名は、Dharmasubhūti と Aśvaghōṣa との二つの名が混じり合った名かもしれない。

最後に一つだけ確認しておきたいのは、この SGK という作品⁵⁴⁾、もしくはその有部における類似の作品が、本当に馬鳴の時代に遡る可能性はあるのか、という点である。その成立年代推定の一つの根拠は先に述べたように、『大智度論』による引用である。『大智度論』を仏訳して研究した E. Lamotte は、『大智度論』が西北インドの有部に属した学僧により 4 世紀初めに作られたと推測した (Tome III, pp. XL, L)。その年代論に従えば、『分別業報略経』(≡『仏説分別善悪所起経』) の梵語原本の成立の下限を『大智度論』より前、4 世紀初め以前に置くことができよう。私自身は『大智度論』の龍樹を『中論』の龍樹と完全に同一視する学的立場に賛成しないが、もしその意見に従うなら、その下限は更に百年以上古くまで移動する。つまり馬鳴の時代にまで下がる可能も出てくる。

もう一つの根拠は、SGK にもある法善現の 1 偈が『大毘婆沙論』にもあることであり、そのことによって 3～4 世紀には法善現の作品が有部で知られていたといえるのではないか。

さらにもう一つの根拠は、『仏説分別善悪所起経』という漢訳が作られた年代の古さである。『仏説分別善悪所起経』は『出三蔵記集』巻四の「失訳雑経録」に失訳經典の一つとして挙げられ、また法経の『衆経目録』でも「衆経失訳」に挙げられているが、費長房『歴代三宝紀』以降の目録では、安世高の訳であるとされる。そのため通常は費長房の記述の信憑性を疑い、後代に安世高に仮託された、訳者不明の作品(失訳)と見なされるべきであろうが、しかしこの作品の後半の韻文部分については、訳語を検討してみると、本当に安世高の訳である可能性も皆無というわけではないようである。費長房の目録は信頼できないが、結果的にまぐれ当たりということもありうる。先に示した餓鬼の名の訳語以外でも、『仏説分別善悪所起経』の韻文部分にはあちこちに古めかしい訳語が使用されていて、宋の文帝の時に僧伽跋摩に訳出された『分別業報略経』よりも相当に時代の距たりがある古い訳であることは疑いない。『仏説分別善悪所起経』の(前半の付加された散文を含まない)韻文部分だけの翻訳年代は、古訳時代の 3 (± 1) 世紀、遅くても 4 世紀後半あたりが下限と、大まかに見当を

54. もし SGK の蔵訳・漢訳 2 本・パーリ語訳などの翻訳年代だけを根拠にして梵文 SGK の成立年代を推測するならば、梵文 SGK がインドで遅くとも 9 世紀初頭までに成立していたということしか言えない。SGK の蔵訳は、チベット最古の経録『デンカルマ目録』に載っているので、遅くとも西暦 824 年までにチベット語に翻訳されていたことがわかる。蔵訳は漢訳やパーリ訳より早い。中国で法天や日称等によって漢訳されたのは宋代であり、また SGK のパーリ語訳も 11～12 世紀にミャンマーでなされたものと推測される。梵文 SGK の作品の成立年代の議論においては、9 世紀初頭という、蔵訳の訳出年代から導き出されたその下限よりどれだけ古く遡らせるかが問題になるが、そのため有部の『分別業報略経』という SGK の姉妹的な作品の成立年代が重要になる。岡野 (2018a), 15 頁。

つけることができるであろう⁵⁵⁾。しかしその韻文部分の漢訳が本当に2世紀後半の安世高まで遡れるかどうかは、現時点での簡単な調査では判断が難しく、今後漢訳語の詳細な調査を行うことが必要となる。

以上から、有部においてSGKに似た作品が3～4世紀には成立していたことは文献学的に見て、確からしく思われるが、2世紀まで遡るかどうかは確実とはいえない。

(馬鳴はカニシュカ王と同時代の人とされるから、2世紀の人であろう。)

少なくとも、以上の議論を踏まえれば、Sylvain LéviのようにSGKの作者を馬鳴(Dharmasubhūtiと同一人物としての馬鳴)と見なすことは、現代の仏教学においてもなお弁護可能な一つの立場であるといえる。『分別業報略経』や『大智度論』との関係など、Léviの時代よりもSGKについての知識が増えた分、SGKの著者についても検討すべき問題が複雑化した。今後さらにSGKと『分別業報略経』に関連して、別の新たな資料が見つかることが望まれる。

※本研究はJSPS 科研費17K02217の助成を受けたものである。

<キーワード> Devāṭīśayastotra, Devatāvimarśastuti, Śāṅkarasvāmin, Subhāṣitamahāratnāvadānamālā, Mālikāvadāna, Avadānanaśataka, Avadānamālā, Tathāgatajanmāvadānamālā, Lalitavistara, Śaḍgatikārikāḥ, Jayamuni

(九州大学大学院教授, Ph.D.)

55. このように判断した理由については、岡野(2018a), 20頁注25を参照。